SHINKA Published by Religious Organization ALEPH

# 進化

SHINKA

- 〈特集〉情報と心 ── 情報過多の時代を乗り切るために
- 〈レポート1〉夏期集中セミナー「大いなる慈愛」
  〈レポート2〉ステップアップ教学システムスタート！
- 〈連載〉ジャータカ　第2回「サンカ輪廻転生談」
  〈連載〉休まずたゆまず真理の修行　第2回「立位礼拝」

Vol.43
August 2004



大乗の発願

ホー
湖面に映る虚像のような
様々な幻影に引きずられ
輪廻の大海を浮沈する生き物たち
彼らすべてが
絶対自由・絶対幸福なる
マハーヤーナにて
安住することができるよう
四無量心込めて
大乗の発願をいたします



# 進化

CONTENTS

SHINKA 2004 .8 August VOL.43

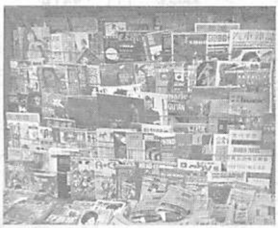
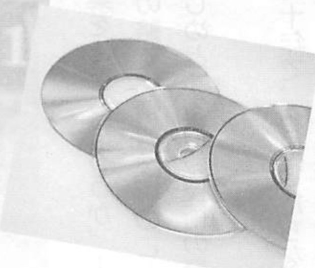
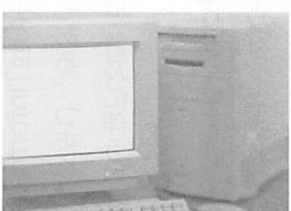
特集

# 情報と心

## ――情報過多の時代を乗り切るために

現代に生きるわたしたちの最も誘惑されやすいもの、これを仏典では――食べ物といっているけれども、それは何であろうか。そう考えた場合、情報であると言うことができる。

（一九九〇年三月十二日　富士山総本部）


・・・現代というものは情報が氾濫している。それは仏陀釈迦牟尼が生まれた、今から二千五百年前に比べて、より一層悪い傾向にある。そしてわたしたちは、二十数歳に至るまで、あるいは三十数歳に至るまで、あるいは四十数歳に至るまで、あるいは五十数歳に至るまで、あるいは八十数歳に至るまで、その悪い情報の中に生きていた。当然この情報というものは、信とぶつかり合う傾向があるだろう。

（一九八八年十月三日　富士山総本部）

皆さんは、「IT革命」という言葉をご存じだろうか。ITとは「Information Technology（インフォメーション・テクノロジー）」の略で、情報技術のことである。つまり、「IT革命」とは、コンピューターやインターネットをはじめとする情報技術の発展・普及に伴う、社会の急激な変化のことをいう。

このIT革命により、ここ十年・二十年で、わたしたちを取り巻く情報通信環境は劇的な変化を遂げた。情報流通の自由度は飛躍的に増大し、どこにいても、インターネットから必要な情報をタイムリーに引き出すことが可能になった。また、自らが世界に向けて情報の発信者になることもできるようになってきている。

しかし反面、わたしたちの心は、マスメディアやインターネットを通して送られてくる大量の情報に、無造作にさらされることにもなった。そしてその大半が、わたしたちの意識を引き下げる〝有害な情報〟にほかならない。このことは、真理の目から見れば、大変憂慮される事態であると言えるだろう。

そこで今回の特集では、情報と心の関係を取り上げ、皆さんに現世的・煩悩的な情報の恐ろしさを再認識していただくと同時に、この情報過多の時代をどのように乗り切っていけばいいのかについて、検討していくことにしたい。



初めに、一風変わった心理学実験からご紹介することにする。といっても、この実験はかなり有名なので、ご存じの方も多いことだろう。

それは、一九五〇年代にアメリカやカナダの大学で行なわれていたものである。ここでは、カナダのマックギル大学での実験を見てみよう。

まずは、男子の大学生を対象にアルバイトの募集をかけた。一日二十ドルで何日やってもOK。これは、当時としてはかなりの高給だった。〝仕事〟はいたって簡単で、「一日中ベッドの上に寝そべって、何もしないでいる」というものだ。それも、部屋の温度・湿度は人間にとって最適になるように調整されており、また、横になるベッドも、柔らかくて居心地の良いものが用意されているという、申し分のない条件である。

ただ一つ違うのは、外部から入ってくる感覚的刺激（つまり情報）が最小限になるように工夫されていることだ。例えば、

・目はプラスチック製の覆いがかけられる→光は入ってくるが、物の形を見ることはできない。

・耳にはフォームラバー製のU型の覆いがかぶせられる（これだけでは完全に音をシャットアウトすることができないため、エアコンを付けることによって単調な音だけが聞こえるようにする）→意味のある音は何も聞くことができない。

・手の指は綿製の手袋で包む。さらにその上を腕のひじのところから指先までを、ボール紙の筒で覆う→腕の曲げ伸ばしはできるが、手で直接何かを触ることはできない。

といった具合である。

当然、一日三度の食事は与えられ、トイレに行くのも自由だった。このときばかりは、上記の制限は緩められることになる。

こんな快適な環境で、しかも寝ているだけで高額のお金が支給されるなんて、なんと効率のいいアルバイトかと思われることだろう。



普通なら何日でもこの環境に浸り、楽々とお金（お小遣い）を貯め込みたいと考えるはずである。

果たして、結果はどうだっただろうか――。

実は、大方の予想に反して、ほとんどの学生が二、三日でギブアップしてしまったのである。最高記録は一週間というものもあったが、これは例外的であった。一日中何もすることがなく、ただ寝転がっているだけという環境は、楽などころか相当に苦痛だったのである。

最初は、多くの人が寝ることによって時間をつぶそうとした。しかし、それも長くは続かず、やがて歌を歌ってみたり口笛を吹いたりする。独り事を言う人も現われた。両腕にはめられた筒をたたき合って、感覚的刺激を得ようとした人もいた。このようにして何とか退屈を紛らそうとしたのである。

そして、やがて被験者たちは、幻覚とおぼし

きものを見るようになっていく。初めは、光の点や線のほか、簡単な幾何学模様が見えるという。次いで、それがだんだん複雑な絵になってくる。たくさんのリスが南京袋（なんきんぶくろ）を肩に担（かつ）いで一列にそろって行進している光景がありありと見える、と報告する人さえいた。

幻覚の内容は、自分で変えることはなかなか難しいらしい。自分で意思して見ようと思っているものがなかなか見えず、目の前には意味不明の「眼鏡」が現われたり、「ペン」がずっと見え続けたりするだけなのである。

幻覚は、視覚的なものだけでなく聴覚的なものもあった。それは、幻覚を見ている最中に人の話し声が聞こえるというものだった。

この実験の途上で、被験者にもう一つの顕著な変化が現われた。それは、極度の無気力に襲われるとともに、頭が混乱してしまうという事態だった。一つのことを考えようとしても、それが非常に難しく、すぐに意識が途切れてしまうのだ。簡単な計算すら手が着かない。筋道を立てて考えるということが全くできなくなり、「もうどうにでもなれ」と投げやりになる。自分から何かをしようという気が失せ、無気力に襲われる。そして、多くの人がとりとめもない白昼夢にふけるようになった。

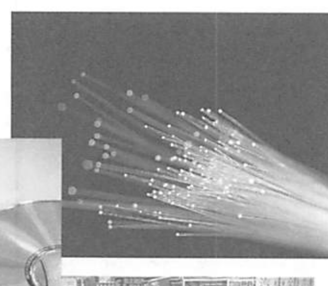
このように幻視・幻聴・混乱・無気力といった形で、精神に異常を来たし始めた段階でギブアップ、ということになったわけである。

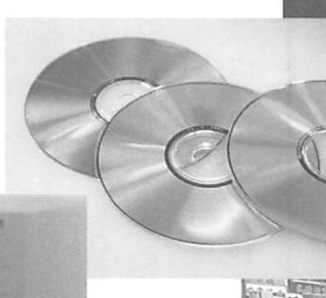
実験者は、実験期間中に被験者に対して若干の〝変化〟を与えた。それは、例えば株式市況を報告するラジオ放送といった、興味のない人にとっては苦痛以外の何ものでもないような単調な情報であった。ところが、普段の生活では決して興味を持たないはずの被験者が、この実験期間中においては、その情報を異常なほどに熱心に聞き続けたという。

この「感覚（情報）遮断実験」は、一つの重要な示唆をわたしたちに与えてくれている。それは、わたしたち人間は、感覚器官を通して入ってくる情報なしでは耐えられない、常に外部から何らかの情報を吸収していなければ生きていけない、ということだ。逆に言えば、だれしも情報に対してものすごい〝飢え〟を持っている、ということでもある。

そしてこの〝飢え〟こそが、情報に対する飽くなき欲求を生み出し、現在の「高度情報化社会」を出現させる原動力となってきたのである——。











Chapter 1

# 情報爆発と進化するネットワーク環境

## 情報の爆発的増大

### ◎メディアなしには成り立たない日常生活

わたしたちの身の回りはものすごい数の情報メディアで満ちており、そこから流れてくる様々な情報は、間断なくわたしたちの五感（主に視聴覚）と意識を刺激し続けている。

情報メディアは、大きくマスメディアとパーソナル・メディアに分けることができる。マスメディアとは、新聞・週刊誌・雑誌・チラシ・看板（電光掲示板を含む）・単行本・漫画本・ラジオ・テレビ（衛星放送やCATVを含む）・映画・レコード・テープ・ビデオ・CD・MD・DVDなどで、パーソナル・メディアとは、固定電話・携帯電話・ファックス・パソコン・カメラ・デジタルカメラ・ビデオカメラ・テープレコーダーなどである（※パソコンはマスメディアの要素も持っていると言えるだろう）。

これらの情報メディアは、わたしたちに必要な情報を提供してくれたり、重要な情報を記録・保存したり、あるいは、情報発信の役を担ってくれたりしている。それらは、わたしたちの日常生活の隅々にまで入り込んできており、わたしたちはもはや、情報メディアなしに

は、そしてそれらを通して送られてくる情報なしには、一日も生活することができない状態になってしまっている。

冒頭に紹介した実験でもおわかりのとおり、わたしたちの生活環境から「情報」を抜き去った場合、わたしたちの心はそれに耐え得るだけの強さを持っていない。このことは、情報に対するわたしたちのとらわれがあまりにも強く、また、逆に言えば、情報がわたしたちに与える影響は想像を絶するほど大きいものがある、ということを表わしている。

そして、これらのメディアを媒体として行き交う「情報」の量は、年を追うごとに、ますます猛烈な勢いで増えてきているのである。

## ◎速まる情報量の倍加スピード

では、一体どれくらいのスピードで増大してきているのだろうか——。まずは、それについて見ていくことにしよう。

一九七三年、ＯＥＣＤ（経済協力開発機構）の要請を受けた経済学者のジョージ・アンデルラ氏は、世界のすべての情報量が倍増する速度を測定しようと試みた。

人類が集めた情報は、西暦元年までに収集された量を一単位とすると、その後の千五百年間で二倍になり、それから二百五十年を経た一七五〇年に四倍、さらに百五十年後の一九〇〇年に八倍という形で、急速に増大していったという。その後、一九五〇年、一九六〇年、一九六七年、一九七三年と、倍加するスピードはどんどん速くなってきている。

当時の予測では、次は一九七八年に倍増の時期を迎えるのではないかと考えられた。一九七八年といえば、ちょうど世界的にコン

ピューター社会が始まった年だ。それから二十五年以上経った現在、IT革命に伴って、あたかも宇宙創造のビッグバンを思わせるほどの〝情報爆発〟が進行しているのである。

## ◎一年間の保存情報量は三年で二・五倍に

同じく全世界の情報量をターゲットにした、別の調査がある。カリフォルニア大学が行なっているもので、最新の調査結果が二〇〇三年に発表された。

それによると、二〇〇二年の一年間にデータで伝送された情報量は、デジタル情報に換算して十八エキサバイト（千八百京（きょう/けい）バイト（注1）で、そのうち、保存された情報量は五エキサバイト（五百京バイト）に上った。一九九九年に行なわれた同調査では、一年間に保存された情報量は二エキサバイト（二百京バイト）だったため、三年間で二・五倍に膨れ上がったことになる。

※注1　京：数字の単位。十の十六乗のこと。一・十・百・千・万・億・兆・京……。エキサバイトについてはコラム参照。



コラム

## ◎情報量を図る単位――「バイト」

パソコンのハードディスクやフロッピーディスク、コンパクトディスク（CD）などの記録媒体の容量は、その単位に「バイト」が使われている。これはデジタル情報の量を表わす単位の一つである（最小単位は「ビット」で、一バイト＝八ビット）。

皆さんが使っているパソコンでは、半角文字が一バイト、全角文字が二バイトとなっている。わかりやすく言えば、この『進化』の一ページ当たり（イラストや写真なし）の情報量が約一キロバイト。だから、一冊分（約百六十ページ、文字部分のみ）でだいたい百五十キロバイトの情報量ということになる。

ちなみに、以下の内容は、カリフォルニア工科大のRoy Williamsの「Data Powers of Ten」のページ（一九九九年時点）を基にしたものである。参考にしていただきたい。



・バイト（8ビット）
　1バイト：1文字（半角）
　2バイト：1文字（全角）
・キロバイト（1,000バイト＝10の3乗バイト）
　1キロバイト：『進化』1ページ分
　150キロバイト：『進化』1冊分
・メガバイト（1,000,000バイト＝10の6乗バイト）
　1メガバイト：短い小説、または3.5インチフロッピーディスク1枚
　2メガバイト：高解像度の写真1枚
　500メガバイト：CD-ROM1枚
・ギガバイト（1,000,000,000バイト＝10の9乗バイト）
　2ギガバイト：デジタルビデオディスク（DVD）の映画1本
・テラバイト（1,000,000,000,000バイト＝10の12乗バイト）
　2テラバイト：学術研究図書館1つ
・ペタバイト（1,000,000,000,000,000バイト＝10の15乗バイト）
　8ペタバイト：ウェブ上で得られる全情報
　200ペタバイト：全印刷物
・エキサバイト（1,000,000,000,000,000,000バイト＝10の18乗バイト）
　2エキサバイト：1年間に全世界で生み出される情報の総量（※1999年時点）
　5エキサバイト：人類がこれまでに話した全単語（※1999年時点）
・ゼッタバイト（1,000,000,000,000,000,000,000バイト＝10の21乗バイト）
・ヨッタバイト（1,000,000,000,000,000,000,000,000バイト＝10の24乗バイト）

※正確には、1キロバイト＝1024バイトで、1メガバイト＝1024キロバイト、1ギガバイト＝1024メガバイトという形で、1024倍ごとに単位が大きくなっていく。

## ◎肥大化するインターネット環境(日本の場合)

また、調査範囲は日本だけになるが、二〇〇二年二月に旧郵政研究所が行なった「インターネットコンテンツ統計に関する調査研究」というものがある。これは、サーチロボットを使ってJPドメイン(注2)の特徴について調べてみたものだ。

それによると、サーバ数十九・七万台(二九・六%)、ページ数六千五百五十五万ページ(七・四%)、ファイル数一億七千三百八十八万ファイル(一三・九%)、データ量五千二GB(ギガバイト)(二五・七%)〈カッコ内は対前年比伸び〉で、いずれもピーク時に比べると緩やかではあるものの、堅実に増加し続けていることがわかる(表1)。

また、図1は九八年二月の数字を一〇〇として、その拡大を経年で比較したものである。サーバ数で約五・五倍、ページ数で約六・四倍、ファイル数で約九・二倍、データ量で約一六・四倍に成長したことがわかる。

こうした大量情報が生み出される背景には、それを支えるだけの情報に対する莫大な需要が存在する、ということにほかならない。つまり、多くの人がこの情報ネットワークに参画することで、自分の人生、自分の生活を豊かにするために、いろいろな情報を手に入れたがっているのだ。

※注2　JPドメイン:「ドメイン」とはインターネット上の住所のようなもので、ホームページや電子メールアドレスに使用される名称のこと。JPドメインとは、日本のカントリーコードのこと。

| | サーバ数（台） | ページ数（万ページ） | ファイル数（万ページ） | データ量（ＧＢ） |
|---|---|---|---|---|
| 1998年 | 36,000 | 1,020 | 1,891 | 305 |
| 2月 | … | … | … | … |
| 1999年 | 75,000 | 2,950 | 5,822 | 1,024 |
| 2月 | 108% | 189.22% | 207.88% | 235.74% |
| 2000年 | 95,000 | 4,250 | 9,627 | 2,214 |
| 2月 | 26.67% | 44.07% | 65.36% | 116.21% |
| 2001年 | 152,000 | 6,101 | 15,260 | 3,980 |
| 2月 | 60,00% | 43.55% | 58.51% | 79.77% |
| 2002年 | 197,000 | 6,555 | 17,388 | 5,002 |
| 2月 | 29.61% | 7.44% | 13.94% | 25.68% |

下段%は対前年比

表１ ＪＰドメインの統計的推移

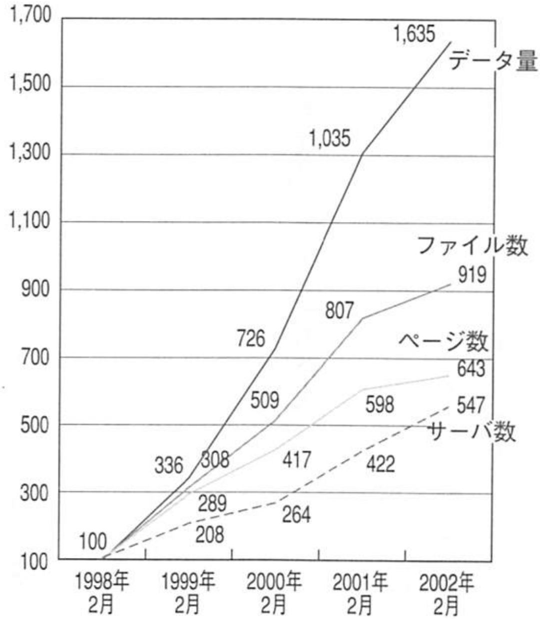



図１ JP ドメインのコンテンツ量発達の推移（98 年２月を 100 とした場合）

## ネットワーク環境の急激な進歩

### ◎ムーアの法則――「五年で十倍」

これまで、コンピューターを構成する部品であるトランジスタやLSI（※集積回路（IC）の一形態）の性能は、一年半で二倍、五年で十倍の飛躍的進歩を遂げてきた。この「五年で十倍」という法則性は、一九六五年に米国インテル社のゴードン・ムーアが提唱したため、「ムーアの法則」と呼ばれている。

ちなみに、世界初のコンピューターは、一九四六年に米国で誕生したエニアック（ENIAC）で、一万八千本の真空管を持ち、重量は三十トン、一秒間に五千回の計算を行なうことができた。しかし、それから五十余年が経過した現在、だれもが手軽に購入できるパソコンでさえ、重量はエニアックの一万分の一程度、計算速度は約十万倍に達している。これが最先端のスーパー・コンピューターなら、少なく見積もっても百億倍（十桁（けた））以上の性能と考えていいだろう。

五十余年という期間に十桁以上という飛躍的な進歩は、他の技術では例を見ない、かけ離れたものとなっている。

### ◎電気の時代から光の時代へ

しかし、ここのところのインターネットに代表されるITサービスの爆発的な需要の増大は、このムーアの法則程度の進歩ではまかない切れなくなってきている。その増大速度は、一年半で五倍から十倍、五年でなんと百倍から千倍に達する勢いなのである。

これは、コンピューターよりもネットワー

コラム

## 驚異のナノテクノロジー

現在、コンピューター技術の向上において注目されつつあるのが、ナノテクノロジーを使った量子コンピューターである。

ナノとは「十億分の一」の意味であり、一メートルの十億分の一という微小世界を扱うのがナノテクノロジー（通称ナノテク）だ。これまで微小世界を表わす言葉の代表はマイクロ（百万分の一）だったが、ナノはそのさらに千分の一である。

ナノテクの素晴らしいところは、原子や分子を一つずつ操ることを可能にした点である。それにより、現在のコンピューターで使っているものとは全く異なる「一量子ビット」という情報表現を使って、超並列計算を行ない、従来とは桁違い（一兆倍以上になるといわれている）の計算速度の達成が期待できるという。

もし、この夢のテクノロジーの結晶である量子コンピューターが現実のものとなるなら、国会図書館に収蔵されているすべての情報を角砂糖一個の大きさに収めたり（場合によっては、世界中の全情報を角砂糖一個分に収めることも可能になるかもしれない）、数個の段階でガン細胞を発見したり、あるいは、一つ一つの原子や分子を組み立てて物質を完成させることができるという。

これまでSFの中で描かれてきた世界が、近未来において、まさに現実になろうとしているのである。

クに関して深刻な問題となっている。ＩＴサービスにおける需要とは、高速かつ大量の情報をやり取りしたいというネットワークに対する要求だからである。

今や世界が、電気に代わって光を使う「光ネットワーク」の時代へと動きつつあるのは、このような背景に基づいているのだ。

## ◎ユビキタスな環境の到来へ

最近のインターネット利用料金の低廉化による常時接続の普及、光ファイバーを使った「光ネットワーク」による高速ダウンロード、そして携帯電話に代表されるモバイル（移動）やワイヤレス（無線）技術の発達による、場所の制約を超えたインターネットの利用など、これまで利便性の障害となっていたいくつもの壁が突破されることによって、わたしたちの前に、「いつでも」「どこでも」インターネットに接続でき、「何でも」やり取りのできる環境が整いつつある。これにより、日常生活のあらゆる場面で、インターネットから得た情報を生かすことができるようになるのである。

このような新しい情報通信環境を、専門用語で「ユビキタス」な環境と呼んでいる。語源はラテン語で、「至る所にある」「あちこちに姿を現わす」という意味だ。インフラ（基盤整備）から見たＩＴ社会の未来像は、あたかもコンピューターやネットワークが「水や空気」のような存在になる、ユビキタスな世界なのである。

Chapter 2

# インターネットの危険性

## 大半が〝煩悩を増大させる有害な情報〟

このように、コンピューター技術と通信技術の進歩により、わたしたちを取り巻く情報通信環境は、ものすごい勢いで変化し続けている。特に、全世界のネットワークを相互に接続した巨大なコンピューター・ネットワークであるインターネットの発達は、その変化を強力に後押ししている。そして、わたしたちはパソコン一台、あるいは携帯電話一台を手にするだけで、世界中のありとあらゆる情報に触れることが可能になったのである。

では、このような環境にどっぷりと浸かる中で、わたしたちが日常触れ続ける「情報」とは、一体どのような性質のものなのだろうか？ それはわたしたちの修行を進める上で〝有益な情報〟なのだろうか、それとも修行を遅らせる〝有害な情報〟なのだろうか？——。

もちろん、中には有益とも有害とも言えない情報もあるだろうが、大半が有害な情報であることは言うまでもない。なぜなら、それらの情報はわたしたちの雑念を増やし、意識を現世に縛り付け、高い世界への転生や解脱・悟りへの道筋を閉ざしてしまう。それだけでなく、下位のチァクラ——ムーラダーラ・チァクラ（嫌悪）、スヴァディスターナ・チァクラ（性

欲・無智)、マニプーラ・チァクラ(食欲・貪り)——を刺激することによって、わたしたちを三悪趣へと至らせる〝煩悩的記憶修習〟を誘発するからである。

現代社会において、わたしたちの魂を本質的に向上させる情報(＝真理のデータ)に出合うことは、本当に稀なのだ。

以下の説法は、テレビ・ラジオ・新聞・雑誌などの一般的なマスメディアについて説かれたものだが、これらはインターネットを中心とした最近の情報通信環境においても、そのまま当てはまる。真理の目から見るなら、まさに、こうした情報に触れることそのものが「悪業」と言えるのだ。

したがって、これらの情報から身を守るためには、できるなら、インターネット等の利用を必要最小限にとどめるに超したことはないのである。なお、情報の具体的な〝有害性〟については、後述することにする。

---

しかし、外的環境はそれほど甘くない。もうこの地球そのものが、マーラ、つまり悪魔の支配下にあるわけですから、皆さんの見るもの、聞くもの、あるいは匂いによって感じるものや、味覚によって味わうもの、触覚によって得られる情報のすべてが、そして情報のすべてが皆さんの煩悩を揺さぶり、そして皆さんをどんどん感覚に縛り付け、そして、アパーナ気の修習をさせる方向へと向かうはずです。(一九九三年十二月十八日　亀戸道場(参入の儀式))

---

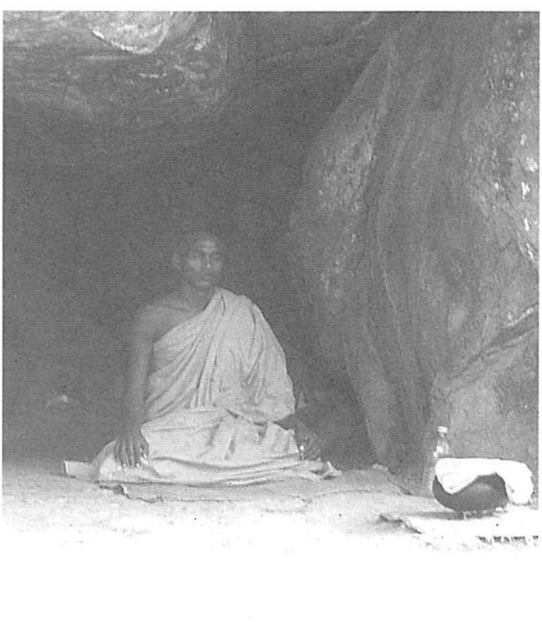
わたしたちは、氾濫した情報の中に生活しています。したがって、オウム真理教の会員および信徒の皆さんも、何もしないで

も、結果的に皆さんは、悪業を積んでいることになるのです。

この「悪業」という言葉を発する場合、その定義をはっきりと述べておく必要があります。その定義とは何か。それは、わたしたちを三悪趣へ至らしめる法則の実践、あるいは、他の魂を三悪趣へと至らしめる法則の実践、この実践こそが「悪業」であると。——このような形で定義したならば、皆さんは、日々皆さんの目の前にある情報、これを一つ一つ吟味することにより、皆さんが悪業を積んでいることはよく理解できるはずです。

したがって一般的に、インドにおいては、あるいはチベットにおいては、リトリート修行、つまり、隔絶した環境のもとでの修行をよしとするのです。

つまり、わたしたちは、知らず知らずのうちに、この現世を生きる場合、その現世に存在する多くの情報なるがゆえに、知らず知らずのうちにアパーナ気やサマーナ気を強め、そして地獄・動物・低級霊域へと転生すると。（一九九四年一月九日　第四サティアン）



…今人間界とつながっているアストラルの世界も、かなり下降の傾向にあると。これはわたしがよく話すことだけど、テレビ番組をひねってごらんなさい。まず殺し合いの場面、次はセックスの場面、そして食い物の場面、これ以外は今ニュースしかないよね。

で、こういう情報だけを入れて、つまりこれはコーザルのデータだとしましょう。そして、イメージ化したアストラルの世界をあなた方が持っているとしたならばだよ、あなた方はどうして神聖なイメージをね、持つことができようか。というのは、あなた方が選択の余地のない様態をつくられているわけだね。これを食ったらうまいと、例えば。例えばこうしたら楽しいと。例えば嫌なものは殺してしまえと。そうでしょう。（一九八七年十月十八日　大阪支部）

つまり、わたしたちは無意識のうちに、いろいろ多くの情報を取り込んでいます。例えば、言葉について言うならば、あるパターンが生じたとき、そこで怒りの感情を表わす修習だとか、あるいは嫉妬の感情を表わす修習だとか、あるいは、例えば何かの目標に向かい挫折したときには、あきらめの心を表現する修習といったものを、わたしたちは、テレビやラジオ・雑誌等によって経験し、そしてそれを自分のものとして受け止め、同じシチュエーション、同じ状態になった場合、そのような展開をするわけです。しかし、これらは、わたしたちの下の世界へ転生する傾向を強める結果となります。（一九九一年九月八日　京都・長岡京文化会館）



## 仮想世界と現実世界の境界の破綻が生み出す病理

このように下降傾向の情報が洪水のように押し寄せる中、情報メディアが持つ特性とも絡んで、かつては見られなかったような病理が進行しているのも事実である。それらは、「メディアが作り上げる仮想世界（イメージの世界）」と「肉体を持って存在している現実世界」との境界がなくなってしまうところに、大きな因がある。

以下、衝撃の事件をいくつかご紹介しよう。事件の概要は、「事件（3）」を除き、小此木啓吾（おこのぎけいご）著『「ケータイ・ネット人間」の精神分析――少年も大人も引きこもりの時代』からの引用である。

## ◇事件(1)
### ——航空機マニアによるハイジャック事件

　一九九九年七月二十三日、羽田発新千歳行き全日空六一便が、乗客・乗員五百十七名を乗せて離陸して二分後、まだ上昇中に事件は始まった。

　男は、「右手に持った包丁をスチュワーデスの脇腹の位置で構え」、「コックピットのドアをノックさせ」操縦席に乗り込んだ。機長と二人になった犯人は、機長に命令して自分の思うとおりに飛行させた。

　彼はシミュレーション・ゲームを楽しむ感覚で、無謀な要求を次々に機長につきつけた。そのために六一便は、「通常三万フィートの高度で飛行するが、六一便は三〇〇〇フィートまで下げ」とても危険な状態だった。しまいには「レインボーブリッジをくぐったり、宙返りをしたかった」と供述している。やがて彼は、ついに、自分自身に操縦させろといい出した。それを拒否した機長を刺し殺し、操縦席に陣取り、みずから操縦を始めた。その結果、「機体は、地上一〇〇〇フィート（約三〇〇メートル）まで急降下。コンピュータの『テレイン（地上接近）』という警告音声がけたたましく鳴り」出した。

　彼はパソコンのフライト・シミュレーターに熱中していた航空マニアで、「パソコンのフライトシミュレーターゲームのCDを十枚ぐらい持って」そらんじていたという。それだけに頭の中では操縦にも詳しかった。

　ここでついに取り押さえられたのだが、この西沢容疑者は、もともと飛行機に関するものすごいマニアで、その知識は大変な


全日空機乗っ取り
発生から１週間
航空機に強い執着
容疑者、後悔・動揺見せず

乗っ取り、一時操縦
28歳容疑者「自分でやりたかった」
地上接近の警報音
全日空機

「おれが操縦」凍る乗客
全日空機乗っ取り

ものだったという。そして、シミュレーション・ゲームをそのまま本物の飛行機の操縦で実行することにすべてを賭(か)けたようだ。・・・・

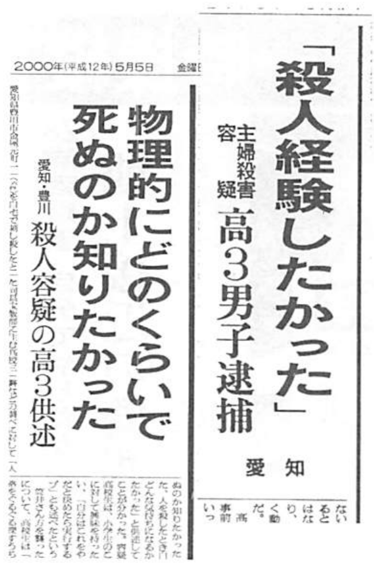
シミュレーション・ゲームは、一応遊びの世界としてつくられたものなのだが、このマニアにとって、それは遊びの世界を超えた、現実のもの、実行すべきものになった。そこに「遊び」から「狂」になる心の病がある。

### ◇事件(2)
### ――十七歳少年による純粋殺人事件

二〇〇〇年五月一日、愛知県豊川市で、見知らぬ男が民家に侵入し、六十五歳の主婦を刃渡り約二十センチの文化包丁で惨殺した。殴打、刺し傷、四十カ所近い傷痕(きずあと)が

あったという。逮捕された容疑者は何と十七歳の高校三年生だった。

全く面識のない婦人に、なぜそのように残虐な殺人を行ったのか。「人が物理的にどのくらいで死ぬのか知りたかった。また、人を殺したとき自分はどんな気持ちになるか知りたかった」（『朝日新聞』五月五日付け）と彼が語ったことで、さらに周囲に衝撃が走った。


2000年（平成12年）5月5日

「殺人経験したかった」

主婦殺害容疑　高3男子逮捕

愛知

物理的にどのくらいで死ぬのか知りたかった

愛知・豊川　殺人容疑の高3供述

やがて精神鑑定を受け、その結果は「純粋殺人」という診断とのこと。つまりそれは、殺人をしたいから殺してみたかった、あるいは、人を刺すとどんなふうになるかを知りたかったための殺人だったという意味である。

## ◇事件(3)
## ——十七歳少年によるバスジャック事件

二〇〇〇年五月三日昼過ぎ、福岡天神行きの西日本鉄道高速バス「わかすく号」は、乗客二十二人ばかりを乗せて、定刻どおり佐賀駅バスターミナルを出発した。

走り出して半時間を過ぎたころ、大きな包丁（牛刀）を持った若い男が突然立ち上がり、「天神に行くな。このバスを乗っ取ります」と声を上げた。彼は驚くほど冷静に

乗客らを後ろの席に集め、「言うことを聞かないと、殺します！」と威嚇。以降、十五時間以上にわたってバスを占拠した。

その間、指示を聞き逃した人に容赦なく斬り付け、また、逃走者が出るたびに車内にいる乗客に斬り付けるといった形で、結果的に一人を殺害、二人に大ケガを負わせた。このほか、バスから飛び降りた乗客ら三人の男女も、骨折などの重症を負った。

翌早朝、警察の特殊急襲部隊SATが突入。閃光(せんこう)と煙の中、ついに少年は逮捕され、乗客は解放された。

「少年は、インターネットの掲示板で『（お前は）存在感＝なし』と指摘され、『存在感―欲しい』と返答した。町沢さん（精神科医の町沢静夫氏）は『犯罪で存在感を示そうとしてヒーローになることを目指したのだろう…（略）…』と分析する」（朝日



バス乗っ取り1人死亡

佐賀→広島

17歳、刃物持ちろう城

負傷者も 女性数人を人質に

「劉備の気分」英雄を気取る

バス乗っ取りの少年

西鉄の高速バス乗っ取り事件で、殺人などの疑いで再逮捕された佐賀市内の少年(一七)が、広島県警などの合同捜査本部の調べに対し、「バスを乗っ取っている時、『三国志』に登場する英雄、劉備になった気分だった」などと供述してい

乗っ取り少年

HPでいじめの対象？

「存在感ない」など悪口

新聞）と、インターネット上でも孤立したことを思い知らされたことが、事件の意思決定の動機となったらしい。

逮捕後も遺族への謝罪の言葉は一切なく、「『バスを乗っ取ったときは、三国志に登場する英雄で、あこがれの劉備（りゅうび）になったような気分だった。彼のように生きたかった』また、『僕の事件は新聞の一面で報じられているか』などと、盛んにマスコミでの扱いを気にした」（同）ということである。

彼は、インターネットの掲示板での喧嘩（けんか）や争いによって発揮していた破壊性を、現実の世界の中で発揮してしまった。この〝現実世界と仮想世界の境界破綻〟が、凄惨（せいさん）な事件に結び付いてしまったと考えられる。

### ◇事件⑷
### ――十七歳少年によるハンマー殴打事件

二〇〇〇年五月十二日に神奈川県内を走るＪＲ根岸線の電車の中で、「九号車の乗客は四十八歳の男性と少年の二人だけでしたが、電車が港南台駅を出ると、少年は着ていた黒っぽいジャンパーのポケットからハンマーを取り出して、寝ていた男性の前頭部と側頭部を二回殴りつけたのです」「……男性は突然頭を殴られたので飛び起きてハンマーを取り上げた。そうしたら少年は急におとなしくなった……」「……少年には殺意があったと見て、殺人未遂容疑で逮捕しました」（『週刊新潮』六月一日号）

彼は、家の中に引きこもっていたわけではない。実は、インターネットの世界に引きこもっていた。・・・・

彼は、周りから次のように評されていた。「風貌（ふうぼう）からして髪の毛ボサボサのオタクそのもの。アニメオタクで、コンピューターグラフィックもよくやっていたし、インターネットもやっていました」「マンガの『鉄人28号』に出てくる、小さくて可愛らしい男の子の名前が正太郎」（『週刊新潮』六月一日号）。この正太郎の語源に由来するショタコンという主人公がいるが、彼は、「俺（おれ）はショタコンだ」といっていた。そして次第に、人を殺すにはどこを殴ったらいいか、

**ハンマー使い**
**17歳が客殴る**
JR根岸線車内

電車内で乗客の頭をハンマーで殴ったとして、神奈川県警大船署は十二日、横浜市に住む私立高校二年の少年（17）を殺人未遂の疑いで現行犯逮捕した。

調べでは、少年は同日午前五時ごろ、横浜市のJR根岸線港南台駅から本郷台駅間を走行中の普通電車（東神奈川発大船行き）内で、寝ていた乗客の男性（48）の頭をハンマー（全長二十三センチ）で二回殴った疑い。男性は約三週間のけが。

少年は「夢でだれかを殺せと指示があった。ハンマーは自宅から持ってきた」などと話しているという。

などと考えるようになったという。

彼の場合も、アニメの世界、インターネットの世界で自分の衝動をアニメ化して暮らしていたのだが、それがそのまま現実の犯行につながってしまった。

こうした事件は、情報過多の時代、多くの人がインターネットをはじめとする仮想世界（仮想現実）に心を奪われて生きていることを象徴している。これを「仮想世界への引きこもり」と言ってもいいだろう。

そして、その仮想世界が現実世界とうまく区別され、共存できているうちは問題ないが、その境界線が破綻し、煩悩的な幻想を抱えたまま〝引きこもり〟から脱し、この現実世界で自分だけに通用する理屈で行動した場合に、悲惨な事件を起こしてしまうのである。また、

事件(3)のように、幼少から仮想世界での経験優位で過ごしてきたために、現実世界での経験が乏しく、〝ナマ〟の体験をしてみたいという衝動から事件を起こす場合もある。
　このような心の特性は、神戸児童連続殺傷事件の酒鬼薔薇少年（一九九七年）、そして連続幼女誘拐殺人事件の宮崎勤容疑者（一九八九年）へとさかのぼることができる。

## 危うい ネット人格の形成 ——「一・五」の関係

　インターネットの発達によって、〝仮想世界（インターネット）引きこもり症候群〟ともいうべき人たちが多くなってきていることは間違いない。彼らの大半は、生身の人間と「一対一」の関係を形成することが非常に苦手で、機械が提供する幻想の世界に安住の地を見いだすという「一対〇・五（※〇・五は機械）」の関係に埋没している。
　この二者関係でなく一・五者の関係は、独特の心の状態を生み出すことになる。それは、端的に言えば「自分本位（エゴ優位）の一方的関係」であろう。
　「一・五」の関係の提唱者でもある東京国際大学教授の小此木啓吾氏は、機械との関わりが持つ利点として、次の三つを挙げている。
（1）人間よりも安定性と恒常性がある——機械であるだけに感情の不安定さもない。生理的コンディションにも左右されない。いつも同じようにこちらの期待どおりに応答してくれる。もしこれが人間であれば、そのときそのときによって反応も多様で、必ずしも期待どおりにいかない。

（2）自立感覚と全能感を満たす――人間に比べて、我々が思うとおりにコントロールできるという点で、人々の自立感覚を満たし、全能感を満足させてくれる。

　実はそれは、一種の独り相撲で、徹底的に自分本位である。これほど自分本位の一方的な関わりを人間との間に求めたら、その人間関係はたちまち破綻するに違いない。

　ところが、これらの機械は、本来、我々の欲望や願望を満たすことができるように、さまざまな反応性をあらかじめインプットしてあって、それを我々は自分の好むときに思いのままに引き出すことができる。この自分本位の満足感があまりにも肥大してしまうと、「一・〇」の人と人との関わりは煩わしく、しんどいものになる。

（3）人間的な配慮がいらない――しかも、感情もなければもちろん人格もない。こちらが頼っている立場だとしても、頭を下げる必要はないし、甘えなくてもよい。こちらの気が向いたときに操作すればよい。いらないときには放っておけばよい。

　…関わりたいときにスイッチ、ボタンを操作して、思いどおりの人間的なイメージと関わり、嫌になれば消せばいい。種々の葛藤があり、付き合いがあり、トラブルもある「一・〇」の関わりが億劫（おっくう）で、煩わしく感じ、その分だけ「一・五」の関わりがいい。

　このように、インターネットへの引きこもりが続くにつれて、〝自分本位性〟とでもいうべきエゴの増大が引き起こされるのである。それによって現実世界での人間関係がますます困難なものになってしまう。

　また、肥大化したエゴは、チャットや掲示板

などのネットの世界における他者との関係においても、〝自分本位性〟を発揮することになる。匿名の陰に隠れて、虚像の自分を作り上げたり、あるいは現実世界以上に露骨に感情をぶつけ合ったりする。

「本当の自分をさらけ出す必要がない（＝現実の自分にはなんら影響がない）」「嫌になればその世界から離脱すればいい」という気楽さ・無責任さもあって、ネット空間はある種、抑制のかからない（エゴ丸出しの）潜在意識と導通した空間になってしまうのである。

小此木啓吾氏は、ネットにおける関係が形成する心理構造の危うさを、次のように表現している。

普段とは全く違った、さまざまな感情や衝動をどんどん発揮する。ネットワークの



電子掲示板は、誰もが読んだり書いたりすることのできる伝言板のようなものなのだが、そこではさまざまなジャンルの掲示板が運営されている。しかし、そこは、楽しい語り合いというよりは罵詈雑言（ばりぞうごん）の修羅場になる。

もともと、人間の心の中には自分中心の攻撃性や破壊性が渦巻いている。しかし、いままでそれは、夢や空想や物語の形でしか表現されなかった。それをすぐそのまま言葉にして公開することで、独特なチャットの世界が出現することになった。

その世界は、特定の組織や人物を標的にした、激しい攻撃や裏話の暴露でみちみちている。学生たちが、インターネットの中で教授たちについて会話している内容は、とんでもなくひどいものだ。現実の世界で起こる怨みや怒りの代理満足をインターネットで得ている。

しかし、それだけに、こうした現実の世界で得られない心のニーズを代理満足させてくれるこのインターネット心理にとりつかれると、いつの間にか、仕事からも、勉強からも離れて、インターネットにのめり込んでいってしまう。

誰もが心の中に秘めていて口にしない世界と、それを直接ナマの形で表現してしまうネットの世界、このインターネットの世界のほうがリアリティがあると思い込む若者。そこでは、自分の心の中のことは心の中のこととして外の世界と境界を保つ、という心理構造がうまく働かなくなるおそれがある。

コラム

## ホームページや掲示板で積むカルマの大きさ

皆さんの中にも、自分でホームページを運営したり、チャットや掲示板への書き込みを頻繁に行なっている方がいらっしゃるかもしれない。

ここで、一つ注意しておいていただきたいことがある。それは、その書き込みがどのようなカルマを形成するのか、ということだ。

「なしたことが返ってくる」というのがカルマの法則である。こうした不特定多数の人が閲覧できる媒体への書き込みは、それを読んだ人（の身・口・意）に様々な影響を与えることになるだろう。そして、影響を与えたその総合が、自分にカルマとなって返ってくるのである。

つまり、「一」の悪影響を百人に与えたとするなら、その人はいずれ「百」の悪影響を受けなくてはならないということになる。特に、ネットの世界は各々の潜在意識が引き出されやすいだけに、相手に与える影響も甚大である。それゆえに、多くの人に向けてメッセージを発信するときには、よほどの注意が必要なのだ。

何気ない書き込み（綺語や悪口、両舌、誹謗中傷、その他煩悩を増大させる情報提供）が、とんでもないカルマとなって、未来の自分を不幸のどん底へと落としかねない。十分気を付けていただきたいものである。

## ネットの闇世界
### ――「ヘイトサイト」や「アングラサイト」の存在

このほかにも、インターネットの危険性として挙げられるのが、「ヘイトサイト」や「アングラサイト」の存在である。これらは一般的にも警戒されているものだ。修行者としての価値基準から見るなら、なおさら警戒されてしかるべきだろう。

「ヘイトサイト」とは、さまざまな悪意を持って作成された反社会的なサイトで、人種・宗教差別の助長や、個人・企業の誹謗中傷、史実を歪めて大衆を一方向に扇動する教条主義のものが多い。また、「アングラサイト」とは「アンダーグラウンド・サイト」の略称で、非合法な行為を行なっているサイトのことだ。そこには、違法なソフトのやり取りや犯罪誘発掲示板、ドラッグ売買、売春、犯罪のノウハウサイトや犯罪用具の売買まで、何でもそろっているという。

インターネットの世界に法規制を加えることは、インターネットそのものが、情報発信の自由を建前として発展してきた経緯があるがゆえ、さらには、国境を越えた広大な領域を既に形成してしまっているがゆえ、現状難しい状況にある。このように、インターネットの世界は〝監視の目〟が緩(ゆる)いため、一般のマスメディア以上に悪質な情報がうごめいている。間違った情報や悪意ある情報にうっかり乗せられて、人生を狂わされることも大いにあり得るのだ。

したがって、わたしたちは、しっかりとした情報の評価・選別を行なう目を養う必要があるのである。

コラム

## 隠蔽・攪乱・扇動
## ——巧みな情報操作の数々

インターネットに限らず、マスメディアを通して送られてくる情報には、多くの場合、様々な〝手〟が加えられている。それが情報操作といわれるものだ。

テレビドラマ「冬のソナタ」に代表されるように、今日本を席巻している韓国ブームも、ある大手広告代理店の主導によるものであることが、一部の人たちによって指摘されている。来年二〇〇五年が「日韓友好四十周年」に当たることから、日韓交流の一環として企画されてきたものらしい。こうした国家間の親善交流にまつわる情報操作については、それほど弊害はないかもしれないが、そうではない、真実の隠蔽（いんぺい）や教条的な扇動にまつわる情報操作は、わたしたちに多くの不利益をもたらすことになる。

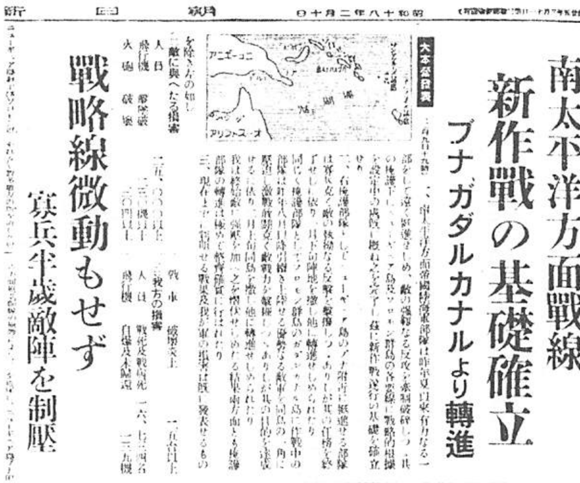
これまでの歴史を振り返ってみても、巧みな情報操作によって、民衆はいいようにだまされ、踊らされてきたことがわかる。

以下、印象的な情報操作の事例をいくつか列挙してみることにしよう。

### ・戦時中の大本営発表

……歴史に残る情報操作と言えば、第二次世界大戦中の「大本営（だいほんえい）発表」に勝るものはないだろう。大本営とは日本における陸・海軍の総本部である。太平洋戦争が途中から劣勢になっても、「日本軍は勝ち進んでいる」と事実を歪曲（わいきょく）して発表し続けたことは有名だ。

ますます生活が苦しくなる中、国民の戦意を決して落としてはなるまいと、まさに国を挙げて情報操作を行なったのである。


朝日新聞 昭和十八年二月十日

大本營發表

南太平洋方面戰線
新作戰の基礎確立
ブナ、ガダルカナルより轉進

戰略線微動もせず
寡兵半歳敵陣を制壓

・ケネディ大統領暗殺事件

……一九六三年十一月二十二日、アメリカのテキサス州ダラスで、第三十五代大統領のジョン・F・ケネディが暗殺された。オープンカーに乗ってパレードを行なっている最中、頭部などに銃弾を受け即死したのである。犯人とされた共産主義者のオズワルドも、その二日後に暗殺されてしまった。事件解明に当たったウォーレン委員会の結論は、オズワルドの単独犯行。しかし、この時点で事実は大きくねじ曲げられた。

オズワルドは、ケネディを後部から狙い、ライフルで三発撃ったことになっている。しかし、後に発表された狙撃の映像を見ると、明らかに大統領は前方から撃たれていることがわかる。また、三発の銃弾も、一発はケネディの頭に、一発は首に、残りの一発は外れて付近の人に当たったものと発表さ

れた。しかし、同じオープンカーに乗っていたテキサス州知事も、全身に七カ所の傷を負っている。それは発表によると、ケネディの首を貫通した弾丸が、その七カ所の傷をつくったとされた。あまりに奇怪な説明ゆえに「魔法の弾丸」と揶揄（やゆ）されたりもした。

全世界に衝撃を与えたケネディ大統領暗殺事件の真相は、闇から闇へと葬られ、いまだに明らかになっているとは言えない。

・ダイアナ元妃交通事故死の真偽

……一九九七年八月三十一日、ダイアナ元妃を含む四人を乗せた自動車が、パリ市内のアルマ広場下のトンネルを高速走行中に運転を誤り、中央分離帯の柱にぶつかった後に側壁に激突した。運転手と同乗者一人が即死、元妃は運ばれた病院で死亡した。






フランス政府は、事故原因を「運転手の薬の服用と多量のアルコールの飲酒による」ものと発表。

しかし、事故現場で白い閃光を見た目撃者が複数いること（運転手に対する目つぶしの可能性）、元妃を乗せた救急車が病院まで急行するのに二時間以上かかっており、それも本来十分もかからない距離にあった一番近い病院は迂回（うかい）していること、事故第一発見者の口が封じられていること、運転手の検死報告書は「捏造（ねつぞう）」されている可能性が高いことなど、この事故には不可解な点が多く、謀殺（ぼうさつ）の影が色濃くただよっているのである。

さらに、二〇〇三年になって、ダイアナ元妃は事故に遭う十カ月前に、自分の暗殺を予見するかのような自筆の手紙を元執事（しつじ）に渡していたことも公になり、ダイアナ元妃暗殺の信憑性（しんぴょうせい）を高める一因になっている。

### ・NHKスペシャル「禁断の王国・ムスタン」

……一九九二年にNHKが放送した番組「禁断の王国・ムスタン」に多くのヤラセが盛り込まれていたことが、翌年朝日新聞によって公にされ、関係者と国民に大きな衝撃をもたらした。背景に視聴率競争があるとはいえ、NHK（日本放送協会）の、しかもドキュメンタリー番組と銘打つ中に多くのヤラセシーンがあったことは、大きな問題である。

この出来事から、マスメディアにおいて、情報操作がいかに普通に行なわれているかがわかるのではないだろうか。

### ・朝日新聞サンゴ損傷事件

……大新聞である朝日新聞のカメラマンがヤラセを行なったこともある。一九八九年に問題になった「サンゴ損傷事件」がそれだ。四月二十日の夕刊の一面に「K・Y」という文字が刻まれた西表島のサンゴの写真が掲載された。「サンゴ汚したK・Yってだれだ」のタイトルで、心ないダイバーを非難する文章が添えられていた。

ところが後になって、このサンゴの傷は取材に当たったカメラマン自身が彫り込んだものであることが判明した。インパクトのある写真記事を掲載したいというプレッシャーと虚栄心が、〝勇み足（＝情報操作）〟の背景にあったのである。



### ・ネス湖のネッシーの写真

……たった一枚の写真が半世紀以上にわたって全世界をだまし続けた、というケースもある。例のネス湖のネッシーの写真がそれだ。当初この写真は、イギリスの大衆紙デーリー・メールによって大々的に報じられ、その後ネス湖は一気に観光名所と化した。世界各国の研究機関やマスコミも訪れた。ネッシーを題材にしたテレビ番組をご覧になった方も、多いのではないだろうか。

しかし、この〝お祭り騒ぎ〟にも終止符が打たれるときがやってきた。一九九四年に、この写真撮影に携わった人物が、死去する前に真相を語ったのである。それによると、体長十メートルといわれたネッシーの写真は、実は三十センチの稚拙（ちせつ）な模型だった。ただ、撮影した際の条件（逆光、ピンぼけなど）により、本物に見える写真が撮れたというのだ。

イギリスの新聞サンデー・テレグラフ紙は「今世紀最大の悪ふざけの一つ」と記したが、全世界の人にある種〝夢〟を与えた情報操作だったと言えるかもしれない。



もんじゅ

元テープの存在口止め

建設所副所長が認める

動力炉・核燃料開発事業団（動燃）の高速増殖原型炉「もんじゅ」のナトリウム漏れ事故で、動燃が撮影したビデオの核心部分を隠す編集をしていた問題で、森康民・もんじゅ建設所は二十一日、福井県敦賀のもんじゅ建設所で記者会見し、「私の方から分かりやすく編集してくれと言った」と、編集の指示をしていたことを明らかにした。また、編集に当たった佐藤勲雄副所長は撮影者に元テープの存在の口止めをしていたという。

ビデオは事故直後の九日午後四時十分ごろから、二台のカメラで約十一分と四分、並行して撮影された。撮影の直後に佐藤副所長が現場の状況を報告した際、大森所長が「内容がよく分かるように編集してくれ」と指示したという。佐藤副所長は「空調ダクトが取れている部分などは刺激が強すぎるのでカットした方がいい」と判断し、一分… 編集した。

佐藤副所長から、ダクト部分などの削除の報告を受け、編集後のテープを見た大森所長は「これでいい」と了承した。



・高速増殖原型炉「もんじゅ」の事故

……一九九五年十二月に、福井県敦賀（つるが）市にある動力炉・核燃料開発事業団（動燃（どうねん））の高速増殖炉「もんじゅ」が大事故を起こした。冷却中のナトリウムが漏れ出て空気に反応し、火災を起こしたのである。この事故そのものも衝撃的だが、その後の動燃側が行なった数々の隠蔽工作が社会に与えた影響はもっと大きい。

動燃は、事故の発表を遅らせたばかりか、漏れ出たナトリウムの量を「問題ない量」とするなど、小さな事故に見せかけるように報告書を操作したのである。さらに現場を撮影したビデオを公開した際も、問題になりそうな部分はカットされていた。

結局、事態の深刻さが世に知れ渡ったのは、事故後十日以上も経ってからのこと

だった。あまりに危険極まりない情報操作だったと言えよう。

### ・三菱自動車の度重なる隠蔽工作

……現在も、企業の隠蔽工作が次々と明らかになっている。その一つが、三菱自動車のリコール（安全性や公害防止にかかわる欠陥が見つかった自動車について、メーカーが国に届け出たうえで回収し、修理する制度）にまつわる隠蔽工作だ。

九六年にリコール対象の欠陥が社内で発見されたが、リコールは金がかかるため「ヤミ改修」で対応することを決定。ところが、二〇〇〇年になって別の欠陥を隠蔽するための「クレーム隠し」が発覚した。

しかし、九六年に分かった欠陥はまだ表には出ていなかったため、会社は「これ以上隠していることはない」と嘘をつき、さらに隠蔽工作がばれるのを恐れて「ヤミ改修」自体もやめてしまう。以後、欠陥は消費者に知らされないままとなり、死亡事故をはじめ、欠陥に起因する事故が次々と起きることになる……といった具合である。


三菱自動車
61万台を回収・修理
クレーム資料隠し　社長が謝罪

Chapter 3

# 情報が心に与える影響（1）――一般的ケース

## 実験によって確かめられた三つの効果

次に、情報が心にどんな影響を与えるのかについて見ていくことにしたい。まずは、一般的ケースとして、教育学者らによって研究されているものからご紹介することにしよう。

古くからの研究で、「メディア暴力」を対象にしたものがある。つまり、メディアで描かれる暴力が視聴者にどのような効果をもたらすかを観測するのである。

それによると、大きく次の三つの効果が見られるという。

（1）観察学習効果

……視聴者はメディアで描かれる暴力的行為を学習し、ある状況下において、学習した暴力行為またはそれに類似した暴力行為を実際に行なうというもの。

（2）脱感作（だつかんさ）効果

……人々が暴力シーンに多くさらされると、人々は、たとえそのような暴力シーンが実際に行なわれても、驚いたり、人に知らせたりなどの通常の反応をしなくなるというもの。

（3）カルティベーション効果

……メディア暴力に多くさらされると、視聴者は世の中に暴力があふれていると思い

込んで、恐怖を抱いてしまうというもの。

この中で特に注目すべきものは、（1）と（2）である。

（1）の観察学習効果については、様々な実験がこれを証明している。以下は、一九六〇年代に行なわれたバンデューラ、およびバーコウィッツの実験である。

メディア暴力の影響に関する実験的研究といえば、まずバンデューラの名前をあげることができる。観察学習理論を構築したバンデューラは、メディア暴力についてもこの理論をあてはめ、子どもたちはメディアから攻撃的行動を学習し、その具体的な行動を覚えていて、その実行を促すような状況に遭遇すると、習得した暴力行為を再現するとしている。

彼の行った一連の研究は、ボボ人形と呼ばれる空気の入った等身大の人形に対して暴力行為を行っている映像を見せたあと、ボボ人形が置いてあるプレイ・ルームで子どもたちを自由に遊ばせ、その行動を観察するというものである。このような実験の結果、バンデューラは、暴力的な映像を視聴した子どもたちは、そうでない子どもに比べて模倣的暴力行為が有意に増加したことを実証している。

またバーコウィッツもこの領域での実験研究を多く行い、暴力視聴が引金になって、人々の攻撃傾向が表出することを示している。バーコウィッツらの研究では、映画の『チャンピオン』から抜粋したボクシングの試合のシーンが暴力刺激としてよく使われている。

暴力番組を視聴した後、実験協力者に対して電気ショックを与える機会が被験者たちに与えられる。実は、電気ショックを受けることになっている実験協力者は、被験者に与えられた課題の邪魔をした人物で、被験者たちにとっては憎らしい存在であり、被験者たちは皆仕返しをしようと思うのである。

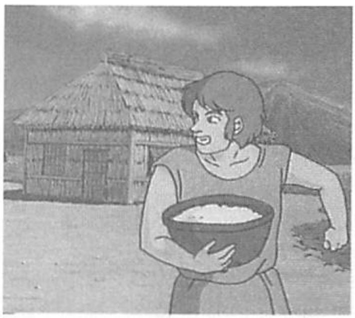
ところが、暴力視聴をした被験者とそうでない被験者とでは、電気ショックを与えるという形での仕返しの程度に差が見出された。つまり、両群とも、邪魔をした人を憎いと思っているのだが、いざ仕返しのチャンスが与えられたとき、暴力視聴をしていた群の方がそうでない群よりも電気ショックを与える時間が長いことがわかった。

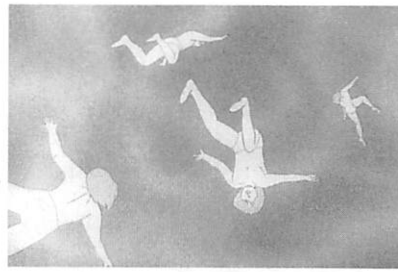
このようにして、暴力番組視聴と暴力的行動との因果関係が示されたのである。

（佐々木輝美著『メディアと暴力』）

この観察学習効果については、仏典「創世期経」にも見ることができる。「創世期経」は、光音天からの魂の落下によって神聖天以下の宇宙が創造されるプロセスを表わしたものだ。そして、神聖天、戯れ堕落天、意識堕落天、人間界が次々と形成されていく過程でどんどん悪法が広がっていく。

この悪法の広がり方が、「他者がなした行為の模倣を行なう」という、まさにこの観察学習効果そのものなのである。詳しい内容は紙面の都合で割愛させていただくが、機会があれば「創世期経」に目を通してみていただきたい（※書籍・ビデオの『創世期』を参照のこと）。







『創世期』より

（2）の脱感作効果については、以下のような実験がある。

クラインらは、テレビ視聴量と暴力シーンに対する脱感作との関係を明らかにするため、フィールド実験を行った。

この実験でクラインらは、被験者を、過去二年間に週二五時間以上テレビを見ていた群と、週四時間以下しか見ていない群に分けた。これらの両群に対し、『チャンピオン』という映画から抜粋されたボクシングの試合のシーンを含む一四分間の映画を見せ、GSR及び血量脈拍を測定した。その結果、「テレビをあまり見ない」群よりも「テレビをよく見る」群の方が、情動的興奮が少ないことがわかった。

一方、ドラブマンらは、GSRなどの生

理学的反応ではなく、被験者の実際の行動を観察することによって、暴力に対する脱感作を調べようとした。

小学三～四年生から成る四四名の被験者（男二二、女二二）は、〝HOPALONG CASSIDY〟という、撃ちあいやケンカなどのシーンを含む西部劇を視聴する群と、映画を見ない対照群とに分けられた。その後、被験者は二人の子どもが別の部屋で遊んでいるのを観察させられ、何か起こったら知らせるように言われた。実はこの二人は実験に協力しており、けんかをするように指示されていたのである。

その結果、対照群では二人の子どもの間に口論が始まったところで五八％の子どもが大人に知らせたのに対し、実験群ではわずか一七％に留まった。暴力番組に接した子どもたちは暴力に対する脱感作現象が生



じ、口論が始まっても大したことではないと思い、大人に知らせた子どもの割合が少なくなってしまったものと解釈される。

（佐々木輝美著『メディアと暴力』）

脱感作効果とは、「マイナスのイメージを持つ物事が、プラスのイメージを持つ経験と結合されて何度も提示されると、もともとあったマイナスのイメージは徐々になくなっていく」というものである。つまり、暴力という好ましくない現象も、それをテレビ映像としてくつろいだ状態で視聴する経験を繰り返すなら、暴力に対して嫌悪感を抱くどころか、それを平然と受け止めるようになってしまうということだ。

武蔵工業大学環境情報学部教授の岩男寿美子氏は、日本のテレビでどのくらい暴力が描かれているかについて、興味深い研究を行なっている。それによると、一週間に怪我をした登場人物は七百二十七人、死んだ人は五百五十七人に上った。この報告に基づけば、人々は、家庭というくつろいだ場所で多くの傷害や殺人のシーンを見ていることになる。

一方アメリカの場合だが、ペンシルベニア大学のジョージ・ガーブナー博士は、一九六七年から一九七一年までの調査の結果、暴力のシーンがゴールデンタイム中、一時間につき七・五回の割合で出現したことを報告した。このデータを基にすると、平均的なアメリカの子どもたちは、十四歳になるまでに一万一千回以上の殺人を目撃することになると推定している。

このように大量の暴力や殺人の場面に触れることによって、わたしたちの感覚はますます鈍らされてしまっているのである。

# Chapter 4 情報が心に与える影響（2）――特異なケース

## 潜在意識にメッセージを埋め込む――サブリミナル広告

次は、情報が心に与える影響の中でも、特異なケースについて見ていくことにしよう。

まず初めは、一時期話題に上った「サブリミナル広告」についてである。これについては、皆さんもよくご存じなのではないだろうか。

現在ではほとんど使われていないテクニックだといわれているが、真相のほどは不明である。

広告における情報操作の、より衝撃的な例を示そう。それはサブリミナル広告である。

映画やテレビ放送では、一秒間に数十コマの少しずつ異なる静止画を、連続的に投影することで動く映像を提供する。それらのコマの中に、一コマのみ他とまったく変わった画像のコマを挿入すると、挿入されたコマの画像の内容は意識的にはわからない。しかし、心の中に潜在的な印象は残るのである。こうしたコマのことをサブリミナルカットという。

サブリミナルカットには、商品を買う気持ちのない消費者に商品を買わせるような強制力はないが、広告として一定の効果は

認められるようである。その仕組みは、およそ次のように説明できる。

鍵となるところは、意識と潜在意識の間の情報的な分離である。図3・3を見ていただきたい。マスメディアから供給されるサブリミナル情報は、私たちの潜在意識のレベルでとらえられ、意識レベルへは伝達されない。これが、サブリミナルカットを見た時点で起きることである。その後に、商店でサブリミナルカットによって宣伝されていた商品に出合ったとしよう。そのとき潜在意識は、その商品に関する何らかの情報を意識にもたらすのである。その情報は「知っている」といった既知感や、「好ましい」といった親近感のもとになる印象である。ところが、「その商品をサブリミナルカットで見た」という情報は、そこには含まれていない。すると、意識は「この商品



情報の伝達モデル（同書 図1.3より）

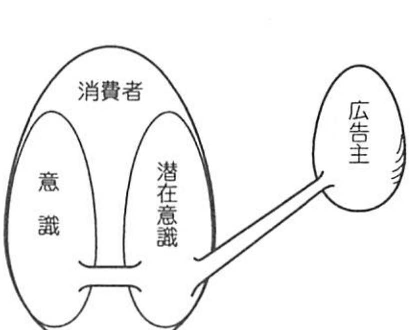


図3.3 サブリミナル効果の情報伝達モデル

は私にふさわしい」と、魅力ある商品とみなしてしまうのである。

もし、商品を見た時点で、「この商品は広告で見たあれだ」と意識していたらどうだろう。その魅力ははるかに低くなるに違いない。サブリミナル広告は、「商品の情報が外部からやってきたものでなく、自己の内部から込み上げてきたのだ」と私たちに錯覚させることで成立するのである。

映像のサブリミナル広告は、サブリミナルカットの形で実現されるが、雑誌やポスターなどの印刷物のサブリミナル広告は、タブーに関するモチーフを使用する。……性交を連想させるような性器などのパターンや、デスマスクなどの死を連想させる画像を広告に潜ませておくのである。パターンが象徴するモチーフは、社会的な禁忌(タブー)に触れるものほどよい。また、SEXや、KILL、DEADなどの文字を広告に埋め込んでおくのも有効とされる。

タブーに関するモチーフが、サブリミナル広告として働く仕組みも、図3・3と同様に考えることができる。やはり、意識と潜在意識の情報的分離が起きることで、広告の効果が成立するのだ。私たちは、社会的にタブーとされるものを目のあたりにしたときに、「見てはいけない」という心理的な抑圧の機構が働くのである。そのため、サブリミナル広告が提示された時点や、その後の記憶を維持する過程で、広告情報は失われてしまう。つまり、意識レベルでは、「広告は見なかった」ことにされてしまうのである。ところが、潜在意識では商品情報の印象は残っている。「広告された商品である」という記憶は失われているのにもかかわらずである。こうして、商店で広告

された当の商品に出合ったときには、その商品に対する既知感や親近感が生まれてくるわけである。（明治大学情報科学センター編／石川幹人著『人間と情報――情報社会を生き抜くために』）




## 人間は与えられる情報によってこんなにも変わる

情報と人間の心が密接な関係にあることは、ある特異な出来事を通しても確認された。その出来事とは、かつて世界的に話題になった「狼少女たち」の話である。

生まれたばかりの赤ちゃんが動物――この場合は狼だったが――によって育てられた場合、つまり、そこに動物界の情報しかなかったとした場合、「人間」として成長することができず、「動物」としての習性を身に付けてしまうということである。

この周辺のジャングルにいる〝化け物〟を退治してほしい――一九二〇年、キリス

ト教の伝道師シング牧師は、たまたま布教のために訪れたインドの小村で、住民からこう依頼された。

半信半疑でジャングルに入った牧師は、そこで想像を絶する光景を目にすることになる。ある洞穴から、二匹の親狼、二匹の子狼に続いて、二匹の〝化け物〟が這い出てきたのである。

それは人間のような胴体と手足を持ちながら、頭部は長い髪で覆われ、巨大なボールのように見えた。まさに〝化け物〟の名にふさわしい奇妙な動物である。

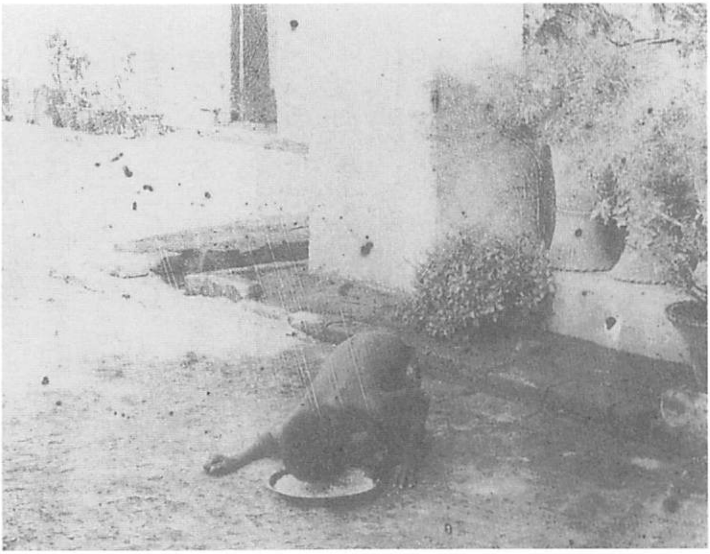
だが牧師は、すぐにこれを人間の子供だと確信した。そして捕獲して引き取り、人間の子として育てることを決意する。もともと牧師は、カルカッタに近いミドナポールという町で孤児院を主宰していたのである。

牧師の推定によると、二人の年齢は八歳と一歳半。ともに生別は女で、年上の子はカマラ、年下の子はアマラと名付けられた。

もっとも、果たしてどういう経緯で、人間の子供が狼一家とともに生活をするようになったのかは、いまだに謎に包まれている。

この二人の子は、紛れもなく人間ではなく狼の特徴を持っていた。四つん這いで歩き、足だけでは立つこともできなかった。昼の光を嫌い、行動はもっぱら夜の闇の中に限られた。食べるものは生肉や牛乳に限られ、特に人間流の塩味のついたものは極端に嫌った。また、食べるときは手は使わず、地面に置いた食べ物に直接口をつけた。眠るときは、二人で身体を折り重ねた。

さらに、身体は人間でも、個々の身体的



地面にはいつくばって食べるカマラ

な特徴は狼に酷似していた。目は闇の中でギラギラと輝き、歯は鋭く尖り、耳も大きく尖っていた。手が長く、足の指が大きく開き、四つん這い歩行をしやすい身体になっていた。

もちろん、言葉はひと言も発しない。夜中の決まった時間に〝遠吠え〟をするのみである。喜んだり、悲しんだりといった顔の表情もない。

こうした事実は、彼女らが狼に育てられてきたことを雄弁に証明している。そしてここには、情報に関する重大な示唆がある。

彼女らには、ふつうの人間の子供なら親から与えられるであろう情報が、一切与えられなかった。代わりに情報を与えたのは、狼である。これは一種の情報遮断であり、情報歪曲であるといえるだろう。

その結果、彼女らは、精神的にも肉体的にも、さながら狼の子のように成長した。逆にいえば、人間は歪んだ情報を与え続けられることによって、ここまで変容してしまうということでもある。人間にとって情報というものがいかに重要で、かつ恐ろしいものであるかを、この狼少女たちは示しているわけだ。

なお、年少のアマラはシング牧師に拾われてから一年後に病気で死亡したが、年上のカマラは生き続けた。その間、牧師夫婦の献身的な努力のかいもあって、二本足で立てるようになり、またいくつかの単語も習得した。そして九年後には、往診に来た複数の医者を識別できるまでに成長する。

だが、カマラが原因不明の病気でこの世を去ったのは、それからわずか数日後のことだった。狼社会の情報で培われた生命は、やはり人間社会の情報には適応できなかったということか。（『【情報操作】——あなたは騙されている』丸秘情報取材班編・青春出版社）



## コラム

### 人間は情報の集積
### ——遺伝子（DNA）の世界より

なぜ人間は、このように情報によって影響を受けるのであろうか——。その理由は、一言で言えば、人間そのものが情報によって構成されているからにほかならない。

真理の教えを学んでいる皆さんは、わたしたちの超潜在意識（コーザル）が光で構成されており、そこはデータの世界であることをご存じだろう。つまり、経験の構成といわれる光の粒一粒一粒が情報として存在しており、それが識別によって選び取られ、潜在意識（アストラル）にヴィジョンとして投影される。そして、最後にそのヴィジョンが熱を発生させ、この現象界でわたしたちが筋肉を動かし活動する、という仕組みになっている。

現象界で取り入れた情報は、アストラルでイメージ化され、やがてわたしたちのコーザルにデータとして根付く。そして、先の流れによって再びわたしたちの身・口・意に影響を及ぼすのである。つまり、もともとわたしたちの根源は情報の集積なのだ。

そして、その「わたしたちが情報で構成されている」という事実は、別の方面からも証明されつつある。それが遺伝子の研究だ。

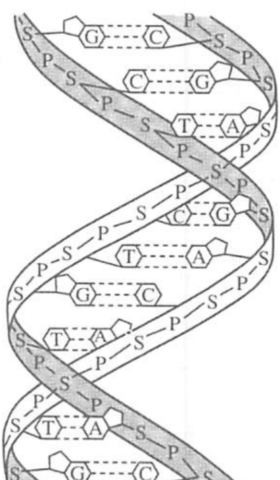
遺伝子とは生命の設計図のことで、これは親から子へ、子から孫へと受け継がれていく生命のもとになる要素のことである。

遺伝子は、細胞の核という部分に、DNAと呼ばれる物質として存在している。DN

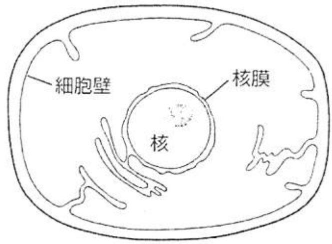
Aは、図のように〝はしご〟がねじれたような二重螺旋の構造をしており、この〝はしご〟の踏み板に相当する部分に、生物のすべての遺伝情報が四つの科学の文字で書かれている。その四つとはA（アデニン）、T（チミン）、C（シトシン）、G（グアニン）で、これらは塩基と呼ばれている。

　遺伝子上には、この四つの塩基からなる情報が三十億（※一ページ千語で千ページの本、三千冊分に相当）も存在しており、これらの情報がわたしたち人間の構造や性格的傾向を決定し、日々の生命活動を支えているのである。まさに、人間は情報の集積なのだ。

　ちなみに、遺伝子はかすかな光を発していることが確認されている。これを「バイオフォトン」という。情報と光──さながらコーザルのデータを彷彿とさせる遺伝子の世界に、大いなる神秘を感じざるを得ない。



遺伝子（DNA）の構造




細胞の構造

Chapter 5

# 真理が説き明かす「情報と心」

「真我が三グナに干渉されることによって大宇宙が創造された」という教えは、皆さんも何度か耳にされたことがあるだろう。ラジャス・タマス・サットヴァの三つのエネルギーのダイナミックな動き・美しさ・光に感応した真我は、その中へと没入した。そのとき、ものすごい大きな爆発が生じた。それが大宇宙創世のビッグバンだ。

それ以来、真我は、三つのグナの織りなす世界の中で様々な情報と接触し、煩悩を増大させ、どんどん落下していった。そしてその結果、今では数知れない真我が煩悩的情報の虜（とりこ）になり、それらの情報に引きずられる形で、苦界の中での流転を余儀なくされている。それが六道輪廻にほかならない。

このような背景から、真理の教えにおいて、「情報と心」は非常に重要なテーマの一つになっている。いや、それどころか、情報をいかに遮断（捨断）するか、あるいはいかに乗り越えるかが、わたしたちが解脱・悟りに到達する上での最大の課題、と言っても言い過ぎではないのである。

それでは、真理が説き明かす「情報と心」について、膨大な教えの中からそのいくつかを見ていくことにしたい。

ちなみに、ここでいう「情報」とは、これまで取り扱ってきた外的情報を中心とする、〝外的条件の変化全般（＝五感と意識を刺激する

ものすべて）〟のこととする。

## 情報と心の密接な関係

### ◎情報を追体験するまで、その経験を繰り返す

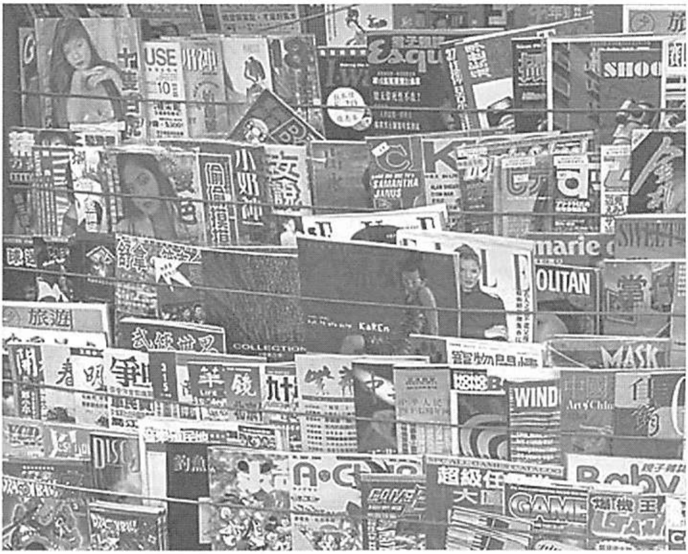
わたしたちは、メディアを通して様々な情報に触れている。それはほとんどが煩悩をかき立てるものだ。そしてその情報を得たわたしたちの心は、体験的に納得するまでその経験を繰り返す、という特質がある。つまり、情報が心に印象付いてしまった場合、わたしたちはその情報を経験するまでとらわれ続けるということである。

これは、先述した「観察学習効果」に近いものがあると言えるかもしれない。

わたしたちの心というものは、情報を経験し、その情報と同じ経験をするまで、その情報の経験をし続けるという特質があります。

例えば、ある料理を作ったとして、それが、例えばテレビなどでおいしそうに報じられた場合、それが本当に自分の味覚に合うまでその料理を作っては食べ作っては食べを続ける、あるいは外に出て、その料理が本当においしいんだと認識するまでそれを繰り返し行なうと。

例えば、これは現代の若者が毒されている一つの特徴として、性的快楽がありま す。この性的快楽も、多くの本やビデオ、あるいはテレビといった情報のソースによって、つまり源によって、性的喜びとはこういうものであるということを何度も何度もデータに入れられ、そして、その喜び




が実際に体験されて初めて、そこで納得すると。（一九九二年六月八日　茨城県総合福祉会館）

**（編集部）** 現代は情報化社会といわれていますけれども、その情報と物質の関わり合いというのは、どのようなものなのでしょうか。

**（回答）** それは簡単だよ。これは、「現代は情報社会」ではなくて、「人を動かすものは情報である」ということが言えると思います。で、その典型は、例えば仏典にも、毎日、朝や昼、晩、「俺は瞑想するぞ、瞑想するぞ、瞑想するぞ」と考えなさいとか、あるいは、朝昼晩、「これを瞑想したら体が楽になる」とか、「精神が楽になる」とかね、「これを瞑想したら心に喜びが生じる」と考えなさいという、そういう教えとかね。あるいは如意足で、「この神通を欲求することによって神通が得られるんだ」と思うとかね、そのデータを入れるというのと同じレベルだね。

これはつまり、情報には善悪はないか

ら、そこで動く、動かないが問題だということだね。要するに、例えばAというラーメンがあって、テレビのコマーシャルでは、それを毎回おいしそうに食べている。そしてそれを見る、聞くと。そうすると、もともとその情報を入れられないでそれを食べたら、おいしくないかもしれないのに、情報を入れられていると、食べた瞬間に追体験をするわけだよ。

わたしがここで言いたいのは、最も大切なこと、それは何かというと、追体験の理論ね。普通は、雑誌、テレビ、あるいは漫画とかを見ることによって、そこで追体験すると言っているけど、それは実は嘘であって、実際は、雑誌とか新聞、テレビ、あるいは漫画とかを見ることによって、そのイメージが根付く。そして、現象として追体験して、納得するというかね、満足するというか、そのプロセスなんだね。（『マハーヤーナ』No.31 より）

## ◎情報は過去の経験の構成を引き出す

情報に触れると、それを誘因として、わたしたちの内側からなにがしかのデータ（＝経験の構成）がわき出てくる。真理では、この〝データが内側からわき出てくること〟を「生起」と言っている。

例えば、食べ物の宣伝を見たとしよう。すると、その味わいがリアルに思い起こされたり、あるいは、過去にだれかと一緒にその食べ物を食べたとしたなら、その場の雰囲気が一気に生起してくる、といった具合だ。そして、その場面を再び経験したいといった思いに駆られたりする。

わたしたちは、これまで何度も悪趣への転生を繰り返してきた。したがって当然、経験の構成はけがれたデータ優位であることは間違いない。つまり、現世の情報に触れたとき、それをきっかけとして出てくるものは、悪趣のデータの可能性が大変高いということだ。

このような形で、煩悩的情報は、わたしたちの内側に眠っているけがれたデータを引き出し、煩悩的傾向を一層強める。その結果、苦しみが増大してしまうのである。

---

……すべてはあなた方の内側にあるものが生起するんだと。

例えば、わたしは今日、ね、下はパンツとこのクルタと。上はジャケットとクルタとTシャツと。で、まあ外を少し歩いたわけだけど、大変涼しい気持ちいい空間であったと。ところが、君たちは寒い寒いというデータがあると。これも同じように、例えば氷点下何度に対して心がどう動くかということなんだね。

つまり、自分の内側にあるデータしか生起しないんだということだ。（一九九〇年十二月二十六日　阿蘇・シャンバラ精舎）



君たちは、「修行」という言葉、これをイメージしたならば、一体どのような連想が生じるであろうか。例えば、苦しい。修行？　大変だ。修行？　何のためにあるかわからないと。あるいは、修行？

少し、わたしの修行についてのイメージを話すことにしよう。修行、それは真の楽へ至る道である。そしてそれには、十四の段階があり、その十四の段階のベースとなるものは布施であると。そして持戒と上がっていくと。そしてこの修行の最終地点は、広大無辺、絶対深遠なる心をつくり上げることであると。

そして、それこそが、本当の意味での絶対的歓喜や幸福、自由をもたらすものであると。その途上で生じるいろいろな苦しみは、修行によって生じる苦しみではなく、それは自分自身が本来内在している苦しみであると。よって、修行によって落とすということは、その修行のメリット、プラスそこでのカルマが落ちるわけだから、両方のメリットがあると。ところが、例えばこれを君たちに質問する、あるいは外道、凡夫に質問すると、一体どのような答えが返ってくるだろうかと。そして、これが生起なのである。

では、別のイメージゲームをしよう。例えば「本」と。君たちは、何をイメージするだろうか。例えば、スパイもの、マンガ、雑誌、あるいはアニメの本、あるいはグルメの本、あるいはセックスに関する本、あるいは、専門職の人は、専門職の、例えば機械の本や建築の本といったものをイメージするだろう。

わたしの場合、本というと要するに経典、しかも、その経典は解脱へ至るための

経典、あるいは解脱を補助するための経典ということになる。これが生起なのである。……

ではなぜ、一つ一つの言葉において、その連想される意味合いというものが違うのであろうかと。それがカルマなのである。そして、それが来世を決定するのである。そしてそれが、今生を決定するのであると。（一九九〇年十二月二十六日　阿蘇・シャンバラ精舎）



コラム

## 破綻した心理学実験
## ——看守は残酷に、囚人は卑屈に

一九七〇年代に、ある心理学実験がアメリカで行なわれた。それは、刑務所で起こる残虐行為を生起させる要因を探ることを目的としたものだった。被験者を看守役（十一人）と囚人役（十人）に分け、以下のような条件のもとで〝役割を演じ〟させたのである。

1　期間は一週間
2　看守役と囚人役になり、それぞれの役を演じてもらう
3　看守は実際の制服を、囚人は囚人服を着る
4　囚人は番号で名前を呼ばれる
5　刑務所は現実のものときわめて近い環境をつくる（定期的に弁護士や牧師が来訪、家族との面会も制限）

実験は、実際に警察に逮捕される場面から始まり、この看守・囚人の役割が一日中続けられた。実験は監視カメラ（ビデオ撮影）によって観察された。

普通なら、単なる役割（＝演技）だから、ある種和気藹々と進行していったと考えるのではないだろうか。ところがこの実験では、予想外のことが起こる。

時間が経つにつれて、看守役の被験者はより看守らしく、また、囚人役の被験者はより囚人らしくなっていったのである。そし

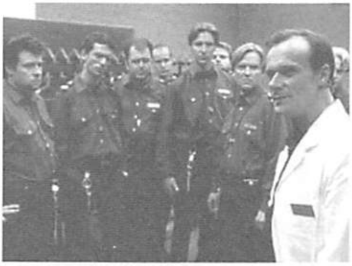
て、看守の囚人に対する攻撃的行動や侮辱的な発言が目立つようになり、一方、囚人役の方は、受動的態度を経て次第に無気力になっていったという。

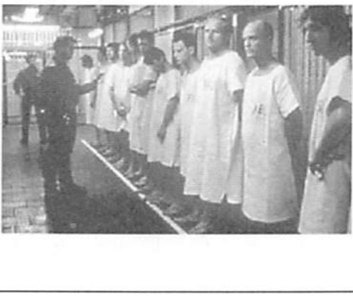
活気ある看守役とは対照的に、囚人役の人たちの情緒は次第に不安定になり、しまいには心身症の兆候や発作を起こす被験者が出たため、実験は六日目に中断された。今もアメリカでは、この手の実験は禁止されているという。

この心理学実験は映画にもなり、大きな波紋を呼んだ。

この実験から言えることは、看守役・囚人役という条件が設定された場合、それが単なる演技だということがわかっていたとしても、過去・過去世からの「他の魂を傷つけ、いたぶった経験の構成」「他からいたぶられ、虐待された経験の構成」が引き出され、それぞれがそのもの——看守役はより看守らしく、囚人役はより囚人らしく——になり切ってしまったと考えられるということである。

このように、与えられた条件（＝情報）によって、わたしたちの内奥から過去・過去世のデータが引き出され、それによって心が支配されてしまうことがあるのだ。





## ◎情報を経験し続けると、その情報に心が慣れてしまう

これについては、皆さんも経験的に理解できるのではないだろうか。

情報、つまり外的条件の変化に慣れるという習性は、確かにいい面もある。わたしたちは生活の中でいろいろな出来事や課題に遭遇するが、それらは経験から来る〝慣れ〟によってスムーズに処理することができる。もし、日常経験するあらゆる〝変化〟に際し、逐一戸惑っていたのでは、まともな生活を送ることは困難だろう。

「情報に慣れる」という心の性質は、スムーズな日常生活を送る上で欠かすことのできないものなのである。

しかし、逆のことも言える。もしその情報の内容が悪業であったならどうだろう。例えば、先述した暴力がそうである。暴力に慣れ親しんでいると、実際に暴力を目の前にしたとしても、あるいは自分が暴力をなすときにさえも、それに対して「いけない」「まずい」「何とかしなければ」といった正常な心の反応ができなくなる。そして「これくらい大したことない」ということで、平気で相手を傷つけてしまったり、最悪の場合は殺害してしまったりして、大きな悪業を積んでしまいかねないのだ。これには十分気を付けなくてはならない。

ちなみに、この情報に対する慣れは、先に述べた「脱感作効果」に近いものがあると言えるだろう。

---

例えばこれは、ある屠殺者の手記だが、初めのうちは牛を殺すときに非常に苦しい思いをしたと。ところが、徐々に徐々にそ

れに対しては慣れてきて、今では平気でやるといったようなことをわたしは読んだことがある。これなどは、明らかに殺生に対する心の慣れ、つまり、その人が次の生において経験しなければならない、激苦地獄に対する道筋の確定ということとつながる現象である。

そして逆に、もしその人に真理という確定的な教えが内在していたとするならば、殺生する度に心の苦しみはどんどん増大し、そしていずれはその屠殺という仕事を放棄しなければならない状態が出たはずである。これは明らかに、殺生からの解放を意味する。

例えば、ゴキブリや、あるいは他の小さな生命体に対する慈愛を持ちなさいという教えがあったとしても、まず仕方なく殺して、そして徐々に徐々にそれが普通になってくるという傾向を、この中の主婦を生業(せいぎょう)としている人たちもね、そういう傾向があるかもしれないが、これも全く同じである。

こういう傾向に対して早く歯止めをかけ、そして自分自身の生き方を確定してこそ、初めて本当の意味での神々へ至るきずなを培う準備が形成されることになる。つまり、不殺生は消極的な善であるということができると。そして、その消極的な善の上に、今度はすべての生き物に対して哀れみを持ち、あるいは慈愛を持つという修習をすることにより、初めて神々の世界へのきずながができるわけである。

したがって皆さんは、心に一時的に苦しみが生じようとも、セットポイントを上げ、そして自分自身の内側に厳格な真理の砦(とりで)を築き、その真理の砦から一歩も退却

しない心を培ってほしいものである。いいね。（一九九二年十二月十三日　名古屋支部）

## ◎意識状態に応じて求める情報が異なる

情報は、それを取り入れた人の意識状態を変えてしまう力があるが、逆に、人は自分の意識状態に応じた情報を取り入れたがる、というのも真実である。どのチァクラに意識があるかによって、あるいはその人がどのような志向を持っているかによって、取り入れたいと思う情報は変わってくるのだ。

例えば、意識がムーラダーラ・チァクラにあるとした場合、その人は好んで暴力的な情報――戦争や闘い、犯罪などを題材にしたもの――を取り入れるだろうし、スヴァディスターナ・チァクラに意識の固定されている人は、性的な情報が満載された雑誌やテレビ番組、映画などを好んで見ることになるだろう。また、マニプーラ・チァクラに意識のある人は、食欲に関係するものや、あるいは、いろいろな分野の専門誌や研究雑誌に目を通すことになるだろう。解脱・悟りを目指す修行者であるなら、当然真理のデータを好んで取り入れることになる。

この原理については、実際に動物と人間、あるいは人間と神々を比べてみてもよくわかる。生命体の意識レベルに応じて、求めるもの（欲求の対象）は全く違うのである。

まず、動物の世界、そして人間の世界を見てみましょう。すると、皆さんはこういうことに気付くでしょう。それは、そのレベルに応じて、欲求するものが違うんだと

いうことです。（『真理の芽』No.1 より）

……例えばだ、犬の行為を見て、わたしは犬と同じような行為を経験したいとあなたは考えるかな。

（信徒）考えません。

考えないよね。じゃあ例えば、ミミズの行為を見て、ミミズと同じ経験をしたいとあなたは考えるかな。

（信徒）いえ、思いません。

じゃあ、ここに神々がいたとして、神々は人間と同じような喜びを得たいと考えてると思うか。

（信徒）えー、思ってません。

（一九八八年十二月二十九日　世田谷道場）

以上、情報と心の関係をいくつか見てきたが、これを一言でまとめるなら、「情報が入ると、心はその方向に引きずられていく（＝その世界に引き込まれていく）」ということが言えるのではないだろうか。

そしてその情報の修習は、わたしたちの人生の方向性を決めるだけでなく、魂の流転の方向性さえも決定してしまう。それほどに、情報の持つ力（エネルギー）というのは大きいのである。



## 情報の恐ろしさ、そのデメリット

現世的な情報を取り入れることは、解脱・悟りを目指すわたしたち修行者にとって、大きな障害になることは間違いない。では、修行上どのようなデメリットをわたしたちにもたらすのだろうか。以下、それに関する説法を見渡してみることにしよう。

### ◎心が揺れ続け、安定を得ることができない

ところがそうではなくて、単に情報に流されてる人は、Aという情報が入るとAかなと、Bという情報が入るとBかなと、Cという情報が入るとCかなと考えてしまう。つまりこれは、単に感官に支配されている、感官に隷属している最も悪いパターンである。そして自己の本質を見失い、絶えず心が動揺し、心が散乱し、心の平安・心の安定というものを得られない人のパターンであると。（一九八九年十一月十九日　東京・科学技術館）

この情報というものは、湖の中のいろいろなゴミ、あるいは藻、あるいは魚、あるいは砂、沈殿物といったようなものにたとえることができる。そして心が乱れる。そのいろいろな心の構成要素は、ちょうどミキサーを回した水の中にある内容物と同じように濁り、その湖底を見ることはできない。これは、多くの情報に心が錯乱した状態を指す。

例えば、シャクティーパットを行なったり、あるいはシークレット・ヨーガを受けたり、あるいは長時間他人と話した後、自己の心が乱れる。これも同じ現象である。あるいは、文章を読んだり、例えば文章を読んで感動する。例えば、もし非難の手紙を読むならば、そこで怒りが生じる。あるいは、直接嫌なことを言われ、心が怒る。このような状態すべてが今の比喩に当てはめることができる。

そして、真の自己を見いだすためには、その渦巻き状の湖の水をまず静めなければならない。寂静の状態へ持っていかなければならない。（一九九〇年三月十二日　富士山総本部）

## ◎より一層欲望がかき立てられる

ところで、最もわかりやすいこの食欲と性欲について、今、情報と、それから経験との関係を話したわけですが、この情報と経験は次に何を生み出すかというと、より一層おいしいものを求めたり、あるいは、より一層強い快楽を求める方向へと心は動き出します。

つまり、おいしいものを食べ、あるいは、求めていた快楽が得られたとしても、その次には、より一層強い欲求が生じてくるのです。そして、この欲求を満足させても満足させても、その欲求は拡大に拡大し、決して満足を得ることはできません。この状態を仏教では、苦しみ、この世の中のすべては苦しみであると規定する第一の条件に挙げています。（一九九二年六月八日　茨城県総

合福祉会館）

## ◎内側を見つめる機会を失う

ところが、文明の発達とともに、人間は、目先の生活を豊かにしたいがためにそういう内側の生活をどんどん放棄した。おそらく昔の日本は、これはわたしが生まれた家がそうであったように、神棚に参拝し、あるいは仏壇に食事をあげるといったような風習が、どこの家でもある程度あったはず。

そして、そういう基本的なライフスタイルの中に、例えば来世を考え、あるいは人生の本質的な苦しみというものを見つめるという人生の流れがあったはずなのに、例えばテレビの発達や、ラジオの発達や、あるいは雑誌等の多くの情報網の発達によって、そういう自分の内側を見つめるよりも、そういう情報に乗っかり、そして、その情報の中で遊ぶ方を楽しいと考えるようになった、この日本人の行く末というものは、決して楽観視できるものじゃないと思うわけです。（一九九一年十一月四日　気象大学）

## ◎雑念が増えて瞑想できなくなる。瞑想ステージが落ちる

しかしよく考えなさい。わたしたちは動いているんだよ。例えば、わたしとあなたは話す。そうだろう。話すときにわたしは情報を得る。あなたも情報を得る。そうだろう。あるいは、外を歩けば、おいしいものがたくさんある。そうだろう。そのおい

しいものがたくさんあるというのは何か。わたしたちの瞑想を落としてくれる。そうだな。女性の誘惑はどうだ。これも限りなくある。そうだね。（一九八六年八月三十日　丹沢集中セミナー）

### 《体験談》◎情報遮断で神々の観想が楽にできるように
――ヴィリヤンカタ・メッターイタ師

皆さんの中で、テレビや新聞・雑誌、最近ではパソコンのインターネットを通して余分なデータを取り入れている人はいませんか？　おそらく、だれもが何らかの形で現世の情報を取り入れていると思うのですが、その場合、秘儀瞑想をはじめとしたイメージを使う瞑想は、大変やりづらくなってしまいます。

わたしも経験があるのですが、深い意識に入ったときに、ツァンダリーの瞑想をやっていても、瞑想のイメージが出てこないんですね。何が出てくるかといったら、テレビで見たコマーシャルだとか、そういったものばかりでした。

一番ひどかったのは、五歳のときに見たアニメーションが全部出てきたことがありました。時間にして三十分間。オープニングテーマから始まって、物語、そしてエンディングテーマまでが綺麗に流れるんですね。五歳のときに見たアニメーションですら、深い意識ではちゃんと覚えているわけです。

この経験があってから、わたしはそういった現世のデータを取り入れることをやめました。シャットアウトしたと。そうすると、だんだんイメージの瞑想がやりやすくなってきた

んです。そして、今では神々の観想をしなさいって言われたら、パッと思い浮かべることができるようになっています。

例えば、手に何を持っていてとか、顔はどうなっていてとかいう形で細かく観想していくわけですが、皆さんの場合、結構観想に苦労しているのではないかと思います。それは余分な情報が大量に入っているからです。それが雑念となって観想を邪魔するわけです。

でも、情報を捨断（遮断）していると、だんだん観想ができるようになり、慣れてくると、パッと思い浮かべられるようになります。瞬時にして神々の形状の細かい部分までが正確に出てくる――ここまでならなくてはいけないわけです。

ですから、自己の瞑想修行をスムーズに進めていくためにも、テレビや映画などの余分なデータは、できるだけ遮断するように務めていただきたいと思います。

---

## ◎現象をありのままに見ることができなくなる（＝判断を誤り不幸になる）

例えば本を読む、その情報が入ってくる。例えば友人から話し掛けられる。その情報が入ってくる。そしてそれを繰り返しているうちに、わたしたちのコーザルの世界にデータとして、あるいはアストラルの世界にイメージとして、そのデータが構築されていく。

その状態に陥っている者にだ、また別の人が新しい情報を入れたとき、あるいは新しい本から情報が入ったとき、その新しい情報に対して、ありのままにその情報を見つめることができると思うか、できないと

思うか、どうだそれは。

（サマナ）できません。

（一九八八年九月七日　富士山総本部）

ところが、いろいろな情報をわたしたちが入れることによって、つまりそれは光を屈折させるけがれとなるわけだ。その行為によって、わたしたちは現象をありのままに見つめることができない状態になっている。そうすると、ありのままに見つめることができないということは、わたしたちは真実を理解できる条件を備えていると言えるか、言えないか、どうだ。

（サマナ）言えないと思います。

言えない。では、言い方を変えれば、その得た情報、つまりデータを屈折させる情報をすべてわたしたちが放棄し、その情報が働かなくなったとしたならば、それはどうだ。ありのままに見つめることができるようになるんだね。そして、すべてのデータが止滅し、完全に働かなくなった状態。その状態を仏陀の心の状態と言っているわけだ。そしてその透明な状態の本質を真我だと言っているわけだ。（一九八八年九月七日　富士山総本部）



在家で生きるにしろ、あるいは出家で生きるにしろ、ポイントは何かといったら、真理を背景として思索できるかどうかである。これは『南伝大蔵経』にもそのように書かれているし、あるいは『阿含経典』にも当然載っている。

ところが、皆さんは日々の生活の中で、テレビ、雑誌、新聞などによって、いろいろな情報を取り入れている。あるいは、会話においても綺語を取り入れている。これによって、皆さんの思索の力はどんどん鈍り、そして、何が本質で何が本質でないか理解できなくなっている。（一九九〇年五月十一日　和歌山支部）

## ◎情報を取り入れるだけで悪業となり、悪趣へと転生する

これについては、「Chapter2　インターネットの危険性」の「大半が〝煩悩を増大させる有害な情報〟」のところで述べたので、ここでは割愛させていただくが、それに関連する内容を少し付け加えておくことにしたい。

わたしたちは、バルド（中間状態）を経て次の世界へと転生していくわけだが、そこにおいて高い世界へと転生するのか、あるいは低い世界へと転生するのかは、生前その魂が「情報」に対してどのような姿勢で臨んでいたかが重要なポイントとなる。

つまり、生前、瞑想等によって情報をコントロールする術（すべ）を身に付けている人は、バルドで現われるヴィジョンや色、あるいは光といったようなものを自分自身でコントロール

し、そして高い世界へ上がっていく。しかし、生前、情報に流され、情報にコントロールされて生きてきた人は、バルドでも同様に、自分の修習した経験の構成により現われ出るヴィジョンに流され、巻き込まれる形で低い世界へと至ってしまう。

したがって、皆さんがもし日々の生活で、メディアを通して送られてくる情報に流されるままになっているのなら、その状態をもってしても悪趣転生の可能性が高いということを、肝に銘じておいた方がいいだろう。

## 情報の呪縛を解くために

わたしたちは今生生まれてから、二十年・三十年・四十年・五十年……と、けがれた情報の中で生きてきた。そしてそのデータは確実に心の奥深くに根付き、わたしたちの身・口・意の行ないを支配している。そして、この特集の前半でも取り上げたように、今や社会はけがれた情報が洪水のように押し寄せ、その勢いはますます激しくなろうとしている。

それでは、一体どのようにしてこの〝情報洪水〟から身を守り、既に取り入れた情報の呪縛から解き放たれることができるのだろうか――。

一言で言えば、その方法こそが「真理の実践」ということになる。真理の実践といわれるもののすべてが、情報の呪縛を解き、わたしたちの心を解放するために組み上げられているのだ。つまり、真理の実践の最終目標である解脱・悟りとは、一切の情報からの解放にほかならないのである。

とはいっても、これではあまりに漠然としているので、そのポイントとなる実践をいくつかご紹介していくことにしよう。

## ◎情報をできるだけ遮断する

まず何と言っても、現世的な情報はそのものが有害なのだから、遮断する（＝五感から取り入れない）のが最も手っ取り早い。

皆さんのように現世で生活を送っている場合は、この情報遮断というのは非常に難しいかもしれない。しかし、できる範囲で遮断を行なうことは、わたしたちの心をけがさない、あるいはけがすスピードを遅くするという意味において、非常に大切な実践である。

ただしこれは、情報の呪縛を解くという点では消極的な実践ということになろう。

---

つまり、皆さんがもし「苦しみ」を乗り越えたいと、そして解脱・悟りへと至りたいと考えるならば、皆さんを逆に「苦しみ」あるいはいろいろな束縛へと導いているマスコミの情報というものに対して、肯定的であっていいのだろうかという考え方、これを持ち、そしてそれをしっかりと切り捨てる必要があるとわたしは言いたいのです。（一九九三年十月五日　第二サティアン）

---

例えば、皆さんが培っている、とにかく異性を見たらセックスの対象と思えという修習、これは何かというと、動物界へ転生する道筋ということになる。例えば、皆さんがもう一つ培っている、強い者に巻かれろ、そして弱い者に対しては嫌悪の波動によって圧迫するという考え方、これはどの

世界に導かれるのかと。これは動物界へ導かれるカルマということになる。例えば、敗北する、そしていろいろなものに対して嫌悪する、邪悪心を抱く、心に絶えず悪い心の働きを生じさせる。これはどの世界へ転生するか。これは地獄の世界へと転生するということになる。

そして、わたしの知る限り、漫画にしろ雑誌にしろ、この手以外のものというのは存在しないし、また、この情報社会が、オウム真理教の信徒であるならば、完全にテレビ、新聞、ラジオ、あるいは一般雑誌等を含めてコントロールされていることを知っているとするならば、その情報の流れに巻き込まれること、そのものが無智であり、この無智のカルマは動物界へ転生する、あるいは三悪趣へ転生するための無明の根本であることが理解できるはずである。

したがって、これは君たちにとってつらいかもしれないが、そのデータをいかにシャットアウトするかどうかが、まず君たちが智慧を発展させる道ということになる。（一九九四年四月二十七日　杉並道場）



コラム

## 情報遮断は精神に異常を来たすのか？

「情報をできるだけ遮断する」というふうに言ったが、冒頭の実験にあるように、無理な情報遮断は精神に異常を来たすのではないか、という疑問を持たれた方もいるかもしれない。

実験においては、心において情報を強く求めている状態でありながら、強制的に遮断の環境に押し込められた。つまり、情報を得たいという欲求を強く押さえ付ける形になっている。しかもそれは、五感をほぼ完全に遮断しているのである。これだと、当然心は長くこの状態に耐えることはできない。

しかし、ここでいう情報遮断は、次の点で上記の実験のケースとは異なる。

（1）マスメディアを通して流れてくる情報の遮断であって、あくまで部分的であること。皆さんが現世での生活を営む以上、すべての情報を遮断することは不可能であることは言うまでもない。

（2）皆さんが自分の意思でなす遮断であること（心において遮断を望んでいる）。

（3）情報のデメリットを記憶修習しながら、次第に情報を捨て去っていく遮断であること。よって、心はスムーズに遮断を受け入れることができる。そういう意味では、「情報〝捨断〟」と言うことができる。

（4）真理のデータを取り入れながらの（心が浄化されながらの）遮断なので、心に負担はかからない。

したがって、決して精神的に異常を来たすといったことは起こり得ないので、ここでいう「情報遮断」に全力で取り組んでいただきたい。

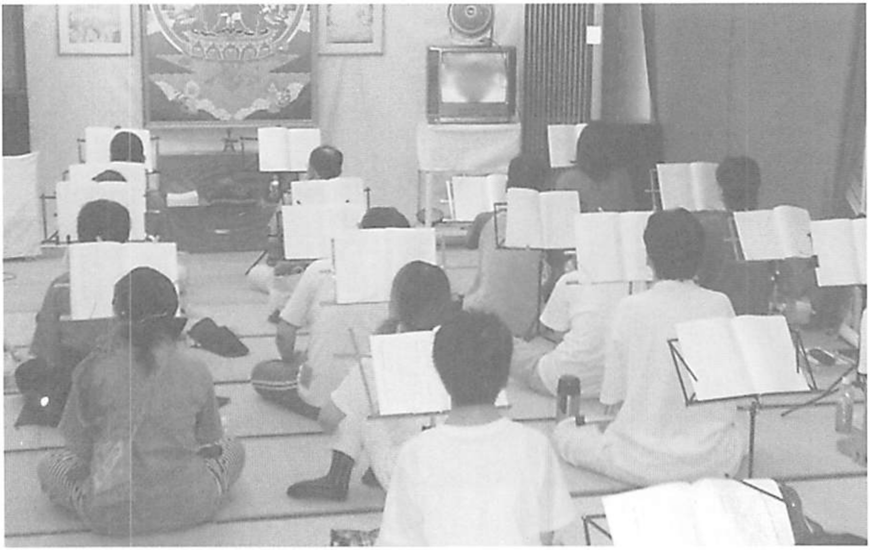


## ◎教学等でデータの入れ替えを行なう

「現世的（煩悩的）情報」の対極に位置するもの――それは聖なる情報、清らかな情報である真理のデータにほかならない。よって、教学等により真理のデータを取り入れることは、わたしたちの心を浄化し、情報の呪縛を弱めていく上で非常に有効な実践と言えるだろう。

最も正しい、最も聖なる情報というものは、わたしたちの魂を透明にし、そして高い世界へ転生させるための情報であると言える（一九九〇年三月十二日　富士山総本部）

よって、この現代のいろいろな情報に洗脳されてるわたしたちは、多くの教学をす



ることにより、その洗脳の力を弱めるということである。（一九九〇年十二月二十四日　杉並道場）

君たちが、まず到達しなければならない点は、阿羅漢だ。ラージャ・ヨーガの成就、クンダリニー・ヨーガの成就というね、阿羅漢の道に到達していかなきゃなんない、わかるな、これは。どうだ。じゃあ、そのときの背景となるものは何だ。そうだ、精神集中だ。精神集中をするためのポイントは、いかに雑念を少なくするかだ。S。
(S) はい。
じゃあ、聞こう。ここに修行者がいて、絶えず否定的なものの考えをしていたとしよう。いいか、S。
(S) はい。
これに、そばにいる仲間たちがだ、否定的な情報を、つまり解脱から遠ざけるような情報をどんどん放り込んだとしよう。この修行者はどうなると思うか。
(S) ……。
つぶれてしまうな。なぜ、つぶれるか。否定的データがどんどん入ってきて、逆に雑念の総量が増えてくるからだ。逆に、S。
(S) はい。
ここに修行者がいて、その修行者はまだ、雑念を持っていた、たくさん。しかし、説法によってその雑念を消すような説法をたくさん聴き、そして、一生懸命修行に励んだ。精神を集中させようとしたと。この修行者の精神集中力は増すと思うか。データは入れ替えが起きると思うか、どうだ。
(S) 思います。

（一九八八年九月一日　富士山総本部）

コラム

## 真理のデータと煩悩的データ
## ――一体どこがどう違う?

「同じ〝データ〟であるにもかかわらず、なぜ真理のデータなら取り入れてもよくて、煩悩的データは遮断しなくてはならないのだろうか? 真理のデータと煩悩的データとは一体どこがどう違うのだろうか?」――こうした疑問がわいてくる人もいるかもしれない。皆さんは、この質問に明確に答えることができるだろうか。

これは、端的に言うならば、エゴ(煩悩)に対するアプローチの方向性が違うのである。煩悩的データは、言うまでもなく、それを取り入れることによってエゴが強まる。なぜなら煩悩を刺激し助長するからである。しかし、真理のデータは煩悩のベクトルとは逆向きのベクトルを持つデータであるから、それを取り入れることによってエゴは弱まっていく。言い方を換えれば、真理のデータはエゴにとっては厳しい面があるということだ。

例えば、エゴは、何か嫌なことが起こった場合、それを他のせいにしたがる。しかし、真理ではカルマの法則を説き、すべては自分のなしたことの結果であることを突き付ける。また、エゴは「あれが欲しい」「これが欲しい」「楽したい」「五妙欲をできるだけ満足させたい」と思っている。しかし、真理では、そうした心の働きは功徳をすり減らすものであり、好ましくないと説く。そしてエゴにとって苦しい方、つまりカルマを浄

化する（＝功徳を積み、悪業を現象化させる）方向へ向かうことをよしとする。あるいは、エゴは偏った愛著に固執するが、真理では平等心を土台とした普遍的な愛を説く。さらに、エゴは愛著の対象から見返りを求めるが、真理では無償の愛を説く、といった具合である。

もちろん、単にエゴを封じ込めるだけでなく、それと併せて、エゴを弱め利他心を増大させることで生じる内的歓喜の素晴らしさを説き明かしている、という点は強調しておかなくてはならない。

そして、大宇宙の構造を眺めるに、低い世界ほど利己的でエゴ（煩悩）が強く、高い世界へ行くほど利他的でエゴが弱い。もちろん、低い世界ほど苦しみが大きく高い世界ほど歓喜が大きい、ということは言うまでもない。よって、真理のデータを取り入れれば取り入れるほど、わたしたちのエゴは弱まって利他心が増大し、意識は高い世界へと飛翔していくことができるのである。



## ◎真理施によって聖なる情報を発信する

では、真理のデータを多く取り入れることのできるカルマをつくるには、一体どうしたらいいのだろうか。それは、できるだけ多くの魂に聖なる情報、清らかな情報を入れてあげることだ。つまり、真理施である。

真理施を全力で頑張れば頑張るほど、カルマの法則により、わたしたちに多くの真理のデータが入ってくる環境が整う。それによって、わたしたちはスムーズに教学を進めることができるようになり、心は速やかに浄化されていくのである。

---

カルマの法則を検討してみよう。もし、多くの者に真理を伝播（でんぱ）したら、その者は多くの者から、あるいは、多くの者に真理を伝播したその総量だけ、自分に、その真理のデータが入ってくることになる。これはどうだ。ということは君たちが、心から四無量心を持って法施をするということは、君たちにマイナスになるだろうか、どうだ。（一九九一年二月十三日　富士山総本部）

---

## ◎自己の体験を帰依処とする

わたしたちが真理の実践を行なう過程においては、真理のデータと煩悩的データ（＝現世的情報）のぶつかり合いが必ず起こる。そして、時には煩悩的データの方が勝つ場合がある。そのとき、皆さんは疑念にさいなまれるかもしれない。

ここで大切なのは、自分自身を信じるということだ。ここでいう「自分自身を信じる」と

は、真理の実践途上で経験した自分自身の内的変化（神秘体験や心の体験）を信じるということにほかならない。もちろんその根底には、グルをはじめとする三宝の力を信じるということが大切になってくる。それにより、疑念の危機を乗り越えることができるのである。

---

そして、末法の今、いろいろな経典が存在している。そこで、次に登場する、自己を根本としなさい、自己を帰依処としなさい、自己を島としなさいという言葉が登場しなければならない。それは何だと。

ここに経典があると。ここに教えがあると、果たしてこの教えによって、この教えのとおりに実践したら、自分はそのとおりの経験というものをするのだろうかと。もし、その経験をするならば、それは他人が何と言おうとも、その経験は絶対的なものである。もし、自分自身を最も信頼しているならば、そこで経験したこと、例えば神秘体験にしろ、例えば神通力にしろ、例えば超能力にしろ、例えば心の安らぎにしろ、それは絶対的なものとなる。

しかし、もし自己を根本とせず、周りの言葉、あるいは情報を根本とするならば、そこで当然、揺らぎが生じる。心の動揺は苦しみの因を招く。そして、また苦しみが次の苦しみを生み出す。（一九八九年十月十九日　富士山総本部）

コラム

## ◎シャットアウトできない情報は「変容」を

現代のような情報化社会に生きているわたしたちは、五感から入ってくる煩悩的情報をすべてシャットアウトすることは不可能である。

したがって、シャットアウトできない情報については、それに応じた対処法が必要となる。その一つが「変容（へんよう）」といわれるものだ。変容とは、情報の意味合いを変換し〝煩悩的情報〟を〝聖なる情報〟へと変えてしまう技法のことである。

実際、これはかなり高度な実践で、駆使することはなかなか難しい。しかし、できる範囲で取り組むことは、煩悩的情報が渦巻く中にあって清らかな心を保持し続ける上で大変効果的である、ということは言えるだろう。

「変容」とは何かというと、例えば、あるものを見ると。例としてはリンゴにしましょうと。「ああ、このリンゴ、このリンゴは赤い。そして、きっと酸っぱくて甘いだろうと。おいしいだろうと」と考えると。これが一般の見方かもしれない。あるいは、そのリンゴの赤さを見て、「ああ、恋人の頬っぺたの赤さと同じである」と考えるかもしれない。

しかし、もしそうではなく、「ああ、このリンゴを、例えば神々に供養しようと。それによって功徳が積めればなあ」

と考えたり、あるいは「このリンゴが、グルのエネルギーの入っているリンゴであり、それにより、大きな霊的覚醒を得られたらなあ」と考えることができるとするならば、それは、同じリンゴを見、そして食べたとしても、結果は全く別のものとなるはずです。（一九九三年十二月十八日　亀戸道場（参入の儀式））





## ◎イニシエーションを受ける

最後に、情報の呪縛を解く最も効果的な方法をご紹介しよう。それが、パーフェクト・サーヴェーション・イニシエーションをはじめとする「イニシエーション」である。

イニシエーションは、ご存じのとおり、わたしたちに内在しているけがれたデータを抜き去り、清らかなデータを植え付ける特殊な技法である。このダイレクトかつダイナミックな情報の入れ替えにより、わたしたちの心は一気に浄化されることになるのだ。

その三つのイニシエーションというのは、一つは、あなた方に対して秘儀といわれている瞑想技術を、あるいは戒をね、口頭で伝授するというやり方。それから第二番目には、シャクティーパットを含む、アストラル、イメージの浄化を行なうやり方。そして、第三段階にはね、あなた方のコーザル・レベルの心をチェンジさせるというやり方と、この三つをいいます。

そして、経典では、このイニシエーションを受けない限り、真の世界への到達はないといっているんだ。わたしはね、特に時間の少ない、時間のない現代人が、しかも正しくない情報の中にいる現代人が、最終の心の純粋な状態、あるいは心のクリアな状態に至るためにはね、イニシエーションは欠くべからざる要素だと考えている。（一九八八年一月二十九日　ニューヨーク支部）

……例えば氷山ほどの煩悩があったとしても、その氷山ほどの煩悩に対してどの

ようにアプローチし、どのようにそれを止滅したらいいかというデータがパーフェクト・サーヴェーションのデータです。理解おできになりますか。ということはどういうことかというと、その一つ一つの問題点に対しての解答を与えるというだけではなくて、その解答の与え方、つまり問題の解き方がそのパーフェクト・サーヴェーションのデータの中に伝授されているわけです。

（一九九四年一月三十日　亀戸道場）

## 《体験談》◎データの恐ろしさとイニシエーションの素晴らしさを実感

オウム関係の情報が載っている、週刊誌や雑誌を読んだときのことです。

最初は「オウム関係のところだけを読もう」というつもりだったのが、本をめくっているうちに、他のページの写真が自然と目に入り、さらには「少しだけなら……」ということで、ついついそれ以外の記事も読んでしまったのです。

その後どうなったかというと、修行を始める前のころに、旅行や遠足、遊びに行くときなどに感じた、〝そわそわ〟〝わくわく〟した、何とも言えない楽しい気持ち、イメージ、興奮、そして欲求などが心の中、頭の中で次々とわいてくるのです。

そして、頭が回らない、思考が働かない、夢が現世的な夢になる、話し言葉が綺語っぽくなる、という状態になってしまいました。

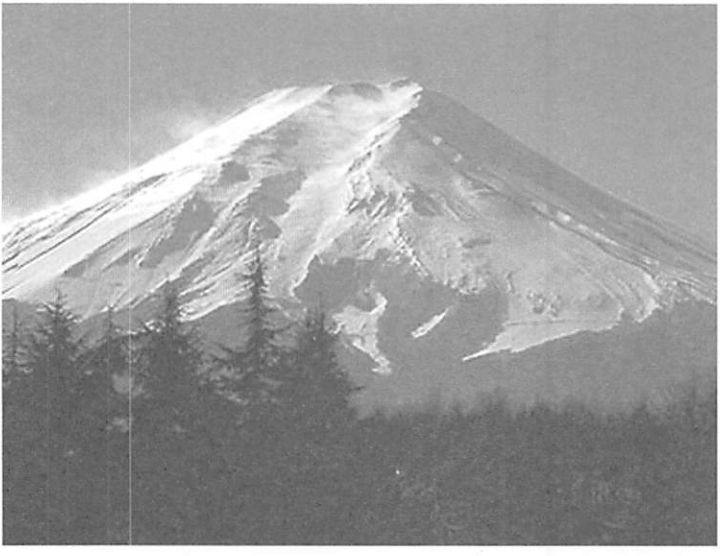
修行の方も普段よりも大変になりました。雑念が出てきて集中が全然続かないとか、落ち着かなかったりとか……。

そのようなとき、パーフェクト・サーヴェーション・イニシエーションを着けました。そうしたら、なんと、どんどん浄化されていくのがわかりました。そしてしばらくすると、雑誌などのデータを入れる前の、元の正常な自分に戻っていました。

パーフェクト・サーヴェーション・イニシエーションを着けることにより自動瞑想が始まり、グルのデータが入ってきて、浄化してくださったのです。「本当に、パーフェクト・サーヴェーション・イニシエーションはすごい、素晴らしい！」と思いました。

そして、それとともに、データの怖さというのを実体験させていただきました。本当に、現世のデータは悪趣への道のデータしかないんだ、ということがよくわかりました。

それとは反対に、グルがお説きになっている法則の記憶修習をすることは、わたしたちを高い世界へ導く道なのだと、幸福にする道なのだということを、再度認識させられました。（S）



Chapter 6

# 「情報と心」――まとめ

　ＩＴ革命の進行により、わたしたちを取り巻く情報通信環境は今後もますます大きな変化を遂げていくに違いない。そしてその変化に伴い、これまで想像もできなかったほどの大量の煩悩的情報が、電波や光を媒体として世界各地を飛び交うことになる。

　このままでいくと、やがて全世界のアストラル空間が煩悩優位の波動によってより一層けがされ、三悪趣のエネルギーに満たされる時代がやってくる、と考えていいのではないだろうか。そしてそのとき、仮想世界と現実世界の境界、つまり潜在意識と表層意識の境界を見失った人々は、アストラル（潜在意識）のけがれがもろに噴き出し、次々と狂い始めるに違いない。その兆候は、既にネット人間の凄惨な犯罪に現われてきている。もはや、わたしたちに逃げ場はなくなりつつあるのだ。

　しかし、グル・シヴァ大神・すべての真理勝者方は、このような時代にあっても――いや、このような時代になることを既に見越して、と言った方がいいかもしれないが――わたしたち真理の実践者が自己の心を守りつつ、他の魂を救済することができるだけの修行法やイニシエーションを与えてくださっている。

　それだけでなく、いつでも三宝に心を向けるだけで、聖なるエネルギーによってわたしたちの心は浄化され、邪気から守られる。グル・シヴァ大神・すべての真理勝者方の慈愛

は、時空を超えてわたしたちに降り注がれているのである。
もう一度、この恵まれた環境、恵まれた条件について思いを巡らし、感謝の心を持って真理の実践に励んでいっていただきたいものである。
最後に「情報と心」のまとめに当たり、このテーマにふさわしい説法をご紹介することで、今回の特集を締めくくることにしたい。

## ◎アーカーシック・レコードのどのパートのデータを取り出すか

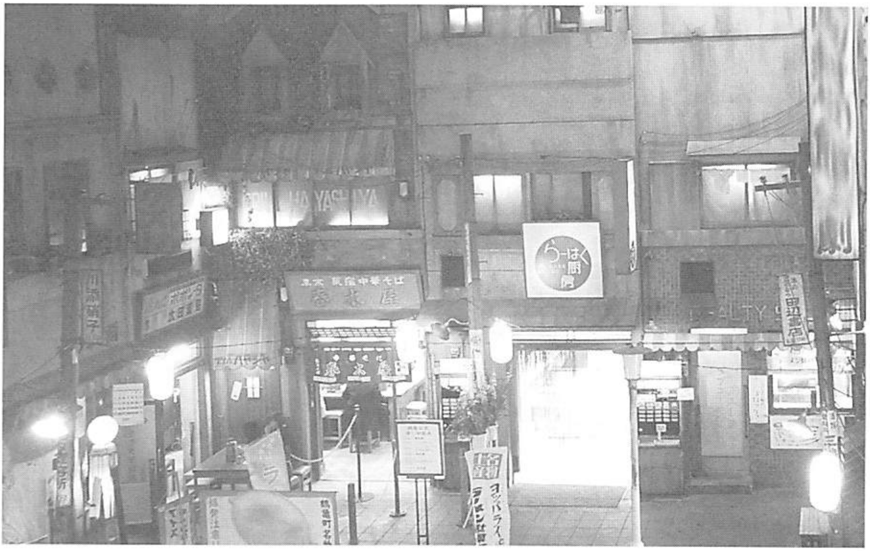
ではね、オウム真理教の一体在家の修行とは何だと。それは、基本的には六つの極限であり、そして聖なる八段階の実践であると。では、何を目的としてるんだと。それは、今生は皆さんは在家だから、できるだけ煩悩を弱め、例えばムーラダーラ、スヴァディスターナ、マニプーラの、その働きを弱め、そして悪趣を捨断し、人間以上の世界へ転生する。あるいは、アナハタ、ヴィシュッダ、アージュニァーという六つのきずなを完全に捨断し、それにより神聖天へと転生すると。あるいは、マハームドラーを完全に完成し、中央管を通り、そして仏陀になると。これが皆さんの道筋であると。
では、何を実践すれば、そうなるんだと。それは六つの徹底であり、聖なる八段階の実践であると。そして、聖なる八段階の実践、これを発展させた聖なる十段階の実践であると。そして、この教えは既に二千六百年前、釈迦牟尼が、サキャ神賢がこの世に下ろされた法であると。ここでわたしが

「下ろされた法」と言っているのはどういう意味かと。

もともと真理というものは、アーカーシック・レコードの中の最上位に存在するデータです。そして、わたしたちが例えば「何かをわたしたちが得た」ということは存在せず、すべてそのデータのどの部分のデータによって生きているかということによってわたしたちの転生が決まり、そして生き方が決まるわけです。

転生が決まり、生き方が決まるということはどういうことなのかと。つまり、わたしたちがどのような生き方、どのような方向性でいくかということは、そのアーカーシック・レコードのどのパートのデータをいつも取り、そしてそれを行なっているかということなのです。

それはちょうど、例えばここに十件の店



屋があったと。フランス料理、中華料理、日本料理と。そのほかに、寿司屋、ラーメン屋、そば屋、ちゃんぽん屋、うどん屋──わたしがあんまり高い店を知らないっていうのがここで暴露されてしまうわけだけど──そして精進料理と。そして最後に焼き肉屋と。で、この十店舗の中で、例えば皆さんはおそらく、「あ、これが好きだ」とか、「これが好きだ」という心の働きがあるはずだ。

つまり、例えば、この十の店舗が存在していたとしても、皆さんの取る店、つまり行く店というのは決まっているはずである。取る店、つまり、行く店が決まっているということは何かというと、そことのパイプができ上がっていると。そこの部分との、絶えずデータの入れ替えが行なわれていると。ということは、例えばだよ、今まで焼き肉屋に行っていた人が、チャンポン屋に行くようになって、もう焼き肉が嫌いになったと。この場合、当然、焼き肉屋というデータは捨断され、そして、チャンポン屋のデータがどんどん入ってくると。

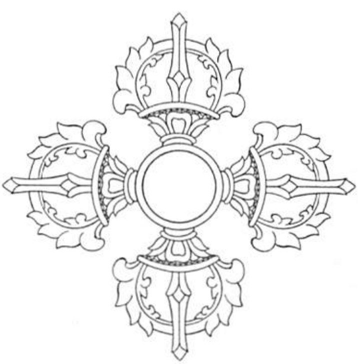
同じように、皆さんが例えば嫌悪を修習し、あるいは迷妄を修習し、あるいは愛著を修習すると。この状態から、例えば嫌悪だけでも捨断したならばどうなるだろうかと。それは、迷妄と、そして愛著という二つが残るわけだから、当然、人間界か、あるいは天界か、あるいは動物界か、といったような形の転生を取ることになるでしょう。

しかしだよ、今まで真理の実践をしていた人が周りから反対されて、「俺はもう真理の実践いいよ」と、そしてそれからまた嫌悪が始まると。それによって彼は、ちょ

うどチャンポン屋を、今まで行ってたんだけども、チャンポン屋をやめて焼き肉屋に行くように、地獄界への道をまた歩き出すことになると。

つまり、仏教というものは、科学を超えた科学なんだね。真理というものは科学を超えた科学なんだよ。そして、それは、その教えというものは、しっかりとそれを見据えれば、その背景にある智慧の深さに感動し、そしてそれを実践してみようと。実践することによって、多くの利益が存在するんだということが認識できるわけです。

例えば、一つ例をあげましょう。皆さんが布施の実践をなさると。その布施の対象が、例えば真理であるならば、あるいは真理を体現したグルや、あるいはその背景にいらっしゃるすべての真理勝者や、あるいはシヴァ大神であるならば、当然皆さんの布施は智慧という形になって還元されるでしょう。それはなぜかというと、真理、グル、そして真理勝者、シヴァ大神というのは、智慧の宝庫だからです。当然、そこへ心を向け、そして自分の最も大切にしているものを投げ出すことにより、そのパイプは強くなり、そこからのデータというものは、当然向かうはずです。（一九九一年九月十四日 水戸支部）



# JĀTAKA

## ジャータカ

### 第２回　サンカ輪廻転生談
### （サンカ・ジャータカ）



これは、尊師がジェータ（勝利者）林にとどまっていたときに、すべての必需品の布施に関して講演なさったものです。

　サーヴァッティ（すべてのものがある）において、一人の帰依信男が真理勝者の法則を説くことを聴いて、翌日に、浄信ある心で招き、自分自身の家の門で特設の集会場を作らせ装飾して、その次の日（食事の）時を告げさせました。尊師は五百人の向煩悩滅尽多学男の従者団とそこに行き、用意された無上の華麗な座に座りました。帰依信男は、覚者を長とする向煩悩滅尽多学男出家教団に偉大なる布施を施して、

「また翌日に」と、このように七日招いて、偉大なる布施を続けさせて、七日目にすべての必需品の布施を施しました。ところで、それを施すときに、履き物の布施をあふれゆくばかりに作って施しました。十の能力者に施された履き物一足は、金千個の値打ちがあるものであり、二人の最上の多学の弟子には、五百個の値打ちがあり、残りの五百人の向煩悩滅尽多学男には、百個の値打ちがありました、と。

　このように、彼はすべての必需品の布施を施して、自分自身の集団と一緒に、世尊の面前で座りました。それで、この人に尊師は甘美な声で感謝の意を表わしながら、

「帰依信男よ、あなたのすべての必需品の布施は巨大である。大喜びして存在しなさい。前世において覚者が流転なさっていないときに、独覚

にただ一つの履き物一足を施して、船が壊れたときに、安住場所のない海において、履き物の布施の帰結によって安住場所を得た。ところで、あなたは覚者を長とする出家教団に、すべての必需品の布施を施した。そのあなたの履き物の布施に対して、なぜ安住場所がないことがあろうか」

このように言って、彼に懇願されたので、物語をお話しになったのです。

その昔、このバーラーナシー（剣の城壁）は、モーリニー（髪の房を有するもの）という名前で存在しました。モーリニー市で、ブラフマダッタ（神聖賦与）が君臨していたころ、サンカ（ほら貝）という名前の祭司が、豊かで大いなる財産があり、四つの市の門において、市の真ん中において、居所の門において、このように四つの場所において布施堂を作らせて、毎日金六十万個を投じ、悲惨な生活をしている人々や旅人たちへの偉大なる布施を続けさせました。

ある日、彼は思念しました。

「家の財産が破壊されたとき、わたしは布施を施すことができなくなるだろう。財産がまさに完全に破壊されていないときに、船でスヴァンナブーミ（黄金の地）に行って、財産をもたらそう」

と、彼は船を装備し商品を満たしてから、妻子に呼びかけて、

「わたしが帰るまで、それまでわたしの布施を断ち切らないで続けさせなさい」

と言って、奴隷と召使いに取り囲まれ、日傘を持って履き物を履き、正午に港の村に向かって

向けて発ちました。
その刹那、ガンダマーダナ（香りで酔わせる山）で一人の独覚が思案していると、財産をもたらすために進んでいる者を見て、
「偉大なる男性が財産をもたらすために進んでいる。一体この人に海において全く障礙がないことがあろうか」
と思案し、
「あるだろう」
とわかって、
「この人がわたしを見たら、日傘と履き物とをわたしに施して、履き物の布施の帰結によって、海で船が壊れたときに安住場所を得るだろう。わたしはこの人に手助けをなすだろう」
と、空間を通ってこちらに来て、彼に遠くないところに降りて、粗暴な風と熱暑において、炭火の敷物と同じ熱い砂粒を押しつぶしながら、彼に向かってこちらに来ました。彼はそれを見て、
「功徳の田畑がわたしに来た。今日、わたしはここで種子を植え付けなければならない」
と、喜んだ心で素早い動作で彼に至って、うやうやしくあいさつし、
「尊者よ、わたしの手助けのために、わずかに道から離れて、この樹下に達してください」
と言って、その樹下に至ったときに樹下で砂粒を盛り上げて、上布を用意し独覚を座らせると、芳香で満たされ濾過された水で足を洗い流し、香油によって塗布して、自分自身の履き物を脱いでふき、香油によって塗布して、彼にしっかり着けて、
「尊者よ、この履き物を履いて、日傘をてっぺん

にして行ってください」

と、日傘と履き物を施しました。彼は彼への手助けのためにそれを持ち、浄信が育つ手段として、この人がまさに見ているときに飛び上がって、まさにガンダマーダナに帰りました。

到達真智運命魂もそれを見て、極端に浄信がある心で、港に行って船に乗りました。それで、この人が大海に入った七日目に、船が裂け目を与え、水をくみ出すことができませんでした。多くの人々は死の恐怖でぎょっとし、自分自分の愛欲本質神たちに帰依して、大きな叫び声を叫びました。偉大な生命体は、一人の奉仕者を連れ立って、肉体すべてを油で塗布して、透明なバターと一緒に粒状の砂糖の粉末を必要とするだけ食べ、彼にも食べさせると、彼と一緒にマストのポールのてっぺんに登って、



「この方角にわたしたちの市がある」
と、方角を確認し、魚と亀の邪魔から自分自身を解き放たせて、彼と一緒に一ウサバ（約六七・二メートル）ほどを通り過ぎながら落ちていました。多くの人々は破局に達しました。しかし、偉大な生命体は奉仕者と一緒に海を渡ることに着手しました。彼がまさに渡るのに七日が去りました。そのときも、彼は塩水で口をゆすいで、まさに戒誓行の誓いを守って存在しました。

さてそのとき、四人の世界の守護者によって、マニメーカラー（水晶の帯）という名前の愛欲本質神が、
「もし船が壊れたときに、あるいは三つの救いを活用したり、あるいは戒を獲得したり、あるいは父母の愛欲本質神である人間たちが苦しみに達したことになるならば、あなたは彼らを守護しなければならない」
と、海における注視のために設置されることになりました。彼女は自分自身の支配によって、七日怠惰になっていましたが、七日目に海を見ながら、戒の慣行に適しているサンカ祭司を見て、
「この人が海に落ちてから七日である。もし死んだならば、極端に叱責されるべきことになっていただろう」
と、戦慄した意識から、一つの黄金の深い鉢を、様々な最上の味の天の食べ物で満たして、風の素早い動作でそこに行き、彼の前方に空間の中にとどまって、
「祭司よ、あなたは七日食物なしでした。この天の食べ物を召し上がってください」
と言いました。彼は彼女を見て、

「あなたの食事を持ち去りなさい。わたしは戒誓行の誓いを守ります」と。

それで、この人の奉仕者は後ろから来ていましたが、愛欲本質神を見ないで声だけを聞いて、「この祭司は本来繊細な方だ。七日食物なしの状態によって苦しんで、死の恐怖によっておそらく無益に話すのだろう。彼を勇気づけよう」
と思念して、第一の詩句を言いました。

一「サンカよ、あなたは多学で法則を聴聞しています。
　そしてあなたによって、出家修行者たちや
　祭司たちが見られています。
　それで不適切な場合に、
　あなたは無益な話を見せています。
　じゃあ、わたしより他のだれが、
　あなたに返事するのですか」と。

彼はその発言を聞いて、
「おそらく、この人にはその愛欲本質神が認識され理解されていないのだ」
と思念して、
「君、わたしは死を恐怖していない。しかし、他の者がわたしに返事しているんだ」
と言って、第二の詩句を言いました。

二「優れたまゆ毛で美しく、
　手の装身具を大変しっかり着けた者が、
　黄金から成り立っている深い鉢を
　差し出して、
　『食事を食べなさい』と、
　わたしに話しかける。

信ある心から『全くない』と、
わたしは彼女に明言する」と。

それで、彼はこの人に第三の詩句を言いました。

三「祭司よ、真にこのような人食い鬼神を見て、
僕（しもべ）は楽を望んで質問すべきです。
立ってください。彼女に尊敬の念に満ちた
あいさつの印として握りしめた両手を上
方に捧げて、勝（まさ）って質問してください。
『あなたは実は愛欲の女神か、それとも実
は人間の女性でありますか』」と。

到達真智運命魂は、
「あなたは適していることを主張しました」
と、彼女に質問しながら、第四の詩句を言いました。

四「あなたがわたしを心安らかに
じっと見守っている、
『食事を食べなさい』と、そのわたしに
話しかける。
大いなる威神力のひとかどの女性よ、
あなたに質問します。
『あなたは実は愛欲の女神か、それとも実は
人間の女性でありますか』」と。

これから、愛欲本質神は二つの詩句を唱えました。

五「サンカよ、わたしは大いなる威神力の

愛欲の女神です。
ここに来ました、大洋の水の真ん中に。
慈悲があり、そして全く害悪をなした心ではなく、
まさにあなたのために、わたしはここに来ています。

六 ここに、食べ物と飲み物、そして寝台と座、別の様々な乗り物があります、サンカよ。
すべてを、あなたにわたしは手に入れさせましょう。
あなたが意識によって希求するどんなものも」と。

それを聞いて、到達真智運命魂は、
「この愛欲本質神は、海の表面において、わたしに『これとこれとを施そう』と話しかけている。
一体この人は、わたしによってなされた功徳の要素の蓄積によって施そうとしているのか、それとも自分自身の力によってか、その場合には彼女に質問しよう」
と思念して質問しながら、第七の詩句を言いました。

七 「わたしの捧げ物や、あるいは生けにえとして捧げられたものどんなものも、
すべてに対して、実はあなたは最高の女神である、優れた全身よ。
優れた臀部、優れたまゆ毛、すらりとした腰よ、
わたしの何の要素の蓄積に対して、この結果があるのか」と。



それを聞いて、愛欲本質神は、
「この祭司は、なされた善の要素の蓄積をわかっていないとわたしを認知して、おそらく質問するのだろう。今、この人に伝えよう」
と伝えながら、第八の詩句を言いました。

八「祭司よ、熱の路(みち)において、
足を痛め、のどが渇き、疲労した一人の
向煩悩滅尽多学男に、
サンカよ、種々の履き物を手に
入れさせました。
今日、あなたのその寄贈が愛欲の乳を
搾ります」と。

到達真智運命魂はこれを聞いて、
「まさしく同様に、このような安住場所のない大

海において、わたしによって施された履き物の布施は、すべての愛欲を授けることになった。
ああ、独覚へのわたしの布施が優れて施された」と、喜んだ心で、第九の詩句を言いました。

九「平たい厚板で生じた、漏れ出ることがなく、
追い立てる風に適している、その船が
生じますように。
他の乗り物に、全く地があることはない。
まさに今日、わたしをモーリニーに
至らせなさい」と。

愛欲本質神はその言葉を聞いて、喜んだ心で、七宝から成り立っている船を作りました。それは長さが八ウサバ（約五三七・六メートル）で、幅が四ウサバ（約二六八・八メートル）で、深さが二十ヤッティ（約六七・二メートル）ありました。それには、サファイヤから成り立っている三つのマスト、黄金から成り立っている種々の綱、銀から成り立っている種々の帆、まさに黄金から成り立っている櫂（かい）と舵（かじ）がありました。

愛欲本質神はその船を七宝で満たし、祭司を抱擁して、装飾された船の上に置きましたが、しかし、この人の奉仕者を見なかったのです。祭司は自分自身がなした素晴らしいことからの収得を彼に施し、彼は感謝しました。そのとき、愛欲本質神は彼をも抱擁して、船に設置しました。それで、その船をモーリニー市に導き、祭司の家に財産を設置してから、自分自身のまさに住まいの場所に去ったのです。

尊師は現正覚して存在なさって、

一〇「彼女はそこで満悦し幸福で愉悦し、
大変多彩な船を勝って神通創造して、
サンカを案内して、下男と一緒に、
素晴らしく満足できる市に導いた。」

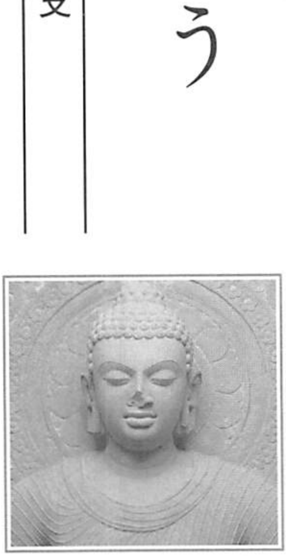
と、このあとの詩句を唱えました。

祭司も一生涯、無限の財産の家に住んで、布施を施し、戒を守り、寿命の終わりに集団を伴って愛欲神の市を満たしました。

尊師はこの教えをもたらした後、種々の絶対の真理を説明し、輪廻転生談に当てはめられたのです。（絶対の真理を完達したとき、帰依信男は真理の流れに入る果報を確立しました。）
「そのときの愛欲本質神はウッパラヴァンナー（青蓮華の色彩）であり、下男はアーナンダ（快楽）であり、サンカ祭司は、まさにわたしなのである」と。

# 真理の修行体系を見渡してみよう

## 第六回◆七覚支



### 何を喜ぶかによって生き方が決まる

わたしたちは喜びを感じるものに心が向かい、苦しみの方に向かおうとしない。

ごく普通の人たちは、とにかく楽しいこと、嬉しいことを体験したいと思っているだろう。何か面白いことはないか、何か気持ちのいいことはないか、と探し求め続ける人たちがいる。ほしいものが手に入り、遊んで暮らせるなら、それが一番いいと思っている人も多いだろう。しかし、現実には楽しいことばかり味わえるものでもない。それで一喜一憂してしまう。

それとは違って、単に目先の楽しみだけを追

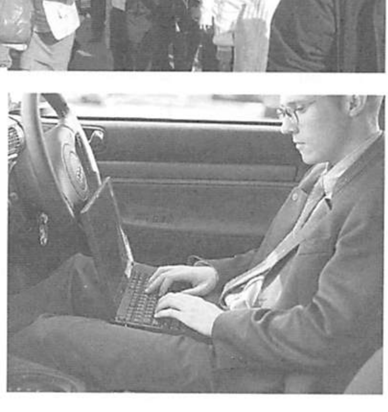
い求めるのではない人たちもいる。たとえば、仕事に生きがいを感じたり、研究や学問に打ち込んだりして、充実した日々を送っていると主張する人たちもいるだろう。こういう人は、達成すること、コツコツと積み上げていくことに対して喜びを感じているはずである。

わたしたちは、何に対して喜びを感じるかによって、向かう方向が変わってくるわけである。もし、わたしたちが功徳を積むこと、戒律を守ってエネルギーを保全すること、あるいは真理を学び、真理を実践し、そして高い世界の経験をし、幸福な転生や煩悩破壊といった素晴らしいものを「喜び」とするならば、自然とその方向に心が向かうだろう。

何を喜ぶか。それが「喜覚支」の土台にある。







## 喜覚支の五つのポイント

修行は、苦しい苦しいと思ってやるものではない。それではどんどんつらくなっていき、やがてやる気がなくなってしまう。つらい修行をやりながらでも、そんな修行をやっていることを喜べるなら、修行は進んでいくものだ。

喜覚支の実践については、五つのポイントを押さえておく必要がある。

その第一のポイントは何かというと、まず始める前に——例えば先程言った奮闘努力する前に、「この修行によって一時的に苦しみは生まれるかもしれないが、しかし、その一時的な苦しみを超越することによって、わたしは感覚から離脱できるんだ」と、「これはなんと素晴らしいことだろうか」と、「うれしいことだろうか」と考えると。

そして実際修行を行ないながら、「ああ、今わたしは痛みを経験しているが、この痛みによってわたしは感覚から離脱できる」と。「なんて楽しいんだろう」と、「なんとうれしいんだろう」という記憶修習を行なうと。

そして修行が終わった後、「わたしは以前は感覚の喜びにだけ捕らわれていたが、感覚には苦しみというものが存在するんだということを悟った」と。「これはなんと素晴らしいんだろう」。またここで喜びを修習すると。

そして例えば今まで外的な温度が四七度、四八度しか耐えられなかったのが五〇

度耐えられるようになってきたと。その三度をまた喜ぶと。

つまり始める前、実践中、そして終わり、その進歩を見て喜ぶと。

そしてこの喜びは次のステップの土台であるということを考えながらまた喜ぶと。

この五つの段階の喜びを修習するならば、必ずや修行に勢いがつき、そして決して途中で挫折することはないであろう。

（一九九二年九月二十五日　広島）

---

つまり、

1　始める前に喜ぶ
2　修行をしながら喜ぶ
3　修行をしたあと喜ぶ
4　進歩を見て喜ぶ
5　次のステップの土台と考えて喜ぶ

という五つの段階の喜びを修習していくのが、喜覚支のポイントである。



これは逆のことを考えてみるとわかりやすいかもしれない。

始める前には「いやだなあ、やりたくないなあ」と思いながら嫌々取りかかる。やっているときに「やっぱりいやだなあ、面白くないなあ」と思っている。終わった後「やっと終わった。もういやだ」と思う。そして、前よりも進んでいるかどうかなど気に止めない。これで次のステップに進めるという喜びもない……。これでは決して修行が進むはずもないだろう。

逆に、現世の仕事であろうと何だろうと、自分が喜んでやっていることについては、この喜覚支がある程度できているのではないだろうか。始める前、やっている途中、終わった後に喜び、進歩を見て喜び、次の土台であると考えて喜びがわいてくるはずだ。

喜覚支はこれほどまでに重要なのである。

## 心も体も軽快に

さて、この喜びの修行がうまく進んでいれば、それは身体に大きな影響が生まれてくる。

そもそも、わたしたちは、この肉体や感覚やイメージ、あるいは経験の構成、識別といったものにとらわれている。それはナーディーの詰まりとなっている。

しかし、このとらわれから解放されると、心身は軽快となり、ナーディーが浄化され、エネルギーが上昇し、絶えず心地よい状態でいられるようになる。

これが、喜覚支に続く軽安覚支の状態だ。

修行はわたしたちの心をとらわれから解放するものだ。心の重荷を取り去るものだ。それならば、心身が軽快にならないのはおかしいだろう。

これは気分だけの問題ではなく、実際に身体に大きな変化をもたらす。

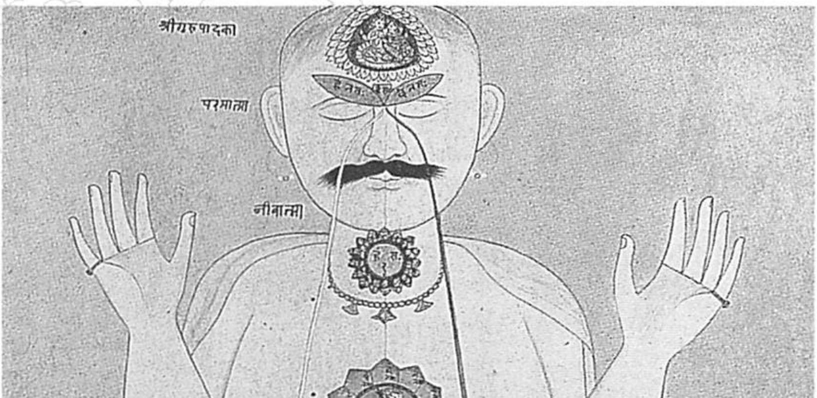
ナーディーの浄化は、心身がいかにリラックスするか、つまり軽快になるかによって決定されます。

また、別の見方をすれば、いかに若返るかということをポイントとして見ることもできるでしょう。

つまり、これは半分綺語に聞こえるかもしれないけれど、真実の真剣な言葉として言いたいことは、「真理の実践を本格的に行ない、それに没頭するならば、最高の美容の実践をしているんだ」ということができると。

（一九九二年九月二十七日　富士山総本部）





## 覚醒に至る七つのプロセス

この二つの実践項目、つまり喜覚支・軽安覚支は、七覚支——七つの覚醒段階の四番目・五番目の項目だ。ここで改めて七つの覚醒段階を見てみよう。

1　記憶修習覚醒段階（念覚支）
2　検討覚醒段階（択法覚支）
3　奮闘努力覚醒段階（精進覚支）
4　喜覚醒段階（喜覚支）
5　軽安覚醒段階（軽安覚支）
6　サマディ覚醒段階（定覚支）
7　無頓着覚醒段階（捨覚支）

記憶修習、奮闘努力、サマディ、無頓着などはもうすでにお馴染みの内容だろう。ここでは簡単に内容を追っていくとしよう。

### ◎記憶修習

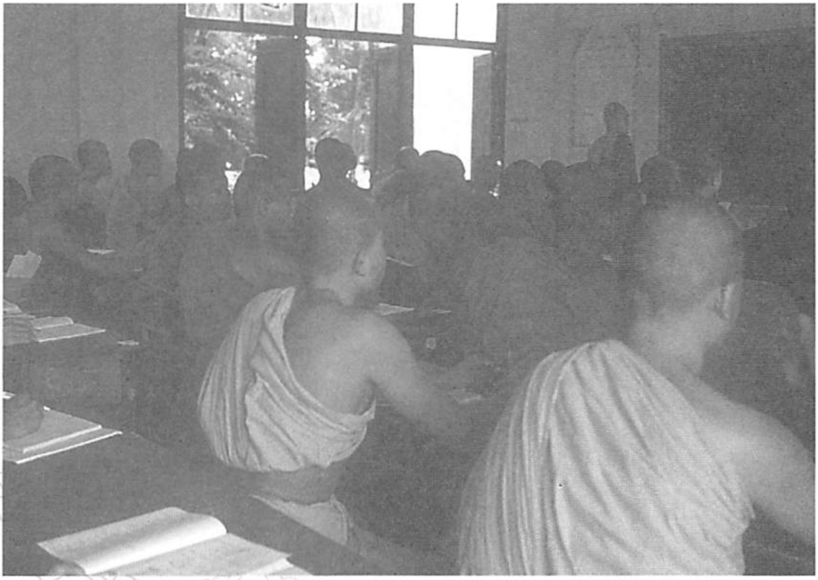
まずは法則を記憶し続けるということである。単に覚えるだけではなく、しっかりとそのデータを根づかせることだ。

深く根づいて、煩悩が襲ってきたとしてもちょっとやそっとでは揺らがないくらい、しっかりと記憶修習し続けていくのである。

この記憶修習については、他の実践項目にも含まれているとおりだ。

### ◎法則を選ぶ

法則にはいろいろなものがある。「では、今、そ



の真理の法則の何を選んで実践すべきなのか」ということを検討する必要が出てくる。これが「検討覚醒段階」または「択法覚支」と呼ばれるものだ。

例えば例を挙げるならば、在家に対する真理、出家に対する真理、あるいは男性に対する真理、あるいは女性に対する真理、あるいは、例えば出家においては、出家の一般生活に対する真理、あるいは修行に入ったときの真理といったような形でいろいろなケースが分かれる。

よって、その場その場に応じた、どの真理を実践するのかということが規定になってくる。

（九一年三月九日　高知）

その場その場に応じて、適切な法則を当てはめることは非常に大切なことである。

◎奮闘努力

第三番目の段階では、選んだ法則を実際に実践していくことになる。そこでは、具体的には二正勤二正断の実践などを行なっていくこととなるだろう。この詳細については、今までの連載ですでに述べたとおりである。

◎喜覚支・軽安覚支

そして、今回最初に述べた喜覚支・軽安覚支の段階に入る。

たとえばカルマ落としがあったとしても、それを喜んで受け入れ、そのつらさに耐えながら喜び、カルマが落ちてしまったことを喜ぶことができるならば、修行は飛躍的に進むだろう。そして、心身は本当に軽快になっていくはずである。

そして、次の段階、サマディへと入っていく。

◎サマディ

サマディに入ったときには、たとえばこのような修行が行なわれることとなる。

---

サマディ覚支とは何かというと、今自分の行なっている状態を正確に見つめる。まあ、これは六つの極限では「寂止」と「正観」ということになるけどね。

つまり、自分の修行はきちんと行なわれ

ているか、正法の実践をしているかどうかを視覚的、聴覚的、嗅覚的に神秘の世界に没入させ、それを見極めるわけである。これが六番目の覚支である。

（九一年三月九日　高知）

## ◎最後は無頓着

そして、最後の七番目の覚支は、現在起こっている現象について頓着しないということだ。

この無頓着覚支がなぜ仏陀に至る道なのかというと、例えば、この今の状態というのは過去、あるいは過去世のわたしたちの善業と悪業の集積が、単に現象化してるにすぎない。

もちろん、これが現象化する場合、その人がタマスであるか、あるいはラジャスであるか、あるいはサットヴァであるかによって、その現われるスピードやあるいは形は変わってくる。

しかし、いずれにしろ、ラジャス、タマス、サットヴァそのものもカルマであるから、今わたしたちが経験している、苦しみ、喜び、あるいは苦しみでも喜びでもないもののすべてはカルマの幻影である。

だとするならば、今ここでそういったような感情にとらわれているのは、まさに時間の無駄である。今なさなきゃならないことは、未来のわたしたちの五蘊形成を神々から最終的には如来へと、つまり、供養値魂にするために、つくり変えていくべきとき

なのである。そうなると、この現実に対して頓着すべきではない。
そしてこれが仏陀に至る、覚支の中の最後に置かれているというのは、なかなかわたしは深遠なものがあると考えている。

（一九九一年三月二〇日　富士山総本部）

## 七覚支の位置づけ

さて、この七つの覚醒段階だが、他の修行体系とどのような関係にあるのだろうか。
もちろん、この連載の第一回でも念を押したとおり、この修行体系というものは「枠組み」にすぎない。したがって、その位置づけ・意味合いというものは一つに限定されるものではない。
そのことを踏まえた上で、ヒナヤーナ、つまり小乗の一つのパートとしての七覚支について見てみよう。
テーラヴァーダ仏教の基礎であるヒナヤーナの教えの全容は、次の四段階で表現することができる。

1　五根・五力
　これによって覚醒した意識状態となる。
2　七つの覚醒段階
　十力者へ移行する。
3　聖なる十段階の道
　大乗の修行に入り、最終の解脱へ至る。
4　完全なる解脱・悟りへ到達した後、救済しか存在しない段階

つまり、五つの潜在性・五つの能力の最後に、

智慧を得る、つまり覚醒した後、七つの覚醒段階の修行がやってくるのである。

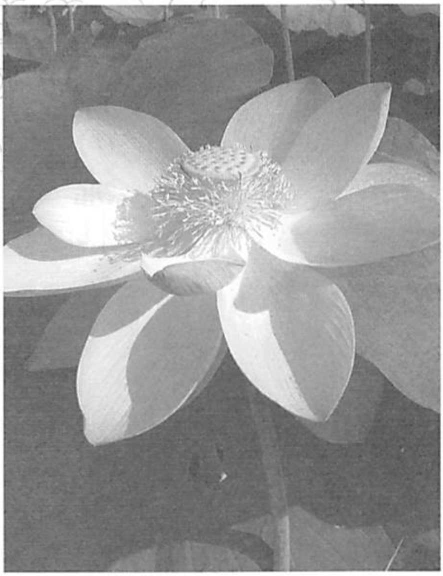
この場合、たとえばサマディ覚醒段階のサマディは、五根五力の場合のサマディよりも深いものとなる。意識の覚醒しかなく、一切の現象における干渉を受けないサマディとなるのである。これを達成すると、人間の世界に生存していながら、三グナの干渉に対して影響を受けない状態を作っていくことになる。

そして、このサマディを具体的に完成させるのが、七つの覚醒段階の中でも最後の無頓着覚醒段階ということになる。そして、この実践によって、わたしたちのエネルギーの漏れは完全になくなる。

この七つの覚醒段階を終えた後は、聖なる十段階の道へと入っていく。つまり、七つの覚醒段階をより一歩進めた修行を行なうわけだ。

この流れでとらえるならば、七つの覚醒段階というのは、非常に高度な修行体系であるといえよう。なぜなら、五つの潜在性と五つの能力の修行が終わった覚醒者のための修行ということになるからだ。

このように様々な意味を含んでいる真理の修行とは、本当に奥深いものである。





# ❖真理の系譜 ——一連の流れ❖

## 第六回 紀元前五世紀という黄金時代

## ユダヤ教は紀元前五世紀に成立した

前回登場したモーセは、ユダヤ教の中で大きな位置を占めている。神から与えられた「十戒」などの律法を守り、唯一神ヤハウェのみを崇拝するというユダヤ教の基本的な教えが、モーセの伝説と結びつけられている。

しかし、実際にこのユダヤ教が整った宗教として完成したのは、モーセから千年近く後、紀元前五世紀ごろのことである。

このユダヤ教成立の歴史、あるいは聖書の編纂の歴史について簡単にまとめると、下の表のようになる。

つまり、ユダヤ教の実質的な誕生はかなり後の時代ということになるわけである。

### ◆古代イスラエルの歴史

| | |
|---|---|
| 紀元前十四世紀ごろ | モーセの十戒と律法<br>その後、イスラエル人はカナンの地に定住 |
| 紀元前一〇二〇年ごろ | イスラエル王国建国<br>ダビデ王、ソロモン王 |
| 紀元前九二二年ごろ | 王国分裂<br>北：イスラエル王国、南：ユダ王国 |
| 紀元前七二二年ごろ | 北王国滅亡<br>ユダ（ユダヤ）王国だけ残ったので、ユダヤ人、ユダヤ教と称するようになる |
| 紀元前五八六年ごろ | 南王国滅亡 |
| 紀元前五世紀ごろ | ネヘミヤの宗教改革<br>このころ、旧約聖書・ユダヤ教が確立する |
| 紀元前三三三年 | アレクサンドロス大王支配 |
| 紀元前一世紀 | ローマによる支配 |

## 中国：諸子百家の時代

ユダヤ教が実質的に成立した紀元前五世紀前後の時代には、世界中で優れた哲学者・宗教家が現われていた。ギリシア、インド、中国で非常に優れた聖者・智者・思想家たちが活躍している。

東から順に見ていくとしよう。

中国大陸は春秋・戦国時代。「諸子百家」と呼ばれる数々の思想家が登場した。

孔子（紀元前五五一年～紀元前四七九年）・孟子（紀元前三七二年～紀元前二八九年）に始まる儒家は仁愛を説き、それを継いだ荀子（紀元前二九八年ごろ～）は礼を強調した。

墨子（紀元前四八〇年ごろ～紀元前三九〇年ごろ）による墨家は、平等な愛である兼愛を説いている。

老子・荘子によるとされる道教は宇宙の根本原理「道」を説いた。韓非子（～紀元前二三三年）に始まる法家は法による君主政治を主張している。

この諸子百家の教えは、これまで見てきたアトランティス・エジプトからの流れによる宗教の影響を直接的には受けていない。しかし、教えの内容を見るならば、真理の一部を表現したものということができるだろう。あるいは、過去世において真理を実践していた人物が、中国に転生して、その教えを説いた場合もあるようだ。

もともとジャンブ州に存在する真理、つまり仏教体系をなすものは最高の教えである。そして、このクル州の教えである中国思想体系は、それに属する教えであると考えるべきである。(『もりもり智慧のわく書』3　はじめに　より)

彼(※荀子)が大乗的真理の実践を過去世において行ない、その結果として彼が儒教を継承し、そして自分自身の経験とマッチした新しい教えを展開していることに、読者諸氏は気づくはずである。(同書5　はじめに)

いかんせん、荀子がマハーヤーナよりより優れた教えであるテーラヴァーダの全体系を理解していなかったこともまた見逃すべきでない一つの項目であると思われる。(同書6　はじめに)

したがって、この諸子百家の思想については、「真理の法則から見て足りない部分は足りないとはっきりと断言し、逆に真理の法則どおりである部分は称賛する」といった態度で接する必要があるだろう。

この中国の諸子百家の具体的な教えについては、この連載でも将来的に扱いたいと考えている。



孔子

## インドに現われた最高の教え：仏教

では、もう少し西に目を移してみよう。

偉大なるサキャ神賢真理勝者がこの地球に登場なさったのは、紀元前六世紀説（紀元前五六六年～紀元前四八六年）、紀元前五世紀説（紀元前四六三年～紀元前三八三年）など諸説がある。いずれにしても、中国諸子百家の時代、ユダヤ教の成立した時代、あるいはギリシアの哲学者たちが輩出した時代に重なるのである。

また、同時代にはジャイナ教の始祖ヴァルダマーナも登場している。

サキャ神賢真理勝者が登場するまえには、バラモン教、ヴェーダの教えが存在していた。少しこのルーツをさかのぼってみよう。

はるか昔、現在の南ロシアの草原地帯に、半遊牧民の集団が存在していた。彼らは祭司・戦士・牧畜民で構成されていたのである。

この集団は、強力な宗教的な伝統を作り上げた。ここには二つの系統の神々が存在することとなった。それがアフラ（アスラ）とデーヴァの二系統の神々である。

この集団は、やがてカスピ海や黒海の方へ移動してくる。そして、紀元前三〇〇〇年ごろには、イラン系とインド系の二つのグループに分かれたのである。

イラン系では、アフラを上位に置き、デーヴァを悪神とした。この系譜を受け継ぐのが、ゾロアスター教である。アフラ・マズダは光輝の神として愛欲の神々デーヴァの上に

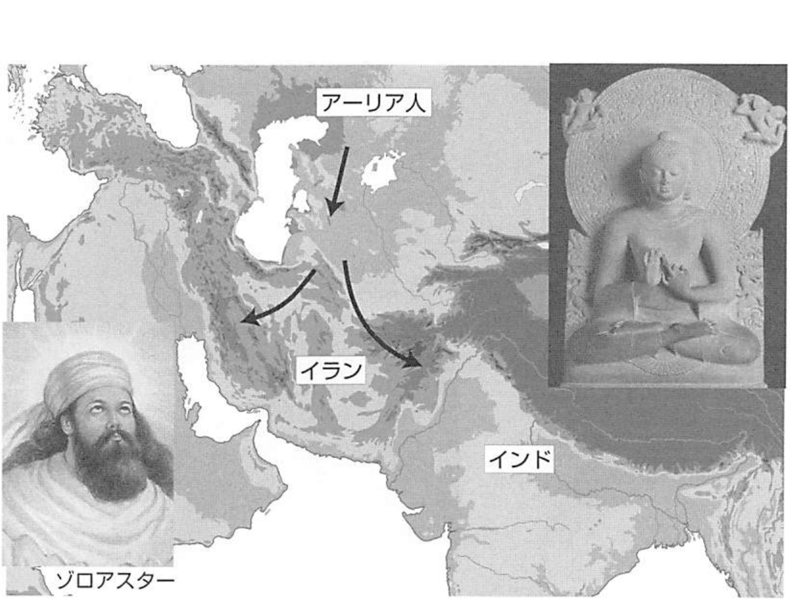
君臨した。

一方、インド系では、デーヴァの下位にある意識堕落天、闘争の神々をアスラ（阿修羅）と呼んだのである。そして、ヴェーダ聖典やバラモン教、原始ヨーガの教えが成立した。

サキャ神賢真理勝者はインドに登場し、原始ヨーガなどの教えをすべて包含し、その上に君臨する真理の教えを展開なさったのである。

現在地上に残されている数々の過去の宗教の中で、サキャ神賢真理勝者のお説きになった法則は、すべての宗教の世界観を含む最高の教えであるといえる。

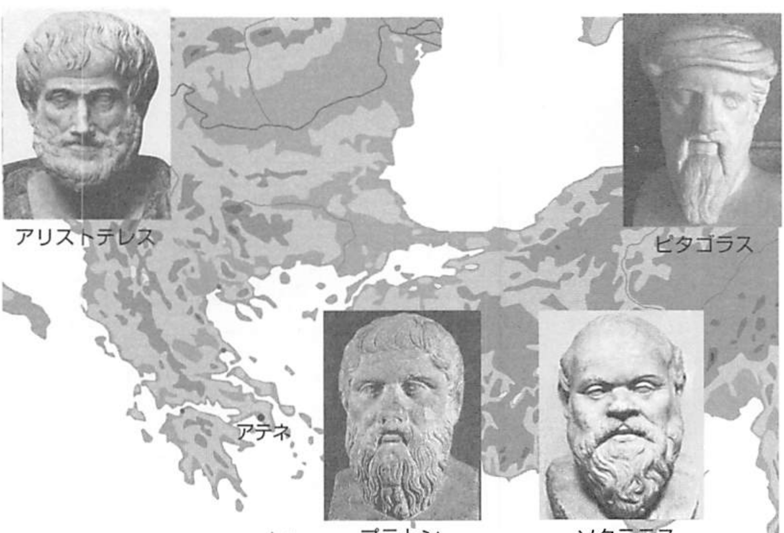
この後、仏教の登場に影響されて、バラモン教はヒンドゥー教として整備されていくことになる。



## 古代ギリシアの哲学者たち

さらに西方でも紀元前五世紀前後には大きな動きがあった。古代ギリシアでは、輪廻転生を説き、数学・天文学・音楽において大きな功績を残したピタゴラス（紀元前五七〇年ごろ〜）が登場する。ピタゴラスの弟子たちは「ピタゴラス教団」とも呼ばれる宗教団体的な要素も持っており、後世のヨーロッパ神秘思想に大きな影響を与えた。

善行を実践することこそ真の叡知であると説いたのがソクラテス（紀元前四七〇年〜紀元前三九九年）。その弟子のプラトン（紀元前四二七年〜紀元前三四七年）は、この現象界とは別に、真の実在の世界が存在すると説い



た。それはアストラルやコーザルを彷彿とさせるものである。この連載の最初に取り上げたアトランティスの伝説もプラトンが書き記したものだ。

プラトンは、アトランティスの伝説を、エジプトの神官からの話として書き記した。このように、古代ギリシア文化とエジプトは深い関係がある。エジプトの神々は、ギリシアの神々と対応づけて考えられることもあった。たとえば、エジプトの智慧の神トートはギリシアのヘルメス神と同一視されるようになったわけである。

また、ギリシアの哲学者たちはゾロアスター教の影響も受けていた。「ピタゴラスがゾロアスターのところに教えを乞いに行った」という伝説もあるくらいである。

## 紀元前三世紀：アレクサンドロス大王

プラトンの弟子のアリストテレス（紀元前三八四年～紀元前三二二年）は、有名なアレクサンドロス大王の個人教授をしたことがあった。

その教えを受けた大王は、ギリシアから東に向かい、ペルシア帝国を征服していく。

アレクサンドロス大王の大遠征の目的は、実は宗教的なものだったという。エジプトを征服したときには、アレクサンドリアに世界の叡知を保存する大図書館を建造した。また、イランを本拠地とするペルシア帝国を滅ぼして大王が向かったのは、東方の聖地インドだったのである。

大王は、インダス川を越えてインドに行くことはできなかった。しかし、インドのヨーガ行者などに会ったことが伝えられている。

アレクサンドロス大王は、エジプト、そしてイラン・インドに伝わる真理を求めて中東を征服した。そして、このとき、西方と東方の神秘思想や哲学・宗教が大きな交流を産み出すことになる。大帝国の領域に組み込まれたギリシア、エジプト、ユダヤ、メソポタミア、イラン、インドに伝わる教えは融合し、ヘレニズム文化と呼ばれるようになった。仏教で仏像が作られるようになったのは、このときのギリシア文化の影響だ。ユダヤ教でも東方の神秘思想が取り入れられていく契機となった。

トート・ヘルメスは「トート・ヘルメス・トリスメギストス（三重に偉大なヘルメス）」



アレクサンドロス大王



と呼ばれるようになり、ヘルメス主義という神秘学の流れを産み出していく。

紀元前五世紀前後は、世界で宗教・哲学の大きな興隆があったターニングポイントだった。そして、アレクサンドロス大王の登場を受けて、紀元前三世紀には東方・西方の宗教の融合が行われたのである。

それをヨーロッパで受け継いだのが、古代ローマであった。

## ローマ帝国、そしてイエスの登場

紀元前一世紀、ローマ共和国はヨーロッパ南部を中心に領土を拡大していく。そして、ギリシア、ユダヤ、エジプトをもその領域に加えていった。

紀元前二七年、アウグストゥス（オクタヴィアヌス）が初代皇帝に即位し、ローマ帝国が成立した。この時代には東西の交通も整備され、中国・漢王朝との間での交易や文化交流も活発に行われている。アントニウス帝は中国に使者を派遣し、中国側でも「大秦王安敦」として名前が残されている。

このように東西交流が行われる中で、ローマ帝国には仏教僧たちも到来して布教していたらしい。アレクサンドリアには「テラペウタイ」というユダヤ教の一派があったが、中には、これは「テーラヴァーダ」の教えを受け継ぐものなのだ、という説を唱える人もいるほどである。

このような状況で登場したのが、ナザレのイエス、イエス・キリストだった。（続く）

休まずたゆまず

# 真理の修行

## 第2回　立位礼拝



修行の結果というのは、短期間では、なかなか、はっきりとした形で見ることができない。しかし、なした修行は必ずその人に利益として還元される。日々のコツコツとした積み重ねは、確実にその人の内側を作り替え、五年後、十年後に、偉大な力となって現われるのだ。

「わたしは帰依が弱いんです……」

「帰依というのはどうやって培っていいかわからない……」

という方がいるかもしれない。

しかし、帰依というものは、実践することによって初めて表わされ、培われていくものである。

今回取り上げる立位礼拝は、帰依を固めるための代表的な修行の一つであり、修行の土台とも言えるものだ。修行者はまず、この礼拝によって帰依の方向性をしっかりと定め、その上に、次のステップである供養・ザンゲといった修行を積み上げていく。

## ◆礼拝の意味合い

「宗教の基本は、礼拝から始まる」と言われる。それは、修行を始めるとき、教えを受けるとき、心の中に懇願や帰依が必要だからである。礼拝のない修行というものはあり得ない。礼拝することによって、グル・シヴァ大神・すべての真理勝者方に心が向かい、解脱への道・高い世界への道が開かれていくのだ。

---

オウム真理教の立位礼拝で、「グルとシヴァ大神に帰依いたします」と唱え

ることも、修行の基礎ともいうべき帰依を培うとともに、解脱に導いてもらえるよう祈っているのである。グルであるわたしも、シヴァ大神も解脱を司っているので、帰依すること自体が解脱へとつながっているのである。

（『古代エジプトの秘儀を説く』）

グルを礼拝するのも同じ意味があるんだね。つまり、自分自身が功徳がなく、光がなくても、礼拝することによって心がそちらに向かう。向かうことによって内側の心のけがれとか、あるいは煩悩のけがれとか証智できるんだね。

証智しない限り捨断はあり得ないから、証智して捨断する。捨断することによって、結局煩悩は落ちるよね。煩悩が落ちることによって、結局悪趣のデータが落ちていくよね。悪趣のデータが落ちていくことによって、善趣である天界に生まれ変わるというわけなんだね。

（『約束の大地』）

## ◆立位礼拝の効果

立位礼拝は、別名、「帰依のムドラー」と言われる。しかし、その効果は、ムドラーと

しての意味合いや効果のみにとどまらない。
身・口・意を使って礼拝することにより力ルマは浄化され、また、この三つの行ないに対応した、表層意識・潜在意識・超潜在意識に、強い帰依のデータを植え付けることができる。

---

では、表層の帰依、潜在の帰依、超潜在意識の帰依という、この三つの帰依は、いかなる形で実現するのだろうか。

まず、立位礼拝の第一期の状態において、「オウム、グルとシヴァ神に帰依し奉ります。わたくし、○○を速やかに解脱へとお導きください」という詞章、これを普通に唱えられ、立位礼拝ができる人。この人は、表層における帰依ができていると考えてよろしい。

そして、次の段階で、いろいろな苦しみ、悲しみが出る、あるいは、立位礼拝に対して嫌気がさしたり、あるいはワークに対して嫌気がさしたりしたとしよう。そのときに、心はそういうことに支配されているんだけども、それでも、「オウム、グルとシヴァ神に帰依し奉ります。わたくし、○○を速やかに解脱へとお導きください」と言って立位礼拝ができる、あるいは、ワークができる人。この人は、潜在意識の帰依ができていると言えます。……中略……

そして、もう一歩進むとだ、いいか。空間、あるいは時間というものが停止した状態で、一切の思考が止まった状態で、「オウム、グルとシヴァ神に帰依し奉ります。わたくし、○○を速やかに解脱へとお導きください」という詞章が出るようになる。そのときは、体の重みすら感じない。これが、超潜在意識における帰依だ。

（八八年九月八日　富士山総本部）

---

立位礼拝を行なっているときに浮いてくる雑念や体の痛み、ろれつが回らなくなる等の現象は、まさにわたしたちのカルマを表わしている。そこで自己のカルマを証智し、とらわれずに立位礼拝に集中していくと、やがて雑念は落ち、意識がはっきりした状態で続けられるようになる。そして、六道のカルマから脱却した時、修行者には解脱が訪れる。立位礼拝は、思考を働かさずに、エネルギーを昇華させることによって煩悩を落としていく、クンダリニー・ヨーガ成就のための修行法でもあるのだ。

また、この激しい修行には当然、グルからのエネルギー移入というものが加わっているということは言うまでもない。

——**（質問者）**真の帰依の心と、その心の養い

方について教えていただきたいのですけれど。

**（回答）** 例えばね、今の帰依の修行――立位礼拝の修行――を徹底的に行なっていると、詞章を唱えていてすごく体が軽い状態が訪れるんだよ。それは、経験したことがあるかもしれない。そのときは、真の帰依をしていると考えてよろしい。どういうことかというと、帰依というものは言葉で表現できるものではないんだね。……中略……

**（質問者）** 帰依をしているときは、自分は何も考えていないという状態なのでしょうか。

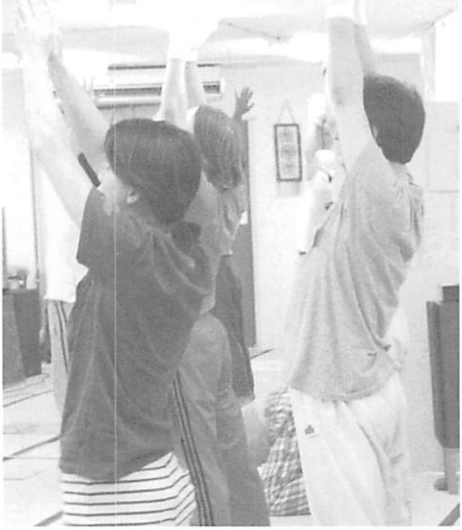
**（回答）** いや、帰依しようと思って考えていいと思うよ、それは。帰依をしたい、帰依をしようと考えていれば考えているほど強くなる、その帰依の心というのはね。そう思いつつ体が軽く、そして思っていることとは裏腹に心も軽い状態が訪れてくるんだよ。そのときに、本当の意味での真の帰依ができあがってきていると考えていいと思うね。それが二十四時間続いたならば、言い方を換えるならばもうグルと一体であると、あるいはシヴァ神と一体であると考えていいと思います。

**（質問者）** はい。じゃあ、あえて自分でどうのこうの考える必要はないわけですか。その状態になったときが帰依ができてる

と。

**(回答)** そのとおりだ。これはHさんのお話だけれど、今、立位礼拝をやっていて、この二日間か三日間、建築班の手伝いにかり出された四人の動きがものすごくいいとHさんが絶賛していたんだよ。これは、何かというと、君達のその帰依の修行が実を結んでいる証拠なんだね。つまり、心から、超潜在意識の部分でグルに対して帰依しようとしだしているから、やはり動きが早くなるわけだ。つまり、今これをなさなければならないとなるとそこに集中して、パッと動いてパッと結果を出す。現代人というものは頭を使ってどうこうしようとするけれども、本当の意味での帰依というのはそれではできないんだね。わかるか。それはもう、実践して修行するしかないんだよ。

(『マハーヤーナ』No.20-4話)



# 修行者インタビュー

## 1

## 投地するたびにグルに懇願
## ――立位礼拝五二〇〇時間を超えて

神宿貞子サマナ長（七十五歳）



立位礼拝は、今年の春に合計五〇〇〇時間を達成させていただいて、今は五二〇五時間を越えたところです。

出家して間もない頃のことです。サマナは六〇〇時間の立位礼拝を加行として行なうことになっているのですが、わたしは二十代の時に腰を痛め、十年前にはひざもけがしてしまっていました。それで、サマナの皆さんが立位礼拝をやっているとき、それを横目で見ながら、「わたしは持病があるからだめ」と決め込んでいてやらなかったんです。

立位礼拝をやり始めたのは、九五年に、師の方から声をかけていただいたことがきっかけでした。「どうしたの?」と声をかけられ、わたしは、「実はこういうわけでひざが悪いんです」と一部始終話しましたら、「あ、それは逆に、ひざをガンガンぶつけるような気持ちで立位礼拝すればいい

よ」ってハッパをかけられまして、やり始めたんです。ワークを早く終わらせて、皆さんの後ろでやっていました。

六百時間を達成するまではちょっと大変でした。朝から晩まで、一日十一時間やったこともありましたが、あれはやっぱり、一人じゃできなかったですね。法友の皆さんと一緒に励まし合ってやったからこそ、できたんだと思います。

わたしは神秘体験はほとんどない方なのですが、六百時間達成したときには、グヒャサマージャの周りが白銀色に包まれているように見えました。それから、立位礼拝をやっているときに、光の線がきらきらきらきら見えてきたり、グヒャサマージャの周りを赤紫の色が包み込んでいるように見えたこともありました。

＊＊＊

今でも、ひざは、湿気がある日にはちょっと痛みが走る時もあります。ただ、立位礼拝をやっていて、体がつらいときというのは、グルを意識していない時なんですよ。それで、「あっ、いけない。グルにお願いしなくちゃ」って思い直して、「一生懸命頑張りますから、エネルギーをお与えください」って思念すると、フッと楽になって続けることができます。グルがすぐそばにいらっしゃる感じで、元気に礼拝をやれますね。

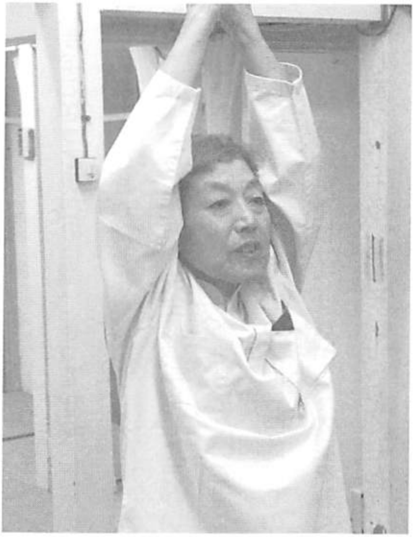
立位礼拝をやっているときは、グルがエネルギーを送ってくださるのが分かるんですよ。だからできちゃうんですね。端から見ているほど苦痛じゃなくできてしまうんです。「ああ、グルを絶えず思念していれば、これだけちゃんとやらせていただけるん

だ」と思います。

また、わたしは、今、七十五歳になるんですけれども、立位礼拝を続けてきたおかげで、今でも出家した頃（約十年前）と同じくらいの体力があるみたいです。持病の腰痛は、立位礼拝を始めた頃は痛くて大変でしたが、今では少しくらいの痛みなら、立位礼拝をやると回復してしまいます。顕著に現れたのは階段の上り下りです。いつもは「よいしょ、よいしょ」っていう感じなのに、立位礼拝をやった後は、スムーズに上がれます。

それから、先日、師の方から、「神宿さん、腰が伸びているよ」と言われて気がついたんですが、立位礼拝によって、曲がっていた腰が少し伸びて、以前は取れなかった高い棚の上にあるものも取れるようになっていました。

また、わたしは持病があったので、最初の頃は、とにかく法友の皆さんについていけばいいっていう調子でやっていたんです。二三〇〇時間位までは、そんな感じで、なんとなくやっていたんですが、その後は、「三宝に帰依しよう」という気持ちが出てきて、信と帰依ができてきましたね。



＊＊＊

今年になって現在の住居に移ってから、気候の変化によってひざが痛むようになり、病院に行ったんです。そうしたら、先生に「手術した方がいい」と勧められ、痛み止めの薬をいただいて帰って来ました。でも、痛み止めの薬は一時的なもので、それで完治するわけではないし、内臓を悪くしてしまうし、そういう方を現世でたくさん見てきましたので、結局、薬も飲まず、手術もしないで、ひたすら立位礼拝を頑張っています。病院に行った後でも、すでに五〇〇時間はやっています。

今でも天候不順の時にはひざが痛むことはありますが、〝ザンゲと供養の儀式〟の時には、「この痛みによって、地獄の住人の苦しみが少しでも和らぎますように」「修行することによって、すべての魂がマハーニルヴァーナに入るまで、グルの救済のお手伝いをさせていただけますよう頑張りますので、どうぞよろしくお願いいたします」という二つを、毎回グルに懇願しています。

＊＊＊

今はワークが忙しく、定期修行にしばらく入っていないのですが、昨年秋までは、毎月定期修行に入れていただいて、そこで一日九時間の立位礼拝を行なってきました。一回定期修行に入ると、合計五十時間以上達成できます。少しでも多く礼拝できるように心がけておりますので、道場に早く着いた時などには、五十九時間達成できた月もありました。

今後の目標としては、立位礼拝は身・口・意のすべてを浄化し、帰依を培うための最高の修行ですので、体が続く限り一生続けたいと思っています。

投地しながら「すべての魂が、グルとシヴァ大神、すべての真理勝者方によって、苦悩から解放されますように」と心の中で唱えていますが、この発願は、今後も死ぬまで唱え続けていきたいと思います。そして、来年中には、立位礼拝六千時間を達成し、死ぬまでにぜひ、一万時間の大台に乗れるように頑張りたいとグルに懇願しています。

＊　＊　＊

今までは困難なことにぶつかると投げ出してしまう悪いくせがあったのですが、立位礼拝を続けることによって、今では何とか最後までやり抜く忍耐力ができてきました。それからグルに帰依することによって、縁ある人が一人でも多く真理の道に入っていただけるよう、救済のお手伝いをさせていただきたいと強く思うようになりました。

また、立位礼拝をやっている時、体調が悪くなることがあっても、途中で止めないで自分で決めた時間まで続けることができるようになりました。これはひとえにグルが見守ってくださっているおかげと感謝しております。それからくじけそうになった時、タイミングよく、正悟師や師の方々、インストラクターの方々から的を射たアドバイスをいただくことで、何とか今日までやってこれたことを、深く深く感謝しております。このご恩返しは、立位礼拝を一日でも長く、一時間でも多くやれるように、グルに懇願することだと思っています。

修行は素晴らしい。頑張ればちゃんと結果を出してくれるんですからね。今生真理と巡り合ったことに感謝しております。ご一緒に頑張りましょう。

## 2

# 毎日十分間の立位礼拝を続けて
## ——意志の力が強くなり、願望成就も

成田師補



立位礼拝を毎日やろうと思ったのは、約二年ほど前のことです。今年の春からワークが忙しくなってきたので、一日十分間しかできなくなってしまいましたが、意識としては、毎日とにかく立位礼拝をやろうと思い、続けてきました。夜礼前の三時間の修行中にやっています。

立位礼拝を続けていて、三宝への感謝の気持ちが強くなりました。

それから、短時間でも毎日続けることによって、意志が強くなったと思います。

たとえばワークの面では、業者との交渉ごとにつく時、「負けてよ」と言われることもあるんですが、こちらはあまり妥協しないで対応できます。変にこびるようなことを言わなくても、向こうが「わかりました」って感じで素直に引いてくれるんです。向こうに自然にそうさせる雰囲気が出ているのかなって思いますね。だから、変にこじれずに、こっちの意志を通しやすくなったというのがあります。また、仕事上、あまり芳しくないようなことが起こっても、そんなに慌てたり心を乱

したりすることもなくなりましたね。

それから、毎日礼拝を続けていく中で、怠惰になったときなども、意志の力で乗り越えてきました。始めたころは、「疲れたから道場に行きたくないな」というときもありましたけれども、それが徐々になくなり、そういう状態のときにも、意志の力でやり抜こうという感じに変わってきました。今では、体は疲れていても、とりあえず道場に足が向かって立位礼拝をやっているという感じです。

また、毎日、決めた修行をその通りにやっているせいか、「こうなったらいいな」とか「あれがほしいな」ということも、思った通りになってしまうということがけっこうあります。「こういう仕事やりたいな」と思ったら、そういう話がどんどん来るという現象は、今も起き続けています。

＊＊＊

立位礼拝の修行というのは、帰依を培うための具体的実践だと思います。「帰依」とか「帰依を培う」とかって、頭で考えてもよくわからないですよね。「これが帰依だ」と思っても、結局はエゴだったっていうこともあるし。そういう意味で、立位礼拝というのは、わかりやすい、帰依の実践の形という気がするんです。もちろん、心がこもっていなければ、あまり意味がないと思うんだけれども、これをやり続けれさえすれば帰依が培えるんだっていう確信みたいなものがあります。

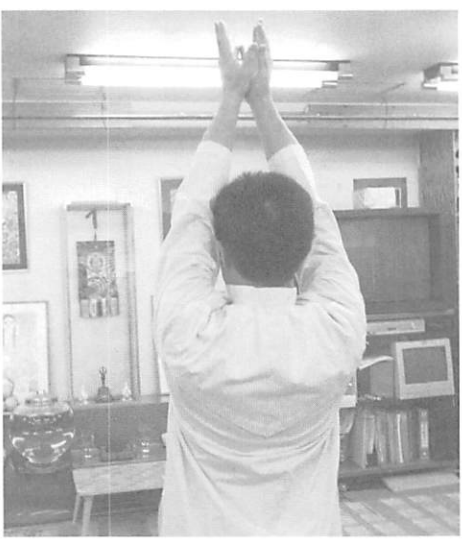
グルというのは、わたしのイメージで言うならば、無色透明という感じなんです。だから、自分自身を透明にすることが、グルを感じること、グ

ルを意識することになるんだろうなと思ってやっています。無心になればなるほど、グルを感じやすくなるし、純粋な意味でグルに近づけるんじゃないかっていうのはありますね。

＊＊＊

毎日コツコツやっていても、すぐには結果は見えないんですけれども、意志の強さなどは来世に持って行けるものですから、いつ死んでもいいように、厳しい状況や悪い状態のとき等関係なく、毎日コンスタントに修行し続けていきたいと思っています。そうすれば、少しでもいい状態で、転生できると思いますし。

それから、日々の修行をやらなかったら、ワークにおいて、如実に結果が出ないんですね。だらだらやっても何も結果が出ない。自分が動かなかったら、他の人にもワークを回せなくなってしまうので、そういう意味でも、やっぱりこれからも続けていこう、と思っています。



## 3

# グルのエネルギーのすごさを実感
## ――もたらされた崇高な意識状態

ララナー・ネッカンマ・ムッタ師補



以前、立位礼拝は最も苦手な修行でした。それは邪淫のカルマによって、立位礼拝をやるとひざが痛くなったり、歩けなくなるのがしゅっちゅうだったからです。挫折することもしばしばでした。そんなときは、自分のカルマの悪さに卑屈になったものです。ですから出家して六年目になっても、立位礼拝は二百時間ほどしかできていませんでした。

そしてある日、ワークで大きな失敗をしてしまい、修行に入れていただくことになりました。重い体を引きずるようにしながら、立位礼拝を一日八時間ほどから始めたのですが、足が棒のようになりました。これで限界と思っていると、修行監督の師の方から「二十四時間の立位礼拝を五日間やるので、ぜひ参加しましょう」と誘われたのです。「そんなの無理だ。二十四時間もやったら絶対立てなくなる」と思い断わりました。しかし、慚愧の念が強く、カルマを落としたかったので、できるところまで頑張ってみようと思い、参加することにしました。

立位礼拝を始めると、案の定、ひざに激痛が走ります。さらに半日くらいすると足が棒のようになりました。ひざがほとんど曲がらないのです。柱につかまれば、腕の力で何とか立ち上がることはできるという状態です。

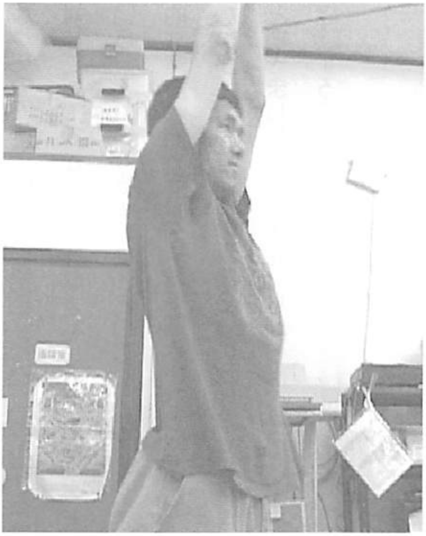
このときに挫折したのはわたしだけだったのですが、意外なことに、卑屈さも挫折感もなく心は肯定的でした。「自分はここまで頑張ることができたんだ」と、カルマが落ちていることへの喜びと、極限まで修行できていることへの快感があったからです。

それからは、十七時間の立位礼拝と六時間のヴァヤヴィヤという修行にしていただいて、一応寝ないで修行を続けました。こうして五日間、不眠の修行を終えると、心はさらに肯定的になっていました。

引き続き、二十時間の立位礼拝と三時間の究竟という修行が始まり、参加することにしました。かなりきつかったのですが、こなしていくうちに、さらにカルマが落ちていき、充実感が出てきました。

一つの修行を集中的に行なうことにより、大きな成果が得られることは、多くの修行者が経験していることです。わたしにも体験がもたらされました。三十日をすぎ、修行に入ってから立位礼拝をした時間を数えると、六百時間を超えています。このころになると、究竟の時間も眠くならないのです。スカーッとさえた、崇高な意識状態がもたらされました。わたしは思いました。「こんな素晴らしい状態は、自力では到底達成できない。

これはグルからの祝福に違いない。立位礼拝をすることで、グルは、本当にエンパワーメントをしてくださるんだ」――しかも、「再起不能」と思うほどのどん底の状態からスタートした修行ですから、そこまで引き上げていただいたことへの感謝と感動でいっぱいでした。



この意識の変化とともに修行を出ることになりました。失敗もまたプラスに転じることができるんだという教訓を得て、ワークに戻ることになったのです。

＊　＊　＊

その後も立位礼拝は続けました。千時間を超えたころには、「喜」の体験をしたことがあります。それは、立位礼拝を毎日三時間以上と決めて続けて、三ヶ月目のころのことです。「喜」というと、説法の中では、「実体のない喜び」とか、「心の明るさ」という説明がされていますが、まさにそのような状態になりました。ある日、ワーク中に、突然、アナハタから気持ちいいエネルギーがサーッと上がりました。そして頭頂が、強く心地くしびれて、うれしくてうれしくてしょうがない状態に

なったのです。心地よい興奮を伴い、「どんな人に対しても、できることは何でもしてあげたい」という、それまで経験したことのない、明るく肯定的な意識状態です。「自分は別人になったんじゃないか」と思うほどの素晴らしい状態が、半日ほど続きました。その後も、しばしば、その状態を経験することになります。

＊　＊　＊

現在、立位礼拝の時間はトータルで三千五百時間ほどになります。特に、月に五日間の定期修行では、毎日九時間の立位礼拝があります。やっていくうちに意識がどんどん変わっていきます。最初は、煩悩的なヴィジョンに翻弄されることが多いのですが、続けていくと、意識を覚醒させるようなすがすがしいエネルギーがどんどん入ってきます。三日目ぐらいになると、頭頂に、意識もエネルギーも集中します。そして、まったく別人のような意識状態に変わってしまうのです。これは、グルからのエンパワーメントがあればこそです。

五日間の修行が終わると、頭がスカーッとして、頭頂に全部意識が集中して、自分の状態に感動してしまいます。素晴らしい状態に引き上げていただいて、「グルは本当にすごい。こんなに歓喜に満ちたエネルギーを注いで、引き上げてくださるんだ」と、感謝の念でいっぱいになります。最もグルの偉大さが実感できて、修行って素晴らしいなあ、修行できてよかったなあと、そして修行の素晴らしさを多くの人に伝えたいなあと、心から思えるときです。

このように、ただ続けることによって、初めは苦痛でしかなかった立位礼拝が、今では、最も好きな修行、なくてはならない修行になりました。普段は、毎日一時間の礼拝をしています。最初は気が重い状態から始めても、一時間の立位礼拝を終えるころには、意識が肯定的に変わっています。この修行によって受けられる恩恵は、計り知れないほど大きいものです。

「帰依は始めであり、終わりであり、すべてである」と言われます。これからも立位礼拝を続け、今生の課題として、真の帰依を培っていきたいと思います。

皆さんは、今生、修行が進んでいる先達を見て、「あの人は、なぜあんなに強い帰依が持てるんだろう」と不思議に思ったことがあるかもしれない。しかし、今、帰依が強いと言われている人も、過去世において立位礼拝等の帰依の修行をたくさんの時間・回数こなし、地道に続けてきた結果として今があるのである。

やった修行は自分を裏切ることはない。来世にまで持っていける宝である修行を、今日からまたコツコツと積み重ねていこう。

# コツコツやるなんて似合わないと思っていたけど

横浜道場　Yさん



## わたしの修行実践記

このコーナーでは、アーレフの信徒さんの体験談をご紹介します。




話題の新
今、売れてます！
えーと…
あっ、あった！
マジで？！
マントラを唱え始めたら
ずっと探していた本が
いきなり見つかるなんて
すげーっ！
こんなオレにも…
本当に
体験談みたいな
ことってあるんだな




マントラを唱えてからすっかり変わってしまったYさん。あなたも変われるかな？

教学

# 8月から10月の三カ月間は、教学の強化月間

## 二〇〇四年八月一日
## ステップアップ教学システム
## 「サハスラーラへの道」スタート！

### ■今の時期こそ教学！

八月一日から、期間限定の教学システムがスタートしました。

教学は修行の土台。特に、今、深い意識に根付いたけがれを引き出され、カルマの解放が起こっている方、煩悩に流された生活を何とか抜け出したいと思っている方、修行の目的ややる気を見失いかけている方、グルに意識を向けて修行者としてのしっかりした土台を培おうと思っている方には大きなチャンスです。

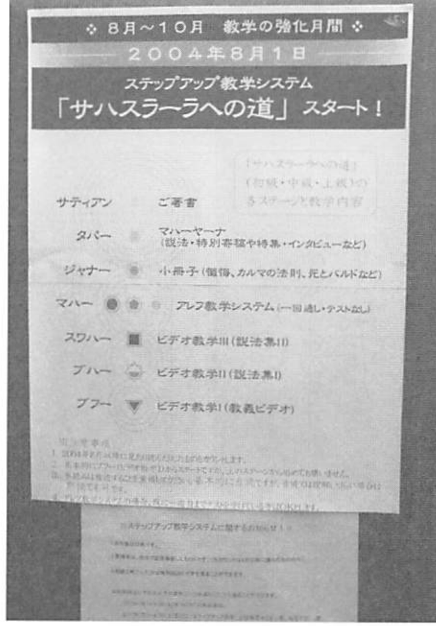
煩悩と闘うためには、深い意識にたくさんのグルや真理のデータを入れておくことが必要です。上向のデータと下向のデータ、日々どちらのデータを多くとり入れるかの勝負。否定的なデータを入れたら否定的になるし、肯定的な真理のデータを入れたらどんどん肯定的になります。

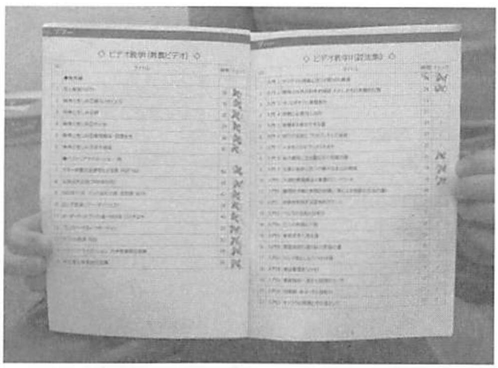
そして、根付かせた真理のデータは、皆さんが苦しいとき、煩悩に負けそうになったときに、大きな力となって、皆さんを支えてくれることは間違いありません。

今の時期こそ、教学！　集中的な記憶修習によってデータを入れ替え、カルマの流れを好転させましょう。




各道場に用意されている
教学システムのチェックシートとカード



埋まってきたチェック
シート
（東京道場の信徒さん）

## ■「サハスラーラへの道」（初級・中級・上級）の各ステージと教学内容

まずは、初級の「ブフー」ステージからスタートです。

各道場には、ステップアップ教学システムのチェックシートやカードが用意されていますので、ご利用ください。

各級には、それぞれ、ブフーからサティアンまでのステージがあり、指定されているビデオや書籍を修習すると、次のステップに進めます。各級の修了者には、特別な伝授物が渡されることになっています。

## ■教学の効果を実感しています！
### ――信徒さん体験談

◎東京道場Iさん

「教学をやると、仕事をやった次の日が全然違いますね。わたしは否定的になりがちなところがあるんですが、教学をやると否定的な気持ちが出てこなくなり、肯定的になります。十二日間で初級を終わらせるのを目標に進めています。

　主人もこの教学システムを進めているのですが、仕事をこなすスピードが速くなってきたそうです。いつもは午前中に終わ

①ブフー……ビデオ教学Ⅰ（教義ビデオ）
②ブハー……ビデオ教学Ⅱ（説法集Ⅰ）
③スワハー……ビデオ教学Ⅲ（説法集Ⅱ）
④マハー……アーレフ教学システム記憶修習（テストなし）
⑤ジャナー……小冊子記憶修習
⑥タパー……『マハーヤーナ』記憶修習
⑦サティアン…書籍の記憶修習

※注意事項
1. 二〇〇四年八月以降に見たり読んだりしたものをカウントします。
2. 基本的にブフー（ビデオ教学Ⅰ）からスタートですが、上のステージから始めても構いません。
3. 本読みは精読することを重視してください。基本的に音読ですが、音読では理解しづらい場合は黙読でも可です。
4. アーレフ教学システムの場合、既にテストを受けている方はOKとします。
5. その他、詳細は各道場までお問い合わせください。



らない仕事が午前中に終わってしまったりもし、『最高記録！』と言っていました。それから、グルのデータが根付いたせいか、目を開けていても、グルのヴィジョンが見えることもあるそうです」

◎大阪道場Nさん

「わたしは目立つのが大好きなので、教学システムを一番に終わらせて、次の説法会で修法物をいただこうとひそかに決意していました。ところが始めてみると、心が寂静になって、現象をありのままに見ることができるようになってきたのです。やはり、集中的に教学することにより、グルとのカルマ交換とかデータ交換が起きているからなのだと思います。今、タパーです。ビデオなどは、ぼーっと見ているだけなのに修行が進むので、教学すごい、これはやらな損や思ってます」

◎東京道場Tさん

「ちょうど、教学をやりたい！と思っていたところでした。初級のタパーまで、今週中に終わらせます」

◎東京道場Yさん

「今、初級のブフーが終わったと

ころです。今まで、修習していなかった書籍等もしっかり読むことができて、いい機会だと思っています」



## ■この流れに乗って、修行を進めてほしい

最後に、東京道場長のメッターダッシン師に、この教学システムの効果について、お話を伺ってみました。



◎メッターダッシン師

「東京道場では、この教学システムをきっかけに、修行する方が増えています。修行に対してやる気がわき起こって何年ぶりかに来道できるようになった方もいますし、初級を十日間で終わらせようと頑張っている信徒さんもいます。

この流れに乗って、皆さんに、ぜひ、修行を進めていただきたいと思います」

夏から秋にかけてのこの三カ月間、基本に立ち返って、グルと法則の記憶修習である教学を始めてみませんか――？

セミナー・レポート

# 夏期集中セミナー「大いなる慈愛」









長期コース：8/10～8/15

短期コース：8/13～8/15

八月、お盆休みを利用して、夏期集中セミナーが開催されました。今回のセミナーのテーマは「大いなる慈愛」。その名のとおり、グルが変わらずに降り注いでくださる慈愛を実感でき、また、参加者自身も四無量心の種子を培うことができた、充実したセミナーとなりました。



新しい説法集は、開会式の後、
正悟師から参加者一人一人に手渡された。



## ●新しい説法集の伝授

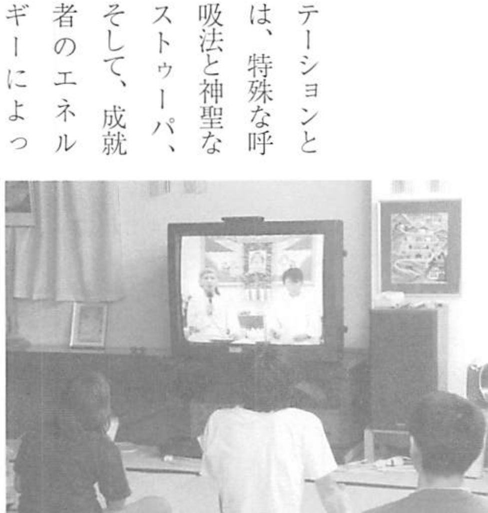
セミナーでは、新しい説法集『聖なる愛、それは時空を超えて』が伝授され、その記憶修習も行なわれました。

## ●ヴィジュアル講座

特別な教材を使っての、ヴィジュアル講座。信徒さんにも、大いなる慈愛が映像を通して焼き付いたようです。

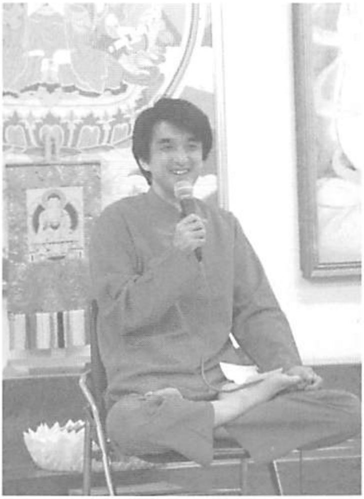
## ●特別メディテーション

今回のセミナーは、期間が短い分、速やかに体験が得られるよう、特別メディテーションが行なわれました。特別メディテーションとは、特殊な呼吸法と神聖なストゥーパ、そして、成就者のエネルギーによって、瞬間的に深い意識に導かれるというもので、成就者のアストラルと信徒の方のアストラルが混ざり合うことによって、成就者が内在している世界を擬似的に体験できるという、大変素晴らしいものです。このイニシエーションによって、多くの方が神秘体験や大きな心の変化を得ました。



## ●リレー講義

恒例の、成就者によるリレー講義。成就者の発するエネルギーは、修行を進める手助けとなり、参加者の意識を大きく引き上げました。特に今回は、慈愛に関する貴重な内容が、連日説かれました。



8月14日のリレー講義には、カンカー・レーヴァタ正悟師も特別参加。



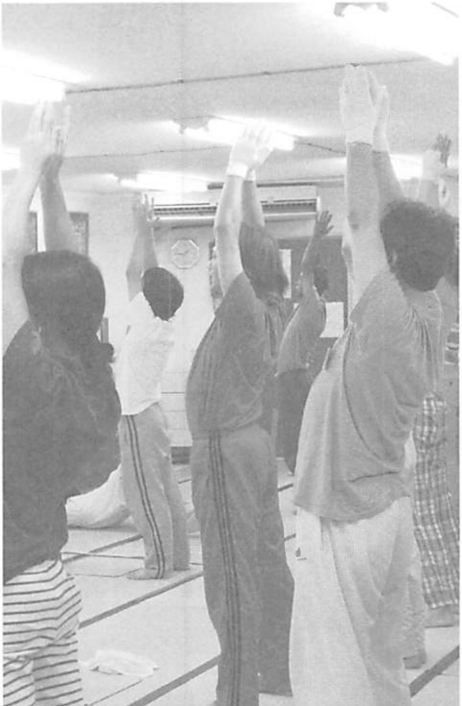
## ●イニシエーション

修行の大きな手助けとなる、五大エレメントを浄化・強化するイニシエーションも、毎日行なわれました。道場には、音のイニシエーションも設置され、参加者は、神聖なヴァイブレーションに包まれながら、修行を進めました。さらに、希望された方には、法輪のイニシエーションも行なわれました。

## ■セミナー体験談

### ◎《立位礼拝》柔らかいヴァイブレーションに涙

三日目の二時間半の立位礼拝、何も考えずグルに集中しようと思って、全力で礼拝していたときです。アナハタ・チァクラに何とも言えない柔らかいヴァイブレーションを感じて、涙が出てきました。その瞬間に、今までの意識がパッと変わってしまって、



心が広がっていき、他の魂を救済しなければならないという思いがわき起こりました。初めてわたしは、本当に素晴らしい体験をさせていただきました。（東京・男性）

**◎《特別メディテーション》与えられた過去世のヴィジョン**

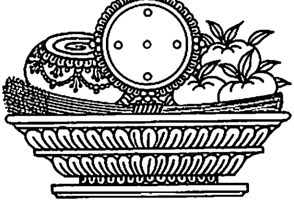
今回、わたしは、セミナーのはじめに、まとまったお布施をさせていただくことができました。このところわたしは、自己の深い煩悩に負け続け、闘うことすらできていなかったため、「どうか深いけがれを取り除いてください」「どうか煩悩と闘う勇気をお与えください」と懇願しながら、布施させていただきました。

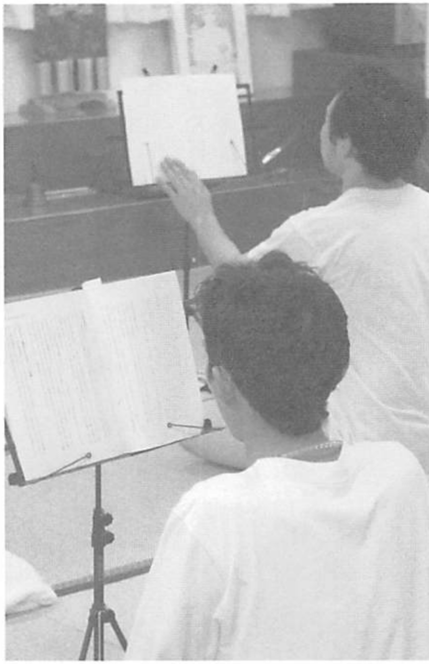
そのかいあって、特別メディテーションでは、素晴らしい体験を与えていただきました。

師の方の声に導かれるようにして、「グル、どうか、わたしが今生、真理の道から外れることなく修行できるように、今生生まれてきた意味、過去世を教えてください」と思念しました。するとすぐにヴィジョンが現われました。

グルと向かい合って顔をつきあわせ、「お前は、来世わたしと転生し、救済するんだ」と言われたこと、そして、そのヴィジョンの後に、チベットの民族衣装を着た女性が立っているのが見え、その後、多くの中国人が鉄砲を持って撃ってきたこと……。周りは、茶色い色の家なのか寺なのかわからない建物がありました。そのあたりから、涙がどっと出てきました。相手に対する哀れみの気持ちがあり、自分たちは殺されても、相手を憎むことはありませんでした。今生の、争い事を好まないという自分の性格というのは、この時形成されたものだと気付きました。

今回の体験は、「修行を頑張れ」という、グルからのプレゼントだと思います。（大阪・男性）





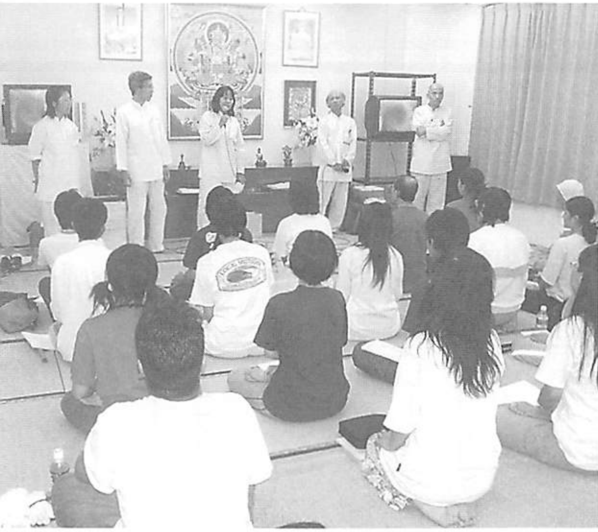


**◎《特別メディテーション》愛されているということを実感し心が変化**

呼吸法中、特に座ってから、「皆に愛されている」という感じがして、涙がでてきた。「わたしはなぜ嫌悪なんかしてきたのか」という思いになった。この心の体験は大切にしたい。初めは恐怖感があったが、始まってからはひたすら呼吸法に集中した。本番の死においても、グルにすがるしかないんだと思う。グルとパイプのない人たちは、どんな恐怖で死を迎えるのかと思った。自己保全をなくし、一人でも真理に導き入れなければと感じた。（長野・男性）

**◎《リレー講義》祝福を実感できた**

数多くのエピソードを聞いて、グルの慈悲深い愛を感じることができ、何度も涙を流し感激しました。最初はパッパッとしか光を見ることができなかったのですが、最終日のリレー講義中には、強い衝撃的な光を見ることができ、グル、シヴァ大神に祝福されていることを実感できました。（横浜・男性）



**◎《ヴィジュアル講座》送られてきた透明なエネルギー**

ヴィジュアル講座の時に、とっても透明なエネルギーが送られてきていたので、やっぱりグルの記憶修習って最高の修行だなと思いました。（東京・男性）

**◎《音のイニシエーション》降り注ぐ慈愛のシャワー**

音のイニシエーションが好きで、グルの慈愛のシャワーを浴びているようで、とても優しい気持ちになれました。（長野・女性）

**◎《法輪のイニシエーション》神聖な空間に、日常が吹っ飛ぶ**

一歩入ったら、吹き上げるようなヴァイブレーションと、神聖な空間でした。「あ、グルはここにいらっしゃったんだ」と、やっと見つけた気がしました。神々がいっぱいいらっしゃるような感じもしました。アーレフを長いことやらせていただいて、ずっと知っているのに、「なぜ忘れたんだろう」「どうして捨ててしまったの?」と思いました。何もかも、今までの生活が吹き飛んだ気がします。（東京・女性）

**◎《法輪のイニシエーション》心身が急速に浄化された**

吸い込む空気・波動がすべて神聖なもので、自分が満たされました。本当に急速に、怖いほど心身ともに浄化されているのがわかりました。本当に素晴らしかったです。座って二十秒もしないうちにエネルギーが上昇し、汗ばみました。（札幌・男性）

## ■夏期集中セミナーを終えて

### ◎多くの参加者が感じ取った慈愛のヴァイブレーション

ソーパーカ師

今回、信徒の方の変化を見ていると、やはり普段のセミナー以上に、グルの愛を感じたとか、慈愛のヴァイブレーションに包まれた等の体験が顕著でした。これは、今回のセミナーのテーマである「大いなる慈愛」をいかに認識できるかということが、達成できたのだと思います。

このセミナーに参加された方々が、これからその種子、つまり、グルの慈愛に絶えず包まれている、グルの守護を受けているのだという確信をより深めて、これからの修行、そして救済活動に奮闘していただきたいと思います。

### ◎セミナーで得たグルのデータを、日々の生活に生かしてほしい

ビルパ師



今回のセミナーで、グルのデータを記憶修習し実感できて、例えば特別メディテーションの中で、グルを実感した、グルと一体になったというような感想を、多くの人が得ました。今後は、それを普段の生活の中でどのように再現するか、それが非常に大きなポイントだと思いますね。今回のセミナーで単発で終わるのはもったいなくて、やはり日々の生活の中で、それを思い出す、あるいはそれを実践するまでいければ、皆さんにとってとてもプラスになると思うんです。

やはりそのためには、本当に基本的なことなんですけれど



も、欠かさず来道する、そして布施をする、あとは、データの入れ替えとしての、今行なわれている教学強化月間における教学等を頑張っていただければ、かなりデータというのは、継続して皆さんの中に内在するんじゃないかと思います。そのへんを一つ一つ、これからも頑張っていただければいいなと思います。

＊＊＊

わたしたちは過去世から、迷妄によって多くの悪業を積み、さまざまなけがれたカルマを有しています。そんなわたしたちを引き上げ、絶対的な幸福に導いてくださろうとしているグル。その背景にあるのは、すべての魂に注がれる、広大無辺な慈愛です。

今回のセミナーで触れたグルの慈愛を胸に、自らも四無量心を培い、未来際にわたって、到達真智運命魂として輪廻転生する機根を育てていきましょう。

## 指名手配者に関する情報提供の呼び掛け

これまで教団では、捜査当局より指名手配を受けている旧団体信者に対して、繰り返し出頭を呼び掛けてきましたが、以下の三名については、いまだにその消息がつかめません。

教団では、この三名に対して改めて出頭を呼び掛けるとともに、すべての教団関係者に情報提供を呼び掛けます。何か関連する情報をお持ちの方がいらっしゃいましたら、どんなささいなことでも、最寄りの各道場までご連絡ください。

**（名前）　（旧団体在籍時の呼称）**

**平田　信　ポーシャ**

**高橋克也　スマンガラ**

**菊地直子　エーネッヤカ・ダーヴァナ・パンニャッター**

二〇〇四年八月　宗教団体アーレフ

## アーレフ信者に対する慈善活動の呼び掛け

宗教団体アーレフは、旧教団の一連の事件の反省に立ち、事件被害の全額を賠償する契約を締結し、三年以上にわたり、誠意を持って同契約を履行してまいりました。

今後は、その契約を確実に履行し続けるとともに、信者個人の活動として、

（1）今回の米テロ事件による被害者に対する寄付等の支援

（2）アフガニスタンの難民など、対テロ戦争の被災者への寄付、物資等の支援

（3）その他、テロの温床ともいわれるイスラム社会などの貧困、難民問題を解消する支援

を行なうことを呼び掛けたいと思います。

## アーレフ伝言板
Notice Board

約三千人の人命を奪った米国同時多発テロ事件は、炭疽菌事件や、米軍が開始したアフガニスタンでの対テロ戦争による民間人の被害者や多数の難民の発生によって、被害者、被災者は拡大の一途をたどっています。

これらの事件は、教団と直接的な関係は全くありませんが、旧教団の一連の事件が与えた影響を考えると、その被害者の救済をすることも、アーレフの信者にとって重大な責務であると考えます。

さらに、こうしたテロ事件、対テロ戦争による被害者を支援するだけでなく、テロリズムを生み出している先進国と途上国の貧富格差、貧困・飢餓問題や、その遠因となる地球環境問題といった深刻な社会問題についても、それを解消するための積極的な慈善活動を行なうことによって、将来のテロの未然防止に貢献するべきだと考えます。

よって、宗教団体アーレフは、これらの支援活動を、二十世紀の旧教団活動の贖罪と、二十一世紀の理想の社会の実現のために、すべての信者に呼び掛けます。現在、教団・信者に課せられている賠償契約による経済的負担は重たいものがありますが、現在進行している被害を軽減し、未来の悲劇を防止することは、過去の清算と同じほどに重要であり、さらには、現教団が、旧教団とは違ってテロを否定し、その理想を実現しようとするスタンスの証の一つとしても、行なうべきだと思います。

最後に、もしわたしたちの声が届くのなら、事件当時まで旧教団に在籍していた元信者の方々についても、わたしたちと同様の責任に基づいて、上記の支援活動に対する賛同と協力を求めたいと思います。

詳しくは、
webmaster@aleph.to
TEL：03-3305-6732
（アーレフ代表）まで。

## サリン被害者の無料検診に対する支援呼び掛け

旧教団によるサリン事件等の被害者は、今もなお、様々な後遺症に苦しまれています。

二〇〇〇年三月、サリン事件被害者に対する集団検診は、「サリン事件等共助基金」によって、検診費用無料で行なわれました。しかし、二〇〇一年は、公的支援が得られない中で、同基金の資金難のため、一時実施が見送られていました。

その後、医師などの関係者の努力によって、将来にわたって検診を継続して行なうために、新しい民間団体「リカバリー・サポート・センター」が、同年八月に設立されました。その結果、十月から十一月にかけて、東京・埼玉の三会場で無料検診が実施され、多くの方が無料検診を受けることができました。この結果によると、検査を受けた人の八割以上に、何らかの目の異常が見られました。しかも、こうした目の不調を訴える人の割合は年々高まっています。

同センターは、二〇〇二年三月二十日、東京都から、NPO法人の認証を受け、登録しました。しかし、今後も、国からの援助が見込まれないので、もっぱら、民間団体・個人から集めた寄付金で、検診経費や運営費を拠出していくそうです。

破産管財人を通じた被害者賠償を遂行していくことは、教団の最も大きな責務であることは、言うまでもありません。そして、今も消えない事件の後遺症から、目を背けることもできないでしょう。その後遺症からの回復に直接的に役立つ検診と治療活動に、できるだけの貢献をすることも、アーレフ信者にとっては過去の贖罪の一部として、極めて重要であると考えます。

事件に対する社会の関心が薄れていく中、当事

アーレフ伝言板
Notice Board

者であるわたしたちこそ、事件が残した被害の実態と現実にしっかり目を向け、その回復のためにカを注ぐべきだと考えます。

そして、過去の教団を有形無形に支えてきた現教団の信者、旧オウム真理教の元信者の人に対して、本来ならば、わたしたち自身がなすべきであった、この検診事業への協力を呼び掛けます。



## ●リカバリー・サポート・センターについて

このリカバリー・サポート・センターでは、会の趣旨への賛同者に、年齢・性別・国籍を問わず、会員もしくは準会員として、活動への協力を呼び掛けています。

・正会員　年会費1口　1万2千円——1口以上
・準会員　年会費1口　　6千円——1口以上

会員には、総会（年1回）の案内のほか、広報誌（年2回以上）が提供されるそうです。

また、同会では、会員登録者以外からも、広く一般の寄付を募集しています。

振込先は以下のとおりです。

三井住友銀行　新宿御苑前支店
口座番号（普通）7232785
新宿一郵便局　口座番号　00130-8-70226番

口座名称はいずれも「トクヒ）リカバリー・サポート・センター」です。

リカバリー・サポート・センター（理事長：木村晋介）
〒160-0022　東京都新宿区新宿1-15-6　オリエント新宿201号
TEL 03-5919-0878　FAX 03-5919-0876

詳しくは、webmaster@aleph.to / TEL：03-3305-6732（アーレフ代表）まで。

# あなたに絶対の自由・幸福・歓喜を約束する
## ――宗教団体アーレフ

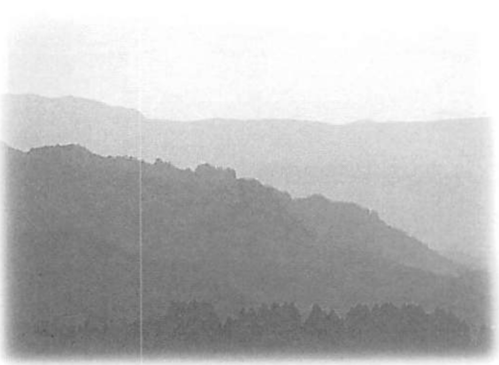


心身の悩みを解決したい
超健康体を得たい
豊かな生活を送りたい
素晴らしい人間関係を築きたい
さまざまな能力・超能力を開発したい
来世も幸福に生きたい
クンダリニーを覚醒させたい
解脱し、悟りを得、永遠の幸福を得たい
多くの人々を救済し、真に幸福にしてあげたい

最高の教義、無上の奥儀、そして解脱した指導者たちのもと、すべては確実に実現します。

### ◇アーレフが誇る、世界でも稀に見る修行体系

アーレフの修行システムにおいては、



◆上座部（じょうざぶ）仏教・大乗仏教・チベット密教の、初歩から最奥儀までのさまざまな瞑想を含む修行法

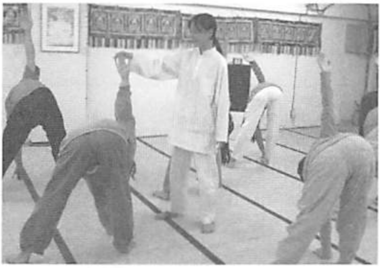
◆ヒマラヤ・ヨーガの数々の秘法

◆アーサナ（座法、体位法）、プラーナーヤーマ（調気法・気を強める呼吸法）、ムドラー（クンダリニー覚醒の秘法）といった伝統的ヨーガ技法

◆気を浄化・強化・循環させる仙道の秘法

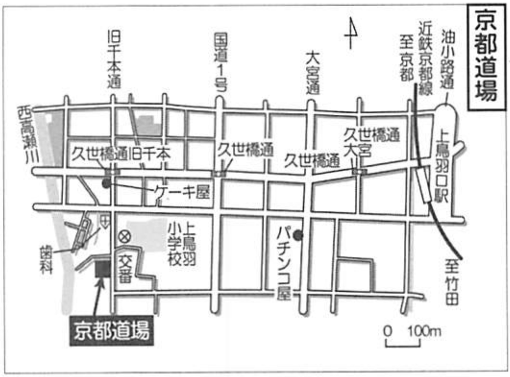
など、数々の貴重な修行法を学ぶことができます。それにより、健康・能力開発・現世の願望成就・心の安定などはもちろんのこと、数年で解脱・悟りの境地に達することも可能になります。



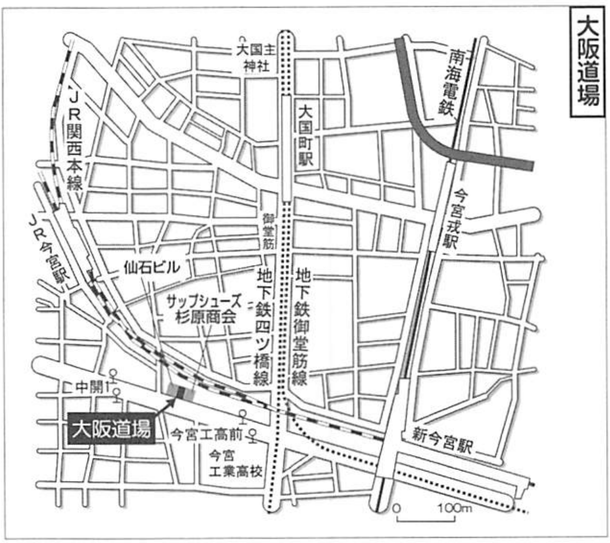




●京都道場
HP：http://kyoto.aleph.to/
メール：kyoto@aleph.to
TEL：090-8192-7160
〒601-8172 京都市南区上鳥羽
鍋ヶ渕町1-5
（近鉄京都線「上鳥羽口」駅から
徒歩15分）




●大阪道場
HP：http://osaka.aleph.to/
メール：osaka@aleph.to
TEL：06-6647-7131
〒557-0022 大阪府大阪市西成区中開1-2-12 東晃ビル4F
（ＪＲ環状線・大和路線（関西本線）「今宮」駅から徒歩7分／地下鉄 御堂筋線・四ツ橋線「大国町」駅から徒歩10分／地下鉄堺筋線「動物園前」駅から徒歩12分／南海電鉄・ＪＲ環状線・大和路線（関西本線）「新今宮」駅から徒歩10分）




●四国連絡所
HP：http://shikoku.aleph.to/　メール：shikoku@aleph.to　TEL：090-3789-8808

●福岡道場
HP:http://fukuoka.aleph.to/　メール:fukuoka@aleph.to　TEL:092-483-2166

●沖縄出張所
HP：http://okinawa.aleph.to/　メール：okinawa@aleph.to　TEL：098-882-3948

## 各道場案内

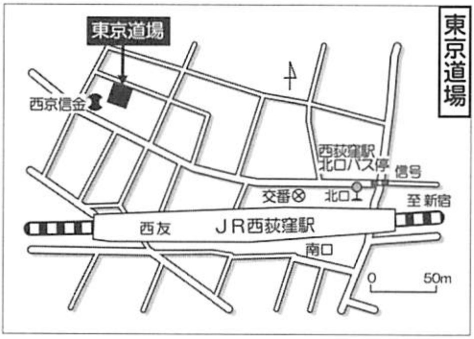
●札幌出張所
HP：http://sapporo.aleph.to/　メール：sapporo@aleph.to　TEL：011-817-6007

●仙台道場
HP：http://sendai.aleph.to/　メール：sendai@aleph.to　TEL：022-723-6370

●水戸道場
HP：http://mito.aleph.to/　メール：mito@aleph.to　TEL：029-309-6091

●船橋道場
HP：http://funabashi.aleph.to/　メール：funabashi@aleph.to
TEL：047-408-0307

●東京道場
HP：http://tokyo.aleph.to/
メール：tokyo@aleph.to
TEL：03-5303-1917
FAX：03-5303-1910
〒167-0042 東京都杉並区西荻北 3-16-8　101号室
（ＪＲ中央線西荻窪駅から徒歩３分）

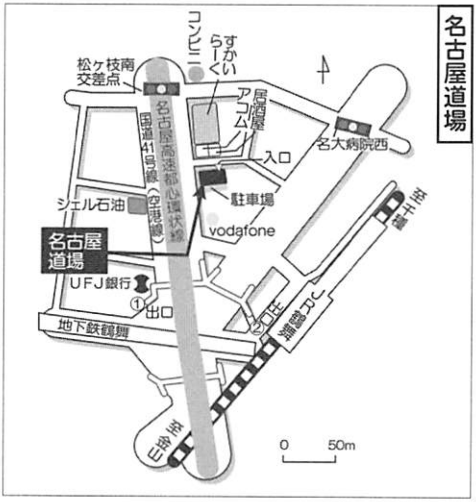



●横浜道場
HP：http://yokohama.aleph.to/
メール：yokohama@aleph.to
TEL：045-243-8079

●金沢道場
HP：http://kanazawa.aleph.to/
メール：kanazawa@aleph.to
TEL：070-5145-4233
（受付時間：13:00-18:00）

●長野道場
HP：http://nagano.aleph.to/
メール：nagano@aleph.to
TEL：0267-22-9700

●名古屋道場
HP：http://nagoya.aleph.to/
メール：nagoya@aleph.to
TEL：052-249-5470
〒460-0012　愛知県名古屋市中区千代田５丁目21番１号 伊藤ビル２Ｆ
（ＪＲ中央本線／地下鉄鶴舞線「鶴舞」駅から徒歩５分）



# 宝石の言葉

あなた方が破滅するか、あるいは真理に到達し、本当に幸福になるか、それはあなた方の心一つなんだよ。あなた方が何を大切だと考え、何を不必要だと考え、どういう生き方をしたら真実に到達できると考え、どういう生き方をしなかったならば、苦悩から解放されるかと考える。

（88・9・1）

## 編集後記

今回の特集では、「情報はわたしたちの心にどのような影響を与えるか」という角度から、情報と心の関係を取り上げました。しかし、それに加えてもう一つ重要な法則があります。それは、「わたしたちは、心を向けた世界から情報を受け取ることができる（＝心を向けた世界との絆が深まる）」というものです。

これは、まさに求道心――つまり「法というものは求めなければ得られない」とか、「光の世界を求めることによって光は生じる」とかいわれる法則と、密接な関係があります。

わかりやすく言えば、「うつむいて地面ばかり見て歩いていたのでは、決して天空に関する情報は得られない。空を見上げてこそ初めて得られる」というのと同じです。

特に、現代のように普通に生活をするだけで落下の方向へといざなわれる時代には、"意図して"上方（じょうほう）へと心を向ける必要があります。これが「高い世界を志向しなさい」「グル・シヴァ大神・すべての真理勝者方を意識しなさい」「常にグルの意思とは何かを考えなさい」といわれるゆえんなのです。

今まで下を向いていた人、そしてそれによって悪趣の世界とつながり苦しんでいた人は、これからは"意図して"上を見る努力をしましょう。高い世界を意識しましょう。三宝を観想しましょう。なぜならそこには、常に救いの手が差し伸べられているのですから――。

＊　＊　＊

『進化』編集部では、皆さんからのご感想・ご意見・ご要望を募集しています。お気軽にお寄せください。

送り先：〒157-0062　東京都世田谷区南烏山6-33-15-101　宗教団体アーレフ『進化』編集部宛

## 【お詫びと訂正】

『進化42号』15ページが「追慕」という言葉で終わっており、次の16ページが「た人は寂しいだろうな」で始まっています。左記のとおり抜け落ちた部分を追加訂正するとともに、深くお詫びいたします。

……追慕は深くても、失われた命が再びこの地上に戻ることは永遠にないことを知りつくしていても、別れた体験をした人の悲しみは癒しがたいのではないでしょうか。
　私も以前は、人様の死に対しては「残された人は寂しいだろうな」……

**進化　VOL.43**

2004年8月　初版第1刷発行
宗教団体アーレフ

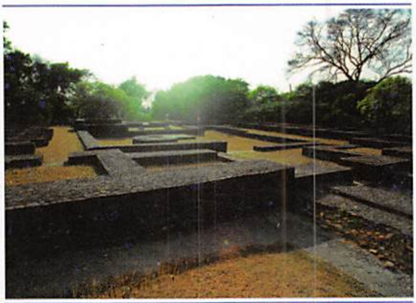


photo: サヘートマヘート（インド）

SHINKA Published by Religious Organization ALEPH

Vol.43

August 2004